



丹波の森づくり

30th
Anniversary

30周年記念誌

(公財)兵庫丹波の森協会

丹波の森宣言

丹波の自然と文化は、現在及び将来にわたる住民共有の財産であって、これを維持発展させることは私たちに課せられた重大な責務です。

今、私たちはこの責務を強く自覚し、お互いに力を合わせ、自然や文化を大切にしながら、これらを生かした「丹波の森」づくりを次のように進めることを宣言します。

①

丹波の健全な発展をそこなうような自然破壊は行わず、森を大切に守り育てます。

②

丹波の自然景観を大切にし、花と緑の美しい地域づくりを進めます。

③

丹波の文化景観及び歴史的遺産を大切にし、個性豊かな地域文化を育てます。

④

丹波の素朴さと人情を大切にし、安らぎと活力に満ちた地域づくりを進めます。

丹波の森づくり 30周年記念事業

昭和 63 年の丹波の森宣言から 30 年余りが経過し、地域市民、企業、行政等が、人と自然と文化の調和する森づくりをめざして数多くの事業に取り組んできました。その日々の営みが素晴らしい今日の丹波の森を創り上げてきました。

今回平成 29 年度から、市民代表、丹波県民局、丹波篠山市、丹波市等で実行委員会を組織して、この 30 周年の記念事業として平成 30 年 11 月 18 日に「丹波の森づくり 30 周年記念シンポジウム」を開催しました。

丹波の森づくりの成果として現在の様子を①「丹波の森のすがた」に、様々に展開されてきた主な事業を②「丹波の森づくりのこれまで」に、そしてまた、未来に向けては③「丹波の森づくりのこれから」として向かうべきライフスタイルや事業の方向性をまとめました。それに合わせて、それぞれの映像を制作するとともに、ロゴマークも公募で決定し、シンポジウムの当日に発表しました。

この中では、これまで多数のもりびとが関わり進めてきた丹波の森の自然や文化と調和した生活、里山を守ってきた市民の活躍の様子、里山で育ててきた野菜等のブランドなどの盛りだくさんの内容が、地域の関係者等に報告され、「丹波の森づくりのこれから」の必要性についても再認識いただくことができました。

また、15 人の小中高大学生、移住者、地域の活躍者の皆さんから、「みんなで語ろう 30 年後の丹波の森」と題して意見発表もいただきました。今を大切に生きているもりびとたちの素晴らしい夢と、実現しようという勇気と内容の具体性やレベルの高さが参加者に感動を与え好評を得ました。

当日、井戸県知事はじめ来賓の方々も多数ご出席いただく中、名誉公苑長の河合雅雄先生にもおいでいただき記念植樹や各種催しも展開して終了しました。

今後も引き続き「丹波の森づくり」がもりびとの理解のもと幅広いライフスタイルをめざして取り組まれ、丹波らしい更なる活性化が進むことを期待しています。後になりましたがこの記念事業に関わっていただきました皆様に厚くお礼申し上げますとともに、今後とも皆様のご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

令和元年 11 月

公益財団法人兵庫丹波の森協会

30年の節目によせて

丹波の森づくりが30周年を迎えました。兵庫県創設150周年とも重なりました。この兵庫の県づくりを象徴しているのが、まさに「丹波の森」ではないでしょうか。それは、人と自然との交流を通じて地域を盛り上げていこうということであり、あわせて何よりも文化や歴史を大切にしていこうという考え方が基本にあるからです。

「丹波の森宣言」は、昭和63年、「北摂・丹波の祭典ホロンピア'88」の後に丹波地域の象徴を創ろうと発せられましたが、30年が経過した今もなお色あせていません。まさに今、私たちが自らの手で未来を創ろうと「丹波の森宣言」を大きな声で読み上げたとしても、まったく新鮮そのものです。

この30年、丹波地域の人たちがひとえにこの宣言を守り続け、また、県もこの宣言にあるような兵庫でありたいと願い、地域づくりに取り組んできました。

この先の兵庫のあるべき姿を描いた「兵庫2030年の展望」において、その目標を“すこやか兵庫”としました。兵庫県全体が、バランスが取れ、調和して、豊かな地域として発展していく。このような概念を“すこやか”という言葉に込め、そうした兵庫づくりを進めようとしています。この目標もやはり、丹波の森づくりと共通しているのではないのでしょうか。

30年の大きな節目を機に、これまでの歩みを更に力強いものにして、次なる丹波の森づくりにともに進んでいこうではありませんか。

「丹精し 守りし山波 輝きて 森なす故郷 未来へつながらん」

「丹波の森宣言」がしっかりと丹波地域の皆さんに受け継がれ、未来につながり、これからも丹波の森づくりが進められることを心から願っています。

令和元年11月

兵庫県知事

井戸敏三



理想郷「丹波の森」を築こう

「平成 30 年 11 月 18 日」丹波の森づくり 30 周年記念の大会が開かれました。この日、私は丹波篠山市長ではありませんでした。

「篠山市」から「丹波篠山市」への市名変更を問う住民投票となり、私自身も信を問うため市長を辞職し、この日 11 月 18 日に住民投票と市長選挙が行われたのです。その結果、約 70% の高い投票率で市名変更が実現しました。

11 月 18 日は丹波の森づくりを未来につなぐ記念の日であり、丹波篠山市を決める住民投票の日と重なり、まさに歴史的な一日となったのです。

「丹波篠山市」への変更の大きな理由は、「丹波篠山」の名を未来に引き継いでいくためには市名にするしかないという考えからでした。

「丹波篠山」のブランドは自然の豊かさ、人々のあたたかさ、おいしいものが沢山など、大変良いイメージで、これは「丹波の森構想」のもとまちづくりが進められてきた大きな成果です。30 年前は、まだまだ経済成長と開発を至上とするまちづくりの思想が主流を占めていましたが、これに対し「丹波の森構想」は開発よりも人・自然・文化を大切にした未来のまちづくりを先駆け、志向したものです。

今、それが大きく花開き「丹波地域」は注目の的ですが。

これからも「丹波の森構想」を中心に、美しく魅力的な、そして住み良い理想郷、丹波の森を築いていきましょう。

令和元年 11 月

公益財団法人
兵庫丹波の森協会
理事長（丹波篠山市長）

酒井隆明



未来へつなぐ、丹波の森づくり

昭和63年9月の「丹波の森宣言」は、丹波地域の誇るべきバイブルであり、憲法であり、これは不易であり、30年経った今でも色あせていません。

この丹波の森構想の推進を合言葉に、丹波地域の人々は、時代を経ながら世代を越えて「もりびと」として、美しい自然と文化の調和した地域づくりの実現に努めてきました。丹波地域に豊かな恵みをもたらした地勢として、本州一低い中央分水界を中心に、国土を南北に結ぶ「氷上回廊」が挙げられます。「氷上回廊」は、古くからこの地に生物多様性や人の行き交いをもたらし、また、豊かな大地は、丹波で暮らす人々の手で丹精込めて育てられ滋味に富む農産物を育みました。

一方、時代の変化に伴い、少子高齢化による人口減少や森や農地の荒廃、伝統文化の継承の難しさなど、地域課題が顕在化しています。特に、平成26年の丹波市豪雨災害では、緑豊かな森も、適切な管理が無ければ、私たちへの脅威となり得ることを学びました。

このように、丹波の森は、私たちの生業の糧であると同時に、多くの学びと教訓を教えてくれる存在であります。私たちは、我がまち・ふるさとに愛着と誇りを持って「丹波の森」を守り、創り、次の世代に引き継いでいくことが大切です。

今後とも、未来への架け橋がつながるよう、地域の皆様とともに今後の展開を考えた「丹波の森づくり30周年記念シンポジウム」をきっかけとして、「丹波の森づくり」にそれぞれの立場で参画いただきますようお願い申し上げます。

令和元年11月

公益財団法人
兵庫丹波の森協会
副理事長（丹波市長）
谷口進一



目次

I はじめに	1
II 丹波の森づくり 30 周年記念誌に寄せて	2
III 丹波の森づくり 30 周年の検証 ～未来へつなぐもりびとライフスタイル～	
1. 丹波の森づくり 30 周年（総括）	6
2. 「丹波の森」のすがた	8
3. 「丹波の森づくりのこれまで」	
①丹波の森づくりのこれまで	15
②丹波の森づくり 30 年の歩み	18
4. 「丹波の森づくりのこれから」	
①30 年後の丹波の森のイメージ	21
・参考1 丹波の森づくりの取組（主なもの）	23
・参考2 丹波の森づくりのこれからのに向けて	25
IV 丹波の森づくり 30 周年記念シンポジウムの記録	
1. シンポジウム発表記録	31
2. 当日記録写真	56
3. 映像とロゴマークの発表	62
4. 丹波の森づくり 30 周年記念事業スケジュール	63
5. 新聞広報	65
V おわりに	67

丹波の森づくり 30 周年記念事業実行委員会



丹波の森

丹波地域の一番の魅力は、どこにいても身近に里山があること。このことを活かして、自然と織りなす豊かなライフスタイルを創造していく。そんな取組を“丹波の森”[※]づくりと呼んでいます。

この取組が30周年を迎えたことから記念シンポジウムを開催。これからの方向性を提示し、ロゴマークを定めて、取組をさらに進めていくこととしました。

※「丹波の森」とは、森林や公園だけでなく、野や里や川なども含めて私たちが日常生活する空間全て＝丹波地域全域を指します。

1 丹波の森づくり

昭和63年に地域の住民が行った「丹波の森宣言」に始まる取組です。

【丹波の森宣言】(昭和63年9月1日)

丹波の自然と文化は、現在及び将来にわたる住民共有の財産であって、これを維持発展させることは私たちに課せられた重大な責務です。

今、私たちはこの責務を強く自覚し、お互いに力を合わせ、自然や文化を大切にしながら、これらを生かした「丹波の森」づくりを次のように進めることを宣言します。

1 丹波の健全な発展をそこなうような自然破壊は行わず、森を大切に守り育てます。

3 丹波の文化景観及び歴史的遺産を大切に、個性豊かな地域文化を育てます。

2 丹波の自然景観を大切に、花と緑の美しい地域づくりを進めます。

4 丹波の素朴さと人情を大切に、安らぎと活力に満ちた地域づくりを進めます。

2 丹波の森づくりのこれまで

4つの宣言を実践する取組を、住民、事業者、行政が一体となって進めてきました。

①森を大切に守り育てます

- ・ 県緑条例で地域の7割を「森を守る区域」に指定
- ・ 住民の力で間伐する木の駅プロジェクトを地域全体で展開
- ・ ホトケドジョウ、クリンソウ、オオムラサキ等を保護、育成

②花と緑の美しい地域づくりを進めます

- ・ 里山とふれあう公園を整備し、多彩な自然体験プログラムを企画して実施
- ・ たんば三街道（主要国道）に並木道を整備
- ・ たんばオープンガーデンで我が家の庭から丹波の森づくり

③個性豊かな地域文化を育てます

- ・ 城下町の景観形成、古民家・洋館を再生
- ・ 恐竜化石フィールドミュージアムをオープン
- ・ シューベルティアアーデ たんばで音楽の森づくり

④安らぎと活力に満ちた地域づくりを進めます

- ・ ブランド農産物のフェアを開催
- ・ 京都丹波との大丹波連携で観光情報発信
- ・ 丹波の森大学で森づくりの実践者“もりびと”を養成等



3 丹波の森づくりのこれから

生活者の視点から将来の暮らし方（ライフスタイル）をイメージし、それを実現するための取組の方向性を打ち出しました。

未来へつなく もりびとライフスタイル

ふだんは



山からほど近い町や山里の集落に暮らし、気候風土の恵みを感じながら山で木を育て、田畑でブランド農作物を育てています。そして、近くの畑で採れた食材で家族団らの食事を楽しんでいます。

なんとといっても、近くの里山を散策し、季節の移ろいを感じる事が一番の楽しみです。子どもたちは学校から帰ると、里山で木登りをしたり、川辺で魚捕りをしたりして、夢中になって遊んでいます。

取組みの方向性



◇丹波の一番の魅力、近くの里山を自然と織りなす豊かな暮らしに活かす

◇子どもたちが源流の水辺で楽しく遊べるようにして、ふるさとを想う心を育む



休みには



四季折々のイベントや祭りなどで、地域内外の人たちが一緒に盛り上がっています。

加えて、里山、水分かれ、恐竜化石をテーマとして週末に開催されるハイキング、木工や水辺のキャンプ、化石発掘体験など多彩なイベントを親子やグループで楽しんでいます。

また、町中や公園で開かれるマルシェやバル、そして農家レストランなどで、採れたての食材を味わう地元ならではの楽しみ方を楽しんでいます。

取組みの方向性



◇森をまるごと「里山」「水分れ」「恐竜化石」のミュージアムにして、楽しみ方をみんなで共有する

◇森のマルシェ・バルを広めて、自慢の食材の旬の恵みをみんなで分かち合う



自分時間に



30年間進めてきた森づくりを継続しながらも、社会環境が大きく変わっていく中、新たな森づくりも進んでいきます。

少子高齢化が進んでも集落の暮らしを守りぬく必要があります。農林業を次の世代へ継承することに加え、新たな担い手を呼び込み、学校や地域で育成していくことが大切です。

また、大交流時代にあって、国外へ発信し、交流を拡大していくことも必要です。

取組みの方向性



◇少子高齢化社会が進んでも集落の暮らしに魅力を感じられるよう、先端技術を農林業に活用する

◇大交流時代にあたり、篠山・柏原城下町などの歴史的な町全体をホテルにして、もてなす



「丹波の森」のすがた

自然と人と文化が調和したこの地域を「丹波の森」と呼び、大切に守り育てていく。

丹波地域の住民は、この思いを昭和63年の「丹波の森宣言」に込め、実践してきた。

その結果が、日本の原風景といわれ、全国に誇れるふるさと丹波の今の姿につながっている。

I 丹波の森づくり

〈“もりびと”による丹波の森づくり〉

丹波の森づくりがはじまって30年。この間、丹波地域では、北摂・丹波の祭典 ホロニア'88から、丹波の森協会の発足と丹波の森大学の開講、ウィーンとの国際的な友好親善、シューベルト交響曲第9番や市民オペラの公演、丹波の森ウッドクラフト展の開催、丹波のむかしばなしの編纂など、さまざまな分野にわたり全県、全国にも誇れる先進的事業が進められてきた。

一方、少子高齢化による人口減少や、自然環境、生活環境の変化により、森や農地の荒廃、伝統文化の継承の難しさ、集落組織の維持困難といった地域課題にも直面している。これら課題を乗り越え、住民・事業者・行政が丹波地域に誇りと愛着を持ち、自然を守り、生活文化を高揚させ、さらに、丹波地域に暮らす住民だけでなく、丹波地域と関わりのある人々や企業も含めて社会活動に積極的に取り組む人を“もりびと”と称し、「丹波の森づくり」に取り組んでいる。

丹波篠山市、丹波市両市全域に地域住民が参画するまちづくり組織（まちづくり協議会、自治振興会等）が設置され、さらには、周辺地域の大学との連携が進み、多くの大学生が地域のまちづくりに加わっている。

また、平成26年8月の豪雨災害を教訓に、森林の防災機能の強化を目指し、災害に強い森づくりも進められている。

▶ 昭和63年 北摂・丹波の祭典 ホロニア'88の開催



昭和63年4月16日 開会式と各地で
取り組まれたさまざまな催し



▶ 平成2年 丹波の森協会設立



▶ 平成5年 ウィーン市13区との友好親善提携



▶ 丹波の森づくり～住民参加の先進的な取組



▲ 丹波の森ウッドクラフト展



▲ 創作オペラ おさん茂兵衛



▲ 丹波の森演劇塾



▲ 丹波のむかしばなし

II 美しくて懐かしい山里風景

地域を象徴するような際だった地形や地物、建造物はないものの、山々に囲まれた盆地にひろがる、川筋、農地、集落などの要素が絶妙なバランスを保って調和している山里風景が特徴で、美しく懐かしいその姿は、日本の原風景と言われている。

〈四季折々に際立つ風景〉

日本海側と瀬戸内海側の中間性の内陸気候であり、盆地特有の年間の寒暖差、特に昼夜の温度差が大きい。このことが、秋の紅葉の名所の多さと鮮やかさ、秋冬の丹波霧に包まれた幽玄な風景の出現といった際立った風景を生み出している。日照時間は、春と秋、中でも4～5月は夏季を上回り、県下で最も陽光輝く明るい春爛漫さくら満開の風景を楽しむことができる。

さらに、特産物である栗の白い花、大豆と稲の葉色の対比、自生種であるセツブンソウやクリンソウなどの花の彩りなど、四季折々に丹波地域ならではの風景が見られる。



▲ 桜咲く川と山



▲ 黄葉に包まれた兵庫陶芸美術館



▲ 厳冬の情景



▲ セツブンソウ



▲ かたくり



▲ 新緑あふれる山



▲ クリンソウ



▲ にしきシャクナゲまつり



▲ 百毫寺の九尺ふじ



▲ コスモス畑

〈地域を抱く山々〉

森林が約75%、比高約600mの山々に抱かれた地域。

山裾急峻な稜線の小さな山々が、自然と視野に入るほどよい近さにあり、幾重にも輻輳し地域を抱くように囲む。

植生は、地域北西部（主に丹波市）の山腹はスギ・ヒノキの人工林、尾根筋はアカマツ・モチツツジの二次林、南東部（主に丹波篠山市）はアカマツ・モチツツジの二次林、北側斜面や谷筋にコナラの二次林。

このことから、二次林の多い南東部（主に丹波篠山市）では、秋に山全体が黄葉し、日が差し込むと黄金色に美しく輝く。



▲ 多紀連山



▲ 幾重にも輻輳した山

〈水分れ域の清らかな川〉

「水分れ」と呼ばれ瀬戸内海側と日本海側に水系をわける上流域。加古川、武庫川、由良川の源流地域。

本州一低い中央分水界を中心に南北にのびる低地帯「氷上回廊」を介して、瀬戸内海側と日本海側の動植物の交流が生まれ多様性を育んでいる。



▲ 水分れ(日本海と瀬戸内海への分岐点)



▲ 川代渓谷



▲ オオムラサキ



▲ モリアオガエル



▲ 蛍が飛び交う源流

〈大粒の名産品を育む田畑〉

山々に抱かれた水分れの地。澄んだ空気、山から流れ込む清らかな水、栄養を蓄えた粘土質の土壌、さらには盆地特有の寒暖差と深い霧が田畑の産物の味わいを増す。(年平均気温は14℃と瀬戸内海側に比べ1～2℃低く、降水量は年間約1,700mmと瀬戸内海側よりかなり多い。年間63日余り、晩秋の10月～11月に10～15日程度の濃霧があり、丹波霧と呼ばれている。)

自然に恵まれた豊穡の地は、古来、四季折々に山の名品、里の逸品を育んできた。全国に名を馳せる栗、黒大豆、大納言小豆などは、古来より朝廷や幕府に献上され、現在も高い評価を得ている。秋の収穫期には、様々な味覚フェアが開催され、多くの来訪者でにぎわう。



▲ 栗



▲ 黒大豆



▲ 大納言小豆



▲ 山の芋

〈山里と街道沿いの集落と町〉

中世から寺社の荘園として発達した長い歴史を有し、また、近世においても城下町が栄えるなど、現在も各時代の歴史的遺産が多く残っている。

農村集落

山裾や川沿いに農村集落。集落の後背地に竹林や栗林。



▲ 農村集落



▲ 集落丸山

城下町(門前町)

城や大きな社寺の周辺に篠山、柏原などの城下町(門前町)。



▲ 篠山のまちなみ



▲ 柏原のまちなみ

陶器町(丹波篠山市今田町)

旧街道沿いには福住、佐治などの宿場町。今田町には陶器町。



▲ 最古の登窯（県有形民俗文化財）



▲ 登窯焼成の様子

巨木銘木

社寺や旧街道沿いに鎮守の森、巨木銘木が残る。



▲ 木の根橋の大ケヤキ



▲ 追手神社の千年モミ（国天然記念物）

洋館、木造校舎

古民家や洋館、木造校舎を保存活用。



▲ 黎明館



▲ 八上小学校

〈農の文化、森の文化〉

中世より京文化の影響を受けて丹波猿楽など「農」を主体とした独自の文化を育んできた。近世には、丹波焼、丹波布などの工芸、丹波杜氏による酒造りが盛んになった。

現在では、丹波の森宣言の基本理念のもと、地域内各所に文化の拠点施設が設けられ、地域文化の育成が進められている。

さらに最近では、丹波篠山市でデカンショ節、丹波焼と2つの日本遺産が認定されるなど丹波地域の個性豊かな文化に対する注目が高まっている。



▲ 春日能



▲ 鬼こそ



▲ 丹波布



▲ 稲畑人形



▲ デカンショ祭



▲ 織田まつり



▲ 熊野神社のはだか祭

〈恐竜が生きた大地〉

平成18年に、約1億1千万年前の地層篠山層群から、国内最大級の植物食恐竜「丹波竜」が発見された。その後も、他の恐竜や最古のほ乳類化石などの発見が続いている。

丹波地域の歴史と文化に、「恐竜が生きた大地で暮らす」というフィールドミュージアム構想の取組が加わることで、地域文化の厚みが増し、個性と魅力が一段と高まることとなった。



▲ ちーたんの館



▲ 丹波竜の里公園

Ⅲ 区域・位置・人口

〈区域〉 兵庫県の丹波篠山市と丹波市、2市からなる。東西 50 km、南北 35 km、総面積は約 871k m²、兵庫県総面積の約 10%。

〈位置〉 京阪神から車で1時間半程度、神戸から約 50 km、京都、大阪から約 60km。

〈人口〉 平成 30 年 11 月の推計人口は 102,824 人、65 歳以上の高齢者人口が増加している。



丹波の森づくりのこれまで

自然と人と文化が調和した地域を「丹波の森」と呼び、大切に守り育てていく。丹波地域住民は、この思いを昭和63年の「丹波の森宣言」に込め、実践してきました。その結果が日本の原風景といわれ、全国に誇れるふるさと丹波の今の姿につながっています。

【丹波の森宣言】(S63.9.1)

丹波の自然と文化は、現在及び将来にわたる住民共有の財産であって、これを維持発展させることは私たちに課せられた重大な責務です。

今、私たちはこの責務を強く自覚し、お互いに力を合わせ、自然や文化を大切にしながら、これらを生かした「丹波の森」づくりを次のように進めることを宣言します。

- S63.6 「丹波の森10人委員会」の発足
丹波総合開発促進協議会(丹波地域10町で構成)が「丹波の森宣言」の起草と「丹波の森協会」の設立に向けて協議を開始。
- S63.8 住民代表による「100人委員会」の開催
- S63.9 「丹波の森宣言」の採択、2万1,616世帯が同意署名
「丹波の森1,000人大会(さわやか県土シンポジウム)」で森宣言を採択。併せて住民主体で丹波の森づくりを進める「丹波の森協会」の設立を決議。
ウィーンの森との姉妹提携の提案採択
丹波の森がウィーンの森のように、都市と丹波地域の一体的な生活圏を形成する姿を提示。
- S63.11 「丹波の森協会」発足(H2財団法人化、H18兵庫丹波の森協会に改称、H24公益財団法人化)
H元~現 ウィーンの森親善訪問開始
ウィーンの森づくりを現地に学ぶため、第1回ウィーンの森親善訪問団を派遣。(4年後のH5.11に丹波地域とウィーン市13区・ヒーツィング区間で友好提携親善調印)
- H7~12 地域文献の収集
自然や歴史の貴重な文献資料の所在調査。図書館、学校、個人が所有する地質、動植物、古文書など約1万件の資料を収集・データベース化。
- H8~現 丹波の森研究所設置
丹波の森づくり実践活動を支援するため、専門研究員を配し調査・研究や技術的指導業務を行う研究所を設置。
丹波の森基金の設置
未来の子どもたちからあずかっている大切な財産を守るための基金を設置。基金運用益を自然環境の保全など丹波の森づくり事業に使用。また、丹波の森づくり募金箱を地域20カ所に設置。
- H10 丹波の森協会設立10周年記念事業実施
- H13 地域ビジョンの策定、活動
「丹波の森構想」の取組成果と課題を踏まえ、住民自らが丹波地域の望ましい将来像を描き、共有し、取り組んでいく指針を策定。
- H20 丹波の森構想20周年検証報告会実施
「丹波の森構想」の策定から20年を経過。この間の地域づくりの成果、課題等を評価・検証し今後の地域づくりの方向性を提言するため、丹波の森構想評価・検証委員会を組織し、検証フォーラム等の開催とともに報告書をまとめる。



丹波の森協会設立記念大会



ウィーンの森親善訪問団

新しい都市基盤の完成

- S61.11 JR福知山線の電化
- H9.3 (篠山口駅まで複線化)
- S62.3 舞鶴自動車道
(丹南篠山口-福知山間)
- S63.3 (吉川-丹南篠山口間)の開通



ホロンピア'88の開催

S63の4~11月に、豊かな自然と文化に育まれた田園と、優れた都市機能が調和した「新しい田園文化都市」の創造をめざして北摂・丹波の祭典「ホロンピア'88」が開催された



宣言1 丹波の健全な発展をそこなような自然破壊は行わず、森を大切に守り育てます

- 丹波らしい土地利用を進める
- 山を守り育てる
- 川や水辺を守り育てる
- △ 農地を守り育てる
- ▲ 野生動植物と共生する(生物多様性を育む)

宣言2 丹波の自然景観を大切に、花と緑の美しい地域づくりを進めます

- 丹波らしい景観形成を進める
- 自然を体験する公園をつくり、活かす
- 森を巡る道を活かし、景観を楽しむ
- △ 花を飾り、もてなす

宣言3 丹波の文化景観及び歴史的遺産を大切に、個性豊かな地域文化を育てます

- 文化と歴史を大切に、町・建物をつなぐ
- 恐竜が生きた大地で暮らす
- 森の中で芸術・文化・スポーツを楽しむ

宣言4 丹波の素朴さと人情を大切に、安らぎと活力に満ちた地域づくりを進めます

- “もりびと”になって、ふるさとを元気にする
- 丹波ブランドを育成し、産業を振興する
- 丹波ファンを拡大し、交流を促進する
- △ 安全安心な地域をつくる

▲S63~現 水分れ域の生物多様性の情報発信

S63にホロンピア'88の会場として、本州一低い中央分水界がある水上町石生に水分れ資料館を建設。水分れ域の地形・地質、ミナミトミヨなど魚類を中心とした生物の生態・分布等にテーマをしぼり、解説展示がされている。入館者は、のべ8万人(H7からの統計値。H29年度は2,704人)。

丹波市はH22から「水上回廊」ホームページを開設し、山に挟まれながら南北に伸びる低地帯の“水上回廊”それをとりまく豊かな自然や文化を通じ、気候変動(地球温暖化)と生物多様性の2テーマに目を向け、丹波市の環境について発信。

□S63~現 各地区の自然と文化を生かした施設づくり(ゾーンの森づくり)

丹波の森の中の各地区に、固有の自然景観や文化景観などを生かした、人と自然、人と人との交流が促進される場を整備。S63にホロンピア'88の会場として、丹波年輪の里、多紀連山O₂の森、四季の森公園、水分れ公園、遊農園かすが、葉草薬樹公園などを先行して建設。その後、さんなん仁王駅、今田ふるさと公園、丹波悠々の森、丹波篠山溪谷の森、青垣の杜、三ツ塚史跡公園、エルムいちじまなどを建設。



○S63~現 文化の拠点施設の整備

S63にホロンピア'88の会場として、舞台芸術を振興するたんば田園交響ホール、春日文化ホールを建設。

■S63~現 伝統技術の伝承

- ・S63のホロンピア'88で立杭陶の郷を会場に「大丹波焼と現代に生きる六古窯展」を開催。
- ・H元に丹波杜氏の由緒や古くからの道具や資料を展示する丹波杜氏酒造記念館を開設。
- ・国指定の選択無形文化財である丹波布の技術を伝承するため、H10に丹波市丹波布伝承館を開設。丹波布伝習生を2年一期で養成している。卒業生は67名(H29年度末)。また、丹波市ブランドとして、その魅力を全国に広く発信するため、H28から地域おこし協力隊(丹波布)1名を配置。

■H3~現 丹波の森大学(旧「丹波の森づくり大学」)、丹波OB大学・大学院の開講

H3に丹波の森づくりの実践者を養成するため、地域づくり、環境づくりの講義と現地研修を交えた講座を行う現丹波の森大学を開校。これまでに274回、のべ1,818人が受講(H29年度末)。

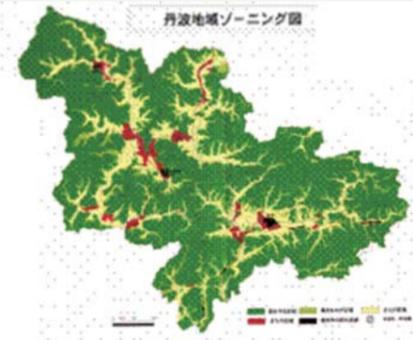
また、生涯学習の一環として、高齢者に学習と交流の機会を提供するとともに、社会の担い手として永年培ってきた知識や経験をより磨き、魅力ある地域社会を創り出す実践者を養成するためのOB大学を開講し、H16には丹波OB大学の卒業生を対象とした丹波OB大学大学院を開校。これまでに269回開講、189人が修了(H29年度末)。



□H6～現 県緑条例による開発の規制誘導

H6に丹波の森づくりを土地利用の面から支援するため県緑条例を制定。地域全体を5区分して開発基準を定め、H7から開発を規制。H15の改正で、原則として開発を禁止する「森を守る区域」を2割から7割に大幅に拡大。その他の区域でも緑化、景観等の独自基準（ガイドライン）を設けて開発を誘導。

丹波の森づくりならではの厳格かつきめ細かな運用を実施。また、H11から住民主体で定める詳細な土地利用計画「地区整備計画」を策定。県内17地区のうち13地区が丹波地域での認定。



▲H8 丹波ビオトーププランの策定

H6に多様な野生動物が生息できる空間（ビオトープ）の保全と創出を目指して、行政をはじめ事業者や県民が各種の事業や日々の暮らしのなかで取り組む全県的な指針となる「兵庫ビオトーププラン」を作成。生物の生息情報とその保全方針を土地利用計画の前提として地図化しているドイツの手法に習ったもので、我が国においては画期的なもの。

H8にこの指針をもとにして、丹波地域ビオトープ地図（プラン）を策定。



□H11～現 森づくりスタッフの養成・里山倶楽部の活動

H11から丹波の森公園の里山を活動の場とし、間伐や枝打ち、刈り払い機などの講習を行う森づくりスタッフ養成事業を実施。里山の自然や生き物とのふれあいを通じて、森づくりに参画する人材の育成を図る。H15には森づくりスタッフOBが、住民自らが文化資源としての森の活用を考え実践する里山倶楽部を創設し、現在、26名が苑内里山林の整備等活動中。



□H14～現 森林管理100%作戦・災害に強い森づくり

H14からスギ・ヒノキ人工林について、市町と連携した間伐・作業道開設等「森林管理100%作戦」を実施。間伐の実施率は15,000/29,000haで52%（H29末）にとどまる。H18から「緑」の保全・再生を社会全体、県民総参加で取り組む仕組みとして「県民緑税」を活用した「災害に強い森づくり」を推進。住民参画型森林整備を丹波市4地区で実施。H24から緑化基金等を活用した住民参画型里山林再生事業を篠山市4地区、丹波市16地区で実施。住民団体による森林・里山整備活動が広がりつつある。

▲H16～現 貴重動植物の保護に取り組む団体の活動

H16からホトケドジョウを守る会が継続的なフィールド調査や探索活動のほか、生息地の再生・造成や危険分散地への放流などの保全活動、住民への啓発活動を実施。

環境省及び県の絶滅危惧種に指定されているホトケドジョウは、県内では丹波地域のみに確認されており、優れた自然環境と、日本海側と瀬戸内海側の生態系が交錯する氷上回廊の貴重さを物語っている。



□S63～現 丹波年輪の里の木工教室等

地域の木工クラフト活動の拠点として、多種多様な木工教室を開催。全国規模のクラフト展の会場となっている。

来場者は、のべ559.8万人（H29年度は9.4万人）



- ・S63の丹波年輪の里開設時から、初心者から上級者まで対応可能な特別木工教室を開催。
- ・S63から木工作品の素晴らしさや木の温もり、安らぎを広く県民に普及・啓発するため、丹波の森ウッドクラフト展（木のおもちゃ大賞展）を全国公募で開催。全国の多くの方々から木に親しみ、自らの手でものを創り出す創作の喜びあふれる作品の出展があり、H29には第30回を迎えた日本最大規模の公募展。



- ・H4から丹波地域におけるクラフト文化の向上、創作活動の普及を図るため、全国各地で活動しているクラフトマンが一同に集い、園内での自由な作品展示や販売、来園者と交流するアートクラフトフェスティバルを開催。
- ・H24からは丹波地域で創作活動をしている木工家の木の椅子を展示公開する「座っ展-丹波でうまれた木の椅子」を開催。木とのふれあいの中で、物づくりの楽しさを伝え、森林や環境を考える心を育てる木育を推進。



○S63～H12 「ふるさと桜づつみ回廊」の形成（ネットワークの森づくり）

S63に丹波町サクラ協会が篠山川兩岸の桜並木づくりを開始。H元は篠山町が建設省「桜づつみモデル事業」の認定を受け篠山川の桜並木を整備。H3から県が瀬戸内海から日本海を結ぶ桜の回廊を整備。丹波地域内だけ柏原川と篠山川の二股に分かれており、一斉に咲く様が随所から見られ、春の訪れを一層華やかに印象づける。



○H元～現 たんば三街道の並木道整備（ネットワークの森づくり）

H元に県がたんば三街道の愛称「丹波の森街道、水分れ街道、デカンショ街道」を決定。H2に標柱やシンボルモニュメントを設置。H8からネットワークの森づくりとしてケヤキ、モミジ、クスノキの並木を整備。H17にたんば道路景観ガイドラインを策定。H19に「たんば三街道」の名称で、「川代恐竜街道」も含めて国が日本風景街道に認定。



■H5～現 県景観条例による地区指定等

- ・H5 篠山市城下町地区が歴史的景観形成地区
 - ・H8 デカンショ街道地域が風景形成地域
 - ・H20 丹波篠山口IC周辺地区が沿道景観形成地区
 - ・H21 篠山市上立杭地区が歴史的景観形成地区
- また、H17より篠山市で3件、丹波市で5件の古民家、洋館等を景観形成重要建造物等に指定。

- H17 篠山市大山上の西尾家住宅
- H18 丹波市青垣町の廣田家住宅
- H19 同市同町の平岩家住宅
- H20 篠山市日置の中立舎
- H21 丹波市柏原町の幽石軒
- H22 同市同町の大新屋上山代官所跡
- H26 篠山市糶ヶ坪の八上小学校
- H27 丹波市春日町の畑家住宅



■H5～現 古民家や洋館の再生

- ・H5 旧篠山町役場を観光拠点施設に活用（大正ロマン館-篠山市）
- ・H21 古民家を宿に活用（集落丸山-篠山市）
- ・H27 古民家をホテルに活用（NIPPONIA-篠山市）
- ・H27 旧水上新高等学校校舎をレストラン等に活用（たんば黎明館-丹波市）
- ・H28 大学と地域住民が連携して古民家をワーキングスペースに活用（衣川會館-丹波市）
- ・H30 古民家を改修保存（俳人細見綾子生家-丹波市）



○H7～現 丹波の森国際音楽祭シュベールティアデたんばで音楽の森づくり

「みんなで創ろう音楽の森」を合言葉に始まり、国内外からアーティストを招聘し、地域交流・国際交流の輪を広げる国際音楽祭を民間ボランティア中心の実行委員会が開催。オープニングコンサートやガラ（ファイナル）コンサート、丹波地域の住民が企画・運営する「街角コンサート」（10会場）、子どもたちにプロの生演奏を届ける「ふるさと音楽広場」（幼・小）、「キン・コン・カン・コンサート」（中・高）などを実施。20年以上の取組により、今では丹波地域の秋の風物詩となっている。地域内外からのべ11万人超が来場。全国に誇れるイベント。



■H8～現 講座「丹波学」の開催

「丹波の森」に対する理解を深めるとともに、丹波地域の多様な資源や魅力を再発見し、主体的に地域づくりに参画しようとする意欲の高揚に結びつけるため、丹波地域の伝統、文化、歴史、風俗、人物、地理、言語などを総合的に研究する地域学として全5回の講座からなる「丹波学」を開催。これまでに102回、のべ1,975人が受講（H29年度末）。



■H12～現 「もりびと」の育成

丹波の森づくりを持続的に進めるため、生まれ育った地域に愛着と誇りを持つふるさと意識の高い人材を各年代で育成。

H12から「たんば子ども塾」を開催。丹波地域の6高校を会場に、高校生が先生となり小学生対象の工作体験や科学実験、生きもの採集など、各高校の専門分野や所在地域の特色を活かした講座を開催。

H21から「丹波の森若者塾」を開催。丹波地域の6高校の生徒が、地域に活動拠点をもつ3つの大学の学生のサポートを受けながら、特産品を活かした商品開発など、ふるさとの魅力を発見し、活かす研究・体験・交流活動を実施。

H23から小学校のふるさと学習の成果発表を実施。小学校で行われているふるさと学習の成果を、発表会「たんばっ子！学びフェスタ」やパンフレット「丹波地域まちの自慢発信事業」で地域内外に広く発信。



■H15～現 「もりびと」による地域活動の展開

H15から地域団体等が取り組む地域活性化のための先駆的事业（都市との交流、子育て支援、健康づくり、まちづくり、環境保全など）に助成する交流促進パワーアップ事業を実施。これまでにのべ414団体が事業を展開（H29年度末）。県民交流広場の本格実施に伴いH22に篠山市でまちづくり協議会、H18に丹波市で自治振興会（自治協議会）が、小学校区44地区全てに設置され、地域活動の推進母体が整った。その後、両市とも支援制度を設け活動を推進。

また、過疎化、高齢化等の進展する地域で、地域の自主的・主体的な取組による賑わい創造や活性化、農業振興、定住、空間活用等を促進し、地域の再生を総合的に支援するため、H20から小規模集落元気作戦がスタートし、H22から地域再生大作戦と銘打ち、丹波地域の小学校区単位組織で数多く実施。県内実施地区66地区のうち丹波地域は18地区と最も多く活動が展開されている（H29年度末）。

また、地域内のNPO法人数は65団体で、10年前の38団体から大幅に増加。

・丹波市神楽（しぐら）地区（一般財団法人 神楽自治振興会）

H24に田舎暮らし体験施設（かじかの郷）を整備。あわせて地域にある交流拠点を積極的に活用し、多彩な交流イベントを通じてUIJターン調査や空き家利活用意向調査を実施するなど、戦略的に移住を推進。



・丹波篠山市雲部（くもべ）地区（くもべまちづくり協議会）

H25に「稼ぐしくみ」づくりとして、閉校となった雲部小学校の校舎を生かした直売所、加工施設、レストラン等を整備し、「里山工房くもべ」を開設。



・丹波篠山市城南（じょうなん）地区（城南地区まちづくり協議会）

H28に「交流やにぎわい」づくりとして、閉園となった城南保育園の園舎を生かした同地区生産の農産物の直売や加工、加工品の販売を行う、カフェハウス併設の食と農の交流拠点「アグリステーション丹波ささやま」を開設。

- ・H17 から丹波地域の里山に準絶滅危惧種の国蝶オオムラサキが舞う姿を取り戻し、良好な里山環境を次世代に繋げていくため、飼育を開始。
- ・H8の丹波の森公園開苑時に河合雅雄氏の提唱によりオオムラサキの幼虫を育てる母なる木エノキを170本植栽。H21にオオムラサキの第1回放蝶会を実施。現在、20の小学校・幼稚園、1つの高校で幼虫の飼育が行われるなど環境教育に役立つと好評。また、H22に「国蝶・オオムラサキが飛翔する里山空間を創造する」を目的に兵庫丹波オオムラサキの会が設立され保全活動を実施。
- ・H20から多紀連山のクリンソウを守る会、H24から妙高山のクリンソウを守る会が活動開始
- ・H24から丹波市青垣町松倉自治会と神楽自治振興会がバイカモの保護活動を開始。
- ・H25に貴重な動植物の保存活動を行っている住民団体(H28末で24団体)と行政が連携し、環境パートナーシップ会議(住民団体、行政)を設立。住民参加型フォーラムやエコツアーなどの環境学習を開催。貴重な動植物を保全・再生する意識の高揚を図っている。



□H19～現 企業の森づくり

企業が社会貢献活動の一環として、所有者に代わって地域の森林を整備・保全する活動に対し、森林作業の技術指導などの支援を実施。H19に県内初となる企業と住民による森づくり協定を、三菱電機㈱と丹波篠山市油井の住民が締結。これまでの活動企業は全県で34社、内6社が丹波地域であるが、活動を休止する企業もあり、現在は以下の3社が活動中。

- 三菱電機㈱ 油井鎮守の森(丹波篠山市油井)
- アサヒビール㈱(西宮工場) 遠阪アサヒの森(丹波市青垣町遠阪)
- 東洋電機㈱ 甲賀の里の森(丹波市水上町成松)



▲H19～現 県立森林動物研究センターの開設

H19に野生動物の調査研究を行う拠点施設を全国に先駆けて開設。人と野生動物と自然環境の調和のとれた共存をめざすことを基本理念とし、野生動物による農林業被害等の軽減、森林資源や生物資源等の持続的利用、野生動物と共存する地域文化の創出などを基本目標とする。施策実行手段の確保のために「森林動物専門員等制度」を創設。



△H20～現 有害鳥獣被害対策の推進

鳥獣被害対策を推進するため、篠山市はH20に鳥獣被害対策推進協議会を設置し、H27には獣害に強い集落づくり支援員を、H29に鳥獣被害対策実施隊を配置。丹波市はH25から丹波市有害鳥獣担当専門員2名を配置。

△H元～現 花づくり活動の普及・支援

H元に丹波10町(現2市)から選定された10小学校をモデル校に指定し、種子や育苗資材を配付する「花いっぱい運動」を開始。H6に丹波の10地区を対象に、地域の花づくり愛好家などを対象とした、園芸や緑化活動に関する学習機会を提供する「花と緑の村づくりモデル事業」を実施。H13から花、緑、園芸に関する知識の習得及び地域での普及活動のリーダー育成を目的に「花と緑の教室」や「園芸教室」を開催。



■H2～現 「丹波景観100選」の選定

H2に丹波の魅力ある景観を広く伝えるため、丹波景観100選を指定し、それを盛り込んだ「丹波の森ガイドマップ」を作成。H3には「景観百選ビデオ」を制作し丹波の魅力を発信。

○H2～現 ハイキングコースの設定(ネットワークの森づくり)

H2からハイキングイベント「丹波の森を歩こう」が開始。H8に16のハイキングコースを丹波の森径ガイドマップで紹介。篠山市では、H22に山歩きガイド、H26に24ルートの登山マップを作成するとともに、毎年5月5日を「GoGo! さとやまの日」と定め、多紀連山の山開きなど登山イベントを開催。



■H4～現 丹波ランドスケープ広域計画による風景形成

H4に県が丹波ランドスケープ広域計画を策定。地域の風景を構成する山々、川、農地、集落等の要素と構造を明らかにし、地域の自然や文化を大切にしたい風景形成の考え方、方向性を示したもので、丹波の森づくりを進めるための基本的な計画。県下各地域で同様の計画が策定されているが、当地域のように上位に基本理念を置く計画はない。その後、H20に県景観条例に根拠づけられた計画として、丹波地域景観マスタープランを策定。



○H7～現 サイクリングコースの設定(ネットワークの森づくり)

H7に丹波サイクリングロード・丹波の森径基本構想を策定。H28に篠山市がサイクリングコースを設定しウェブで公表。市内を自転車でする人に役立ててもらうため、日本遺産に認定された名所旧跡や観光スポットなどを含めたコースを紹介するホームページ上の地図「ささやまサイクリングマップシステム」を作成。トライアスロン男子の五輪代表を務めた八尾彰一さんが各コースを完走して監修。

■H10～現 「丹波のむかしばなし」発行

丹波の子どもたちがこころ豊かに育ってほしいという願いから、丹波に伝わる民話をまとめた「丹波のむかしばなし」をH10からの12年間に10巻発行。全巻で120の民話が取められており、これまでに800冊以上を販売(H29年度末)。H22から、丹波のむかしばなしを語り継ぐ「語り部くらぶ」の活動を支援。



■H11～現 中心市街地活性化基本計画と街なみ環境整備計画による柏原城下町の景観形成

H11に柏原町が中心市街地活性化基本計画を策定、H12に地域の企業、商店、個人が(株)まちづくり柏原を設立、古民家とテナントをマッチングするテナントミックス事業を展開。H21に第2期、H28に第3期の中心市街地活性化基本計画を策定。また、H15に柏原町が城下町周辺地区の街なみ環境整備計画を策定。通路や小公園などの地区施設を整備、街づくり協定による歴史的建造物の修景を助成。



■H12～現 篠山城大書院の再建

篠山城大書院は天守のなかった篠山城の中核をなす建物。S19に消失したが、市民の熱い願いと尊い寄付によってH12に再建。



○H13 映画「森の学校」完成上映

こどもの生き生きとした命を育み、その身体に命の大切さを感じさせる自然の中での楽しい遊びの世界を、初代丹波の森公園長河合雅雄氏の著「少年動物日記」を脚本として映画化。丹波の森づくりの理念を具体化する映画で、この映画を通して「自然と家族を語る」シンポジウムを開催。

○H14～現 子どもミュージカル体験塾の開催

H14から子どもミュージカル体験塾を開催。豊かな感性や表現力、コミュニケーション能力を育むとともに、子どもたちが創造する楽しさを体験し舞台芸術に親しむことを通じて、舞台芸術創造活動のすそ野の拡大を図る。約40名の子どもたちが15回程度のレッスンを重ね、劇団に所属する俳優との共演による発表公演を行っている。



○H14～21 創作オペラおさん茂兵衛の上演

H14から上演された丹波地域発の市民オペラ。近松門左衛門や井原西鶴の作品に登場する「おさん茂兵衛」を題材に、物語のゆかりの地である丹波での逸話をモチーフにした創作オペラ。市民が中心となり、創作、上演。



・丹波市上久下地区(上久下自治協議会)

H18の恐竜化石発見を機に「恐竜の里づくり協議会」を発足させ、観光客をもてなす取組を開始。H23から地域内公募で出資者を募り「企業組合元気村かみくげ」を設立。地域の特産品販売、化石発掘体験など地域経済の活性化を図り継続性のある取り組みを推進。



・丹波市春日部地区(春日部自治協議会)

H29にみんなが集いふれあう交流の場として、地域拠点の春日部荘を改修し、栄養士のメンバーが地元食材を使ったケーキなどを提供する「カフェはるべ」を開設。

・丹波市和田地区(和田自治振興会)

江戸時代後期の天保11年から続く薬草栽培を地域の活力として「さんなん和田漢方の里まつり」を行い、全国に発信。丹波市立薬草・薬樹公園と兵庫医療大学の連携に地域も参加し、薬草を使ったうどんを開発したほか、もうひとつの特産品である若松の商品化にも取り組んでいる。

・丹波篠山市福住地区(福住地区まちづくり協議会)

地区の将来ビジョンの一つ「世界と交流する“新しい宿場町”」実現のため、地域外への魅力発信を目的として冬の夜空に花火を上げる「ふくすみ雪花火」を実施。



△H16～現 防災リーダーの育成

地域防災の担い手を育成するため、「丹波地域防災リーダー講座」や「防災情報活用研修」において、防災情報サイトからの情報入手体験など実践的な講義及び演習を実施。



○H16～現 ぶらり丹波路、旅丹、大丹波連携による観光情報の発信

H16から「ぶらり丹波路」と題した丹波地域のイベント情報紙を四季毎に発刊。H22から京都府と兵庫県にまたがる大丹波地域(2府県、6市1町)が連携して観光情報の発信を行い、誘客を促進。



H27から旅人が見たありのままの丹波路の写真集をウェブサイトに掲載、掲載写真はフリーダウンロード可能となり好評を得ている。

■H18～現 大学生による地域貢献活動

H18に関西大学が丹波市青垣町、神戸大学が篠山市、さらにH21には関西学院大学が丹波市柏原町に活動拠点を開設。

H28に神戸大学・篠山市フィールドステーションを開設。地域住民と連携したまちづくり活動を展開。これまで17地区、のべ10大学46団体という他地域に見られない多彩な活動を大学間連携フォーラムを開催しながら展開。



△H20～現 丹波市有機の里づくりの推進(丹波市)

丹波市が全国40箇所の「有機農業モデル地区」のひとつに選ばれたH20に、丹波市有機農業研究会を核にして、「丹波市有機の里づくり推進協議会」を設立。H31に市立農(みのり)の学校を開校予定。



△H21～現 日本一の農業の都丹波篠山市の農都宣言(丹波篠山市)

H21に、食の安全と安心を未来にわたって育み、篠山特有の自然を生かし、農業の新たな先駆者として更なる振興を実現するため、次の3つを基本理念とし、「自然の気候風土に恵まれた日本一の農業の都 篠山市」を宣言。

1. 「いのち」を支える「農」を未来に育みます。
1. 「農」を支える「人・土・水」を大切に育みます。
1. 「丹波篠山」を支える「特産物」を育みます。

H26に、農業と農村を大切に守り続け、日本の「農都」として篠山の農村風土を継承してきた素晴らしい環境の中で、地域の基幹産業である農業を大切に、市をあげて農業振興に取り組むことを明確にするため、「篠山市農都創造条例」を制定。

H28には、先人が築いてきた、かけがえない市民共有の財産「農都」を次の世代に引き継ぐため、「篠山市農都創造計画」を策定。また、H28に、新規就農者や農業後継者の学びの場とする「丹波篠山農学校」を開校。

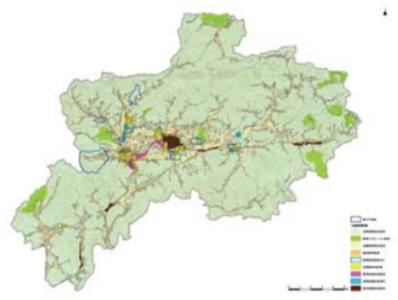


■H23～現 丹波篠山市まちづくり条例の改正(丹波篠山市)

H23に良好なまちづくりを推進するために、一定規模以上の建築や開発行為を行う場合の事前協議や許可申請について、景観や住環境に影響を与えないよう適正な開発誘導を図るため、建築物の用途変更や一定規模以上の土地利用の目的変更の行為を許可対象に加える条例を改正。

H26に美しさと豊かさを備えた篠山の風土、その固有の価値を継承し発展させる「農の都」を実現するため、まちづくりの基本姿勢と役割を明らかにし、土地利用を推進するため、土地利用基本計画を策定。上記事例と連携。

H30から太陽光発電施設の規制を強化。



□H24～現 木の駅プロジェクトの展開

市民の力で間伐、軽トラで搬出、木の駅(ストックヤード)に持ち込み、換金する仕組み。H24から篠山市で、H27から丹波市で、NPO法人の主権により取組を開始。両市は原木買取価格に上乗せするなどで支援し普及に努めている。地域全体で活動が行われているのは、県内で丹波地域のみ。H27時点の参加者数は約140人、集荷量は約130t。



□H8～現 丹波の森の中核となる施設づくりと多彩な自然体験プログラムの実施(シンボルの森づくり)

丹波の森公園

H8に丹波の森づくりの拠点施設として丹波の森公園が開苑。芸術文化や自然体験等様々なプログラムを実施。来場者は、のべ547.7万人(H29年度は23.7万人)

- ・H15から小学生が、森の中での様々な生活・自然体験を通して、本当の自然を知り、親しみ、さらに自然や生命の大切さを体感する縄文の森塾を開催。H18からはキャンプを取り入れて実施。
- ・H20から丹波の豊かな自然とふれあい、そこに息づく草木や生きものを観察しながら、自然や生命の大切さを学ぶため、親子家族を対象に、里山ふれあいハイキングを開催。



ささやまの森公園

H14に自然と人が共生する豊かな森づくりを推進するふるさとの森公園としてささやまの森公園が開園。自然体験ができる様々なプログラムを実施。来場者は、のべ28.9万人(H29年度は1.5万人)

- ・H14から秋の里山まつりを、H15から春の里山まつりを開催。木工クラブ、草木染め、地元食材の料理提供などのイベントを実施。H15から夏に里山コンサートを開催。
- ・H20から森の学校を開催。小3～6年生が年間約10回のシリーズで里山を体験。H28からは篠山東雲高校生にも対象を拡大し、里山文化を学習。
- ・H28から5月5日の里山の日に特別企画として間伐材を使った動くおもちゃづくりなどを実施。



丹波並木道中央公園

H19に広域公園として丹波並木道中央公園が開園。都市と農村の交流・地域活性化、森林の新たな保全・再生モデルの実現を目標に自然とたふぶりふれあえる公園として事業実施。全国的にも珍しい製材所のある都市公園。園内の森林を間伐し製材している。来場者は、のべ108.7万人(H29年度は14.2万人)

- ・H23から、県園芸公園協会・兵庫丹波の森協会が指定管理者となり事業を実施。公園内の間伐材を利用した大人の木工教室、こどもクラフトのイベントを実施。
- ・H24から篠山市と連携して大人を対象とした里山スクールを開催。H24から毎週月曜日に木工サポーターの活動として、公園の間伐材を利用した施設内ベンチの作成やスキルアップ講座を実施。
- ・H27からゴールデンウィークに木登り体験ツリーイングを実施。
- ・H28から5月5日の里山の日に特別イベントを実施。



■H14～現 名木巨木の保全

H14に「丹波の森 名木ガイド」の初版発行(H28に改訂版)。巨木120本と樹林20カ所を紹介。

H29には環境パートナーシップ会議が篠山市内の名木巨木をめぐるエコツアーを開催、多数の参加を得た。



■H16～現 国重要伝統的建造物群保存地区に選定

「篠山まちなみ保存会」、「福住まちづくり協議会」が歴史的な町並みの保存活動を進め、

- ・H16 篠山市篠山伝統的建造物群保存地区(河原町地区)
- ・H24 篠山市福住伝統的建造物群保存地区が国重要伝統的建造物群保存地区に選定される。H29から外観を修理または修景する場合の助成制度を運用。



■H17～現 民俗芸能保存・継承事業

数多くの伝統芸能や伝統文化を育んできた丹波地域は、室町時代から江戸時代の各時代の芸能がまんべんなく継承されているのが特徴。丹波地域の民俗芸能、伝統文化を地域の文化資源として再評価し、保存・継承の気運醸成、地域の活性化のため、民俗芸能・継承事業を実施。



■H17～現 兵庫陶芸美術館の開館と陶芸文化の振興

日本六古窯のひとつ丹波焼の里丹波篠山市今田町に立地。「土と語る、森の中の美術館」として、地域の文化資源や豊かな自然環境をいかしたエコミュージアムの環境を創出。全県的な陶芸文化の振興を図り、陶磁器を通じた人々の交流を深めることを目的に、各種展示会のほか、次世代を担う人材養成、学校等との連携、陶芸ワークショップ等の創作・学習事業を実施。



□H18～現 恐竜化石等を活かしたまちづくり

H18 丹波市山南町で約1億1千万～1億年前にできた地層(篠山層群)から恐竜化石発見、発掘調査を実施(化石発掘調査第1次～第6次)

発掘には住民がボランティアとして参加。さらに、発掘調査中断後、H26から「新たな発見で地域おこしを」と住民主体による試掘調査を開始し、H27の卵の化石発見につながった。

H20 篠山市において、国内最古級のほ乳類化石発見。発掘調査実施後、様々な化石発掘体験イベントを開催

H20 丹波市が丹波竜の里計画を策定。計画に基づく事業を展開(ちーたんの館、元気村かみくげ、丹波竜の里公園)

H22 地元住民を中心に「たんば恐竜・哺乳類化石等を活かしたまちづくり協議会」設立(H29丹波地域恐竜化石フィールドミュージアム推進協議会に改称)

H26 「恐竜化石フィールドミュージアム構想」を策定 篠山層群とまわりの地域を野外博物館と位置づけ、恐竜が生きた大地で暮らすという構想のもと活動開始



■H18～現 大学生による地域貢献活動

H18 に関西大学が丹波市青垣町、神戸大学が篠山市、さらにH21には関西学院大学が丹波市柏原町に活動拠点を開設。

H28に神戸大学・篠山市フィールドステーションを開設。地域住民と連携したまちづくり活動を展開。これまで17地区、のべ10大学46団体という他地域に見られない多彩な活動を大学間連携フォーラムを開催しながら展開。



また、H28から県民局が主体となり、丹波地域で田舎暮らしを実践している人と都市部の若者子育て世帯が交流する場「たんば暮らしファン交流カフェ・セミナー」を開催し、移住・定住のきっかけづくりを行っている。

□H23～現 丹波すぐれもの大賞による顕彰

H23から地元企業の優れた企画力・技術力をアピールし、地域の産業を活性化するため、「丹波すぐれもの大賞」による表彰を行い、広く情報発信している。これまでに、きらめき(製商品)部門で19件、わくわく(食料品)部門で15件が受賞し、その後、多くが全県レベルの表彰へとつながっている。H30からときめき(事業イベント)部門を新設。旧雲部小学校をカフェレストランに活用した里山工房もべが初受賞。



□H23～現 丹波栗、黒大豆、大納言小豆のブランド戦略、フェア

H23から大阪等の都市部で丹波味覚フェア、H25から「丹波栗食べ歩きフェア」、H28から「丹波大納言小豆ぜんざいフェア」を開催。

H26に「日本一の丹波栗」の産地復活に向けた基本構想、H28に「丹波大納言小豆ブランド戦略」を策定し、生産基盤の強化とブランドイメージの定着を戦略的に推進。

また、丹波篠山市では「丹波篠山味まつり」、丹波市では「丹波三宝スイーツフェスティバル」を開催。



□H24～現 丹波市森林づくりビジョンの策定(丹波市)

丹波市域の75%を占める森林は県下第5位の面積を有し、多面的な働きを有する大切な資源。中長期的な視点に立った森林のあるべき姿や保全・整備の方向を明らかにし、市民との連携のもと市全体で支える体制を構築するため、「丹波市森林づくりビジョン」を策定。

○H25～現 ささやまの川・水路づくり指針の策定(丹波篠山市)

生き物の生息環境を保全するための基本方針として、「ささやまの川・水路づくり指針」を策定。H25に実施戦略として、『未来につながる「篠山の美しい自然と生き物」を基本目標に、かつての美しい自然と生き物を復活させることを目的とした「生物多様性ささやま戦略」を策定。また、H28からコンクリート三面張りの水路を生物多様性・多自然型の護岸に改修する「ふるさとの川再生事業」に取り組む。



H30に河川における生き物調査を実施。

□H26～現 丹波篠山市ふるさとの森づくり条例の制定(丹波篠山市)

豊かな森は多様な命を育み、森で育まれる水は農村生活に必要な水資源となり、身近な植物や農作物を育む。命を育む豊かな森と水を未来につなぐため、「ふるさとの森づくり条例」をH25に制定。H26から植林地の間伐100%（325ha×20年）がスタート。

△H28～現 丹波市版半農半公制度(丹波市)

都市部から丹波市に移り住んで、丹波市の非常勤一般職員として一定の生活費を得ながら農業に従事できる環境を提供する制度を創設。期間終了後は、市内で農業の担い手として活躍できるよう支援し農業後継者の育成を図る。

▲貴重種の観察会

- ・セツブン草（丹波市）
- ・カタクリ（丹波市）
- ・クリンソウ（丹波篠山市・丹波市）



△H15～現 たんばオープンガーデンで我が家の庭から丹波の森づくり

丹波地域の園芸愛好家で作る「丹波の森花くらぶ」が長年にわたり自主運営を続けている。限られたスペースでの植栽に工夫を凝らし、現在では、ガイドマップが作成されるなど、丹波地域の春を愛でる行事として定着。



■H22～現 丹波篠山市景観条例等の制定(丹波篠山市)

H22に先人たちが長い歳月をかけて日々の営みとともに培ってきた丹波篠山の景観を、未来に向けて継承し、ともに創造していくことを目的に「篠山市景観条例」を制定。景観法に基づく景観行政団体となり、同条例を施行。翌H23には、地域の景観形成の考え方、ルール、景観形成を推進するための施策を定め、行政・市民・事業者協働の取り組みにより、地域の良好な景観形成を実現するため、「篠山市景観計画」を策定。H26に地域の特性に応じた良好な景観形成や公衆に対する危害を防止するため、屋外広告物のルールを定める篠山市屋外広告物条例を制定。



景観行政、屋外広告物行政とも、県行政から独立して取り組むこととなった。

△花祭りの開催

- ・野上野れんげまつり（丹波市）
- ・にしきシャクナゲまつり（丹波篠山市）
- ・清住コスモスまつり（丹波市）
- ・丹波もみじめぐり（丹波市）



- H29 太古の生きもの館を開館
篠山層群についての学習や体験が行える施設として、篠山市が丹波並木道中央公園内に開館
- H29 丹波市の呼びかけで、北海道むかわ町、熊本県御船町と篠山市、丹波市の4市町が連携する「にっぽん恐竜協議会」を発足。



○H21～現 丹波篠山まちなみアートフェスティバルの開催(丹波篠山市)

城下町の風情を残す国重要伝統的建造物群保存地区で町屋や古民家、商家群の街角を舞台に彫刻・立体造形・絵画・写真などの美術・工芸作家の作品でアート空間を創出するフェスティバルを開催。

■H27～現 丹波篠山市に2つの日本遺産(丹波篠山市)

H27に時代ごとの風土や名所、名産品などを歌詞に盛り込み歌い継がれてきた「デカンショ節」が、H29には丹波焼をはじめ、日本古来の技術を継承している「日本六古窯」が地域の歴史的魅力や特色を通じて、我が国の文化・伝統を語るストーリーとして日本遺産に認定。さらに、H27に篠山市がユネスコ創造都市ネットワーク加盟都市となり、クラフト&フォークアート分野で丹波焼と地元食材をマッチングさせた「丹波篠山食と器のピエンナレ」などの活動を進めている。



■H29～現 篠山城下町地区が国景観まちづくり刷新モデル地区に指定(丹波篠山市)

全国10地区の一つとして国が指定。電線地中化や道路美装化などを進め、城下町の魅力に磨きをかける。



○スポーツ大会の開催

- ・丹波篠山ABCマラソン大会（丹波篠山市）
- ・三ツ塚マラソン大会（丹波市）
- ・全国高等学校女子硬式野球選手権大会（丹波市）
- ・丹波もみじの里ハーフマラソン大会（丹波市）
- ・全国車いすマラソン大会（丹波篠山市）



△H26～現 丹波市復興プランの策定(丹波市)

H26.8に発生した集中豪雨により、住宅が損壊し、道路、河川、農地、森林等に甚大な被害。一日も早い復興に向けて、地域のめざすよりよい将来像を描き共有し、50年後、100年後の活力ある丹波市に向かってそれぞれの力と方向性を結集するため、「丹波市復興プラン」を策定。単に旧に復すのではなく、被災地が抱えている様々な課題を、人口、コミュニティ、住まい、安心・安全町づくり、農業、森林の5つの重点分野に分け、識見を有する方々や公募による市民で構成する委員会の提案を受けた先導的事業により再生しようとするもの。



△H27～現 いきいき百歳体操・いきいきデカボー体操の普及

高齢になっても互いに支えあい、安心して過ごせる地域を目指して、住民主体で運営する高齢者の通いの場「いきいきデカボー体操」「いきいき百歳体操」の実施地区を拡大（平成29年9月末109か所、高齢者の約1割が参加）。



○H28～現 丹波焼の里・城下町直通バスの運行

2つの日本遺産「丹波篠山デカンショ節」（丹波篠山市街地）と「きつと恋する六古窯」（丹波焼の里）をつなぐ直通バスを丹波篠山市と県が共同で期間限定運行。兵庫陶芸美術館、丹波焼の里により多くの方が来訪できる環境を整備。H28から試験運行。H30から本格運行に移行。

□H29～現 丹波篠山コシヒカリ宣言(丹波篠山市)

丹波篠山コシヒカリの美味しさをアピールするため、「丹波篠山コシヒカリ宣言」を発表。丹波篠山産米の良さ、魅力を広く発信。



■祭り・イベントの開催

- ・丹波焼の里 春ものがたり、陶器まつり（丹波篠山市）
- ・大国寺と丹波茶まつり（丹波篠山市）
- ・丹波篠山デカンショ祭（丹波篠山市）
- ・丹波ハピネスマーケット（丹波市）
- ・春と秋のみきみちマルシェ（丹波篠山市）



丹波の森づくり30年の歩み

※公益財団法人兵庫丹波の森協会

2018 (平成30年)

- 丹波の森づくり30周年記念シンポジウムの開催
- 丹波の森ミニガーデン制作

2016 (平成28年)

- 丹波地域恐竜化石フィールドミュージアム推進事業
- 丹波の森公園開園20周年記念事業

2014 (平成26年)

- 丹波電フィギュア完成
- シユーベルト花壇開園
- シユーベルティアデー20周年記念事業
- 恐竜化石フィールドミュージアム構想を策定
- 企業と住民協働による企業の森づくり
- 丹波篠山ひなまつり事業コーディネート

2012 (平成24年)

- 兵庫丹波の森協会が公益財団法人化
- 木の駅プロジェクト展開スタート
- シユーベルティアデー東日本大震災の被災小へ楽器贈呈開始

2010 (平成22年)

- 丹波OB大学に芸術鑑賞講座を開設
- 丹波出会いサポートセンターの開設
- 丹波恐竜・哺乳類化石等を活かしたまちづくり協議会設立

2008 (平成20年)

- 兵庫丹波の森協会設立20周年記念事業
- 丹波の森市民研究員制度開始

2006 (平成18年)

- 兵庫丹波の森協会に名称変更
- 丹波の森公園開園10周年記念事業
- 篠山層群から恐竜化石発見

2004 (平成16年)

- 丹波市誕生
- 全国豆サミットの開催

2002 (平成14年)

- ささやまの森公園開園し丹波の森協会が管理を受託
- 丹波地域ビジョン推進プログラム策定 (県民局)

2000 (平成12年)

- フォンテーヌブローの森 (フランス) との友好親善提携

1998 (平成10年)

- 丹波の森協会10周年・ウィーンの森友好親善提携5周年記念事業

1996 (平成8年)

- 丹波の森協会が丹波の森公園の管理を受託
- 公苑長に河合雅雄氏就任
- 丹波の森研究所開設

1994 (平成6年)

- 丹波森の怪基本構想の策定

1992 (平成4年)

- 丹波の森写真コンクール開催

1990 (平成2年)

- 丹波の森協会が財団法人化

1988 (昭和63年)

- 北摂・丹波の祭典「ホロンピア'88」の開催
- 丹波の森宣言
- 丹波の森協会設立

2017 (平成29年)

- 丹波地美恵フォーラム開催
- かいばら雛めぐり事業コーディネート

2015 (平成27年)

- 県民交流ひろば全県交流事業の実施
- 丹波篠山ひなまつり事業コーディネート
- 丹後・丹波・但馬の自然系ミュージアム連携による環づくりフォーラム参加

2013 (平成25年)

- ウィーンの森と姉妹提携20周年記念親善訪問でオムラサキ生育へ一歩

2011 (平成23年)

- 丹波並木道中央公園の管理を受託
- 映画「森の学校」上映会

2009 (平成21年)

- 丹波産オムラサキの放蝶会を初開催
- たんば田舎暮らしワンストップ相談の開設
- 丹波年輪の里の管理を受託

2007 (平成19年)

- 丹波の森研究所篠山分室開設
- 丹波の森大学専科生による灰屋の完成

2005 (平成17年)

- 丹波の森公園の新展開「元気ビジョン」策定委員会設置
- 新鐘ヶ坂トンネル開通

2003 (平成15年)

- オープンガーデンフォーラムの開催
- 地域団体活動パワーアップ事業の実施

2001 (平成13年)

- 丹波の森公園開園5周年記念事業
- 丹波の夢ビジョン「みんなで丹波の森」策定

1999 (平成11年)

- 篠山市誕生
- 丹波の森研究所「丹波の森の健康診断」実施
- 丹波の森21委員会設置

1997 (平成9年)

- 財団法人丹波の森協会が地域づくり国土庁長官賞受賞
- 丹波の昔ばなし第1集発行

1995 (平成7年)

- 丹波の森国際音楽祭シユーベルティアデーたんば実行委員会に参加

1993 (平成5年)

- ウィーン市13区と友好親善提携に調印
- 森林文化国際会議開催し共同宣言採択

1991 (平成3年)

- 丹波の森づくり大学 (現丹波の森大学) の開設

1989 (平成元年)

- 丹波の森構想の策定
- 第1回ウィーンの森親善訪問

丹波の森づくりのこれから

<h2>丹波の森宣言</h2> <p>丹波の自然と文化は、現在及び将来にわたる住民共有の財産であって、これを維持発展させることは私たちに課せられた重大な責務です。 今、私たちはこの責務を強く自覚し、お互いに力を合わせ、自然や文化を大切にしながら、これらを生かした「丹波の森」づくりを次のように進めることを宣言します。</p>	<h2>これまでの取組</h2>	<h2>生活者の視点</h2> <p>未来へつなぐ ～もりびとライフスタイル～</p>	<h2>取組の方向性</h2>	<h2>新たに加える取組</h2>	<h2>30年後の丹波の森のイメージ</h2> <p>最先端のテクノロジーが生活のすみずみまで行き渡った未来社会にあって、自然、食、工芸など丹波の森の素朴で心安らく魅力への憧れやニーズが高まっている。 そして、「もりびとライフスタイル」を創造していく丹波の森づくりが一層注目を浴び、ロゴマークが定着、ブランド化している。</p>
<h2>1 丹波の健全な発展をそこの自然破壊は行わず、森を大切に守り育てます。</h2>	<ul style="list-style-type: none"> ・県緑条例による開発の規制誘導 丹波の森づくりを土地利用の面から支援する県条例を制定、地域の7割を森を守る区域に指定 ・篠山市まちづくり条例の改正 農の都を実現するための土地利用基本計画を策定、太陽光発電施設の規制を強化 <ul style="list-style-type: none"> ・森づくりスタッフの養成・里山倶楽部の活動 丹波の森公園の里山で活動 ・木の駅プロジェクトの展開 市民の力で間伐、県下唯一、地域全体で活動 ・企業の森づくり 県内初となる企業と住民による協定を締結 ・丹波市森林づくりビジョンの策定 ・丹波篠山市ふるさとの森づくり条例の制定 植林地の間伐100%の計画を実行 ・森林管理100%作戦・災害に強い森づくり <ul style="list-style-type: none"> ・ささやまの川・水路づくり指針の策定 多自然型の護岸に改修するふるさとの川再生事業を実施 河川における生き物調査を実施 <ul style="list-style-type: none"> ・日本一の農業の都丹波篠山市の農都宣言 条例に基づく農都創造計画を策定、丹波篠山農学校を開校 ・丹波市有機の里づくりの推進 推進協議会を設立、市立農の学校を開校 ・丹波市版半農半公制度 市非常勤嘱託員をしながら農業に従事 ・有害鳥獣被害対策の推進 <ul style="list-style-type: none"> ・貴重動植物の保護に取り組む団体の活動 社団法人、材木、キノコ、ハチ等保護・育成 切アソウ、カササギ、カワサキ等貴重種の観察会を開催 ・水切れ域の生物多様性の情報発信 本州一低い中央分水界に水切れ資料館を建設 ・丹波ビオトーププランの策定 ・県立森林動物研究センターの開設 野生動物の調査研究拠点施設として全国に先駆けて開設 	<p>グリーンインフラ[※]の重要性の高まり</p> <p>レクリエーションの場の提供、良好な景観形成、生物生息の場の提供、気温上昇の抑制、保水による防災</p> <p>※ 2015年に国連サミットで採択された持続可能な開発目標(SDGs)と方向性を同じくするもの</p> <h2>ふだんは</h2> <h3>森のスローライフを満喫しています</h3> <ul style="list-style-type: none"> ・丹波の一番の魅力、近くの里山を自然と織りなす豊かな暮らしに活かす ・子どもたちが源流の水辺で楽しく遊べるようにして、ふるさとを想う心を育くむ <p>山からほど近い町や山里的集落に暮らし、気候風土の恵みを感じながら山で木を育て、田畑でブランド農作物を育てています。そして、近くの畑で採れた食材で家族団らんの食事を楽しんでいます。</p> <p>なんとといっても、近くの里山を散策し、季節の移ろいを感じる事が一番の楽しみです。</p> <p>子どもたちは学校から帰ると、里山で木登りをしたり、川辺で魚捕りをしたりして、夢中になって遊んでいます。</p>	<h2>丹波らしい土地利用を進める</h2> <h2>集落に暮らし続ける</h2> <h2>山を守り育てる</h2> <h2>川や水辺を守り育てる</h2> <h2>農地を守り育てる</h2> <h2>野生動植物と共生する(生物多様性を育む)</h2>	<p>新規 人口が減少する中であっても、集落の暮らしを大切に守り抜くことを基調とした丹波らしい土地利用を描く(丹波篠山グランドデザイン、丹波市新しい都市構造のあり方の策定)</p> <p>新規 集落と町を結ぶ交通・輸送システムを整備する</p> <p>新規 丹波の森のモデルとなる里山をつくり、広める</p> <p>発展 森づくりスタッフが上記新規事業で活躍する</p> <p>発展 水切れ域の源流の里ならではの水辺の自然環境を再生し、水遊びを楽しむ</p> <p>新規 先端技術で農地を守り育てる</p> <p>発展 新規就農者、集落営農組織、女性農業者、企業、外国人技能実習生等多様な担い手の育成を加速する</p> <p>新規 水切れフィールドミュージアムをオープンする</p> <p>発展 水切れ資料館をリニューアルする</p>	<p>人口減少に対応して、都市機能を集約、効率的な都市経営がなされている。一方で、基幹産業としての農林業を担い、風土を保全するという要の役割を果たす集落の暮らしも大切に守られている。 集約化により用途廃止された公共施設などの跡地は芝生化され、子どもの遊び場や地域住民の活動・交流の場として活用されている。</p> <p>周辺地区(集落)と都市機能を集約した拠点地区(町)が、自動運転を活用した交通システム、ドローンを活用した物流・宅配システムで、いつでも結ばれており、集落で安心して暮らすことができている。</p> <p>暮らしを豊かにする生活空間として里山を守り育てることの大切さが、30年かけて整備したモデル里山を通して住民に伝わり、各地で集落の裏山が里山として環境整備されている。花や落葉樹の四季の彩り、果樹や山菜、松茸や薪炭の採集、森林浴などを楽しむ生活が広がり、丹波の森の豊かさが地域外の人にも伝わって、交流、移住の流れが強まっている。 法整備が進み所有者不明の森林や、寄付のあった森林が里山整備に用いられるなど丹波の森にふさわしい利用がなされている。</p> <p>水切れ域の源流の里として、ささやまの川・水路づくり指針の考えが地域全体に浸透し、自然環境を再生する川の改修が各所で進んでいる。そして、小さな頃から多種多様な動植物とふれあう水遊びの体験が、ふるさとを想う心を育てている。</p> <p>地球規模の人口増加により、食料を供給する農業の大切さが見直され、丹波の風土・特産物に魅力を感じて従事する若者も増えつつある。 農地の流動化が進み、集約・大型化された農地は、AI、IoT、ドローン、自動操縦機械を活用したスマート農業で米づくりが行われ、黒大豆などのブランド農産物は昔ながらの手仕事を生かしつつ、ICTやロボティクス技術の活用で省力化や軽労化を図り、高品質農産物を求める消費者ニーズに応えている。 また、農業の担い手は多様化し、新規就農者、集落営農組織や企業が増加しただけでなく、女性の割合が高くなり、外国人技能実習生も働いている。</p> <p>水上回廊を舞台に、公園や資料館を中核施設とし、多種多様な生物の生息地を展示場とする水切れフィールドミュージアムがオープンし、巧みな情報発信により水切れの地域資源がまるごと楽しまれている。 環境省の重要里地里山選定地である丹波市青垣町遠阪地区が、生物多様性のモデル、ビオトーププランの実践地として全国的に有名になり、丹波の森の優れた環境を象徴する地区となっている。</p>
<h2>2 丹波の自然景観を大切に、花と緑の美しい地域づくりを進めます。</h2>	<ul style="list-style-type: none"> ・「丹波景観100選」の選定 ・丹波ランドスケープ広域計画による風景形成 丹波地域のみ、丹波の森づくりを基本理念として上位に置く ・丹波篠山市景観条例等の制定 丹波篠山市景観計画を策定 <ul style="list-style-type: none"> ・各地区の自然と文化を生かした施設づくり(ゾーンの森づくり) 四季の森公園、薬草薬樹公園等 ・丹波年輪の里の木工教室等 ・丹波の森の中核となる施設づくりと多彩な自然体験プログラムの実施(シンボルの森づくり) 丹波の森公園の縄文の森塾、ささやまの森公園の森の学校、丹波並木道中央公園の里山スクール等 <ul style="list-style-type: none"> ・「ふるさと桜づつみ回廊」の形成 丹波市サクラ協会の桜並木づくりに始まる ・たんば三街道の並木道整備 ・ハイキングコースの設定 ・サイクリングコースの設定 <p>ネットワークの森づくり</p> <ul style="list-style-type: none"> ・花づくり活動の普及・支援 ・たんばオープンガーデンで我が家の庭から丹波の森づくり園芸愛好家が自主運営 ・花祭りの開催 野上野れんげまつり、清住コスモスまつり等を住民が主催 	<p>人口減少と高齢化の進展 人口の偏在、介護需要の増加</p> <p>革新技術のあらゆる分野への浸透 AI、ロボット、自動運転、再生医療、遺伝子治療</p> <h2>休みには</h2> <h3>森の魅力をまるごと楽しんでいきます(再掲)</h3> <ul style="list-style-type: none"> ・森をまるごと「里山」「水切れ」「恐竜化石」のミュージアムにして、楽しみ方をみんまで共有する ・森のマルシェ・バルを広めて、自慢の食材の旬の恵みをみんなで分かち合う 	<h2>丹波らしい景観形成を進める</h2> <h2>公園を活かし、自然を体感する</h2> <h2>森を巡る道を活かし、景観を楽しむ</h2> <h2>花を飾り、もてなす</h2>	<p>新規 個々の住宅も日本の原風景の一部であることを意識し、調和させる</p> <p>新規 里山フィールドミュージアムをオープンする</p> <p>発展 3つのシンボルの森の裏山をミュージアムを象徴する里山に整備する</p> <p>新規 ハイキング、サイクリング、ドライブングそれぞれで森の道を巡り景観を楽しむ</p> <p>発展 寿命を迎える桜づつみのソメイヨシノを計画的に長寿命化する</p> <p>新規 町全体を花で飾る</p>	<p>日本の原風景といわれる丹波の森の姿大切に守っていくという意識が住民全体に浸透している。緑条例の緑化、景観ガイドラインの内容が常に意識され、個々の住宅、店舗、工場などの形態、意匠が背景の山々と調和している。</p> <p>シンボルの森とゾーンの森を中核施設とした里山フィールドミュージアムがオープンし、活動情報が一括発信され、誰もが里山をまるごと楽しめるようになっている。 シンボルの森の裏山が、住民や地域外からのボランティアの参加のもと歳月をかけて環境整備され、ミュージアムを象徴する里山となっている。</p> <p>サイクリングとハイキングを気軽に楽しめる地域としてのイメージが定着している。自転車に乗せられる鉄道車両や、各コースの起終点には木陰を有する休憩・着替えスポットが用意されている。 桜づつみのソメイヨシノが寿命を延ばしつつ、オオシマサクラやエドヒガンなども混植され、春中、桜が咲き続けている。たんば三街道には並木道とロゴマークが各所に設置され、丹波の森づくりが進んでいることを気づかせている。</p> <p>町や商店街などのエリア全体でテーマ性を持って花を飾り、訪問者をもてなす取組が定着している。店先のミニチュアガーデン、地元産材の木製ベンチ、丹波焼の陶器に生けられた草花、そして個人の庭、道路や公共施設の敷地、さらには修景された空き地・未利用地の樹木が、各所で季節毎に美しく咲き、紅葉し、町全体で訪問者をもてなしている。</p>

丹波の森宣言	これまでの取引	環境変化	取組の方向性	新たに加える取組	30年後の丹波の森のイメージ
<p>3 丹波の文化景観及び歴史的遺産を大切にし、個性豊かな地域文化を育てます。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 講座「丹波学」の開催 丹波の森の文化、歴史、人物等を学ぶ講座を開催 「丹波のむかしばなし」の発行 10巻120話の民話、語り部くらぶが活動 民俗芸能保存・継承事業 伝統技術の伝承 丹波杜氏酒造記念館、丹波市伝承館 兵庫県陶芸美術館の開館と陶芸文化の振興 丹波篠山市に2つの日本遺産 デカンショ節、日本六古窯 名木巨木の保全 「丹波の森名木ガイド」を発行 篠山城大書院の再建 古民家や洋館の再生 観光拠点施設、宿泊施設（ホテル）、レストランに再生 柏原城下町の景観形成 企業、商店、個人が（株）まちづくり柏原を設立、活動 県景観条例による地区指定等 丹波篠山市城下町地区、上立杭地区、8件の古民家、洋館を指定 国重要伝統的建造物群保存地区に指定 篠山まちなみ保存会、福住まちづくり協議会が保存活動 篠山城下町地区が国景観まちづくり刷新モデル地区に指定 全国10地区の一つ <ul style="list-style-type: none"> 恐竜化石等を活かしたまちづくり 住民が参加し発掘調査 ちーたんの館、元氣村かみくげ、太古の生きもの館を開設 恐竜化石フィールドミュージアムをオープンにっぽん恐竜協会を発足 <ul style="list-style-type: none"> 文化の拠点施設の整備 たんば田園交響ホール等 丹波の森国際音楽祭「JUBILEE」たんばで音楽の森づくり 民間ボランティアが中心に国際音楽祭を開催 子どもミュージカル体験塾の開催 創作オペラおさん茂兵衛の上演 市民が中心となり創作、上演 映画「森の学校」完成上映 河合雅雄氏の著を脚本に映画化 丹波篠山まちなみアートフェスティバルの開催 城下町の街角に彫刻、絵画、写真のアート空間を創出 スポーツ大会の開催 丹波篠山ABCマラソン大会、全国高校女子硬式野球選手権等 	<p>生活者の視点</p> <p>休みには</p> <p>森の魅力をまるごと楽しんでます(再掲)</p> <p>四季折々のイベントや祭りなどで、地域内外の人たちが一緒に盛り上がっています。</p> <p>加えて、里山、水分かれ、恐竜化石をテーマとして週末に開催されるハイキング、木工や水辺のキャンプ、化石発掘体験など多彩なイベントを親子やグループで楽しんでいます。</p> <p>また、町中や公園で開かれるマルシェやバル、そして農家レストランなどで、採れたての食材を味わう地元ならではのぜいたくを楽しんでいます。</p>	<p>文化と歴史を大切にし、町・建物をつなぐ</p> <p>恐竜が生きた大地で暮らす</p> <p>森の中で芸術・文化・スポーツを楽しむ</p>	<p>新規 歴史的な町をまるごとホテルにして、もてなす</p> <p>発展 恐竜化石フィールドミュージアムのコンテンツを充実させ、展示施設を拡充する</p> <p>新規 「森の映画館」を楽しむ</p> <p>発展 全国高校女子硬式野球選手権の聖地にする</p>	<p>篠山や柏原の城下町、福住や佐治の宿場町、今田町の陶器町には、古民家や洋館を活用した宿泊施設、レストラン、各種店舗があちこちに点在し、博物館や美術館などと一体的に機能している。交通機関の玄関口となる最寄駅は「森の駅」として観光客を迎え、観光拠点でコンシェルジュがそれらを総合案内することで、歴史的な町全体が一つのホテルとなり活用され、リピーターに人気を博している。</p> <p>化石の発見が続き、ちーたんの館は博物館に拡充され、丹波篠山市内の展示施設も充実。川代トンネルが開通した後の旧道はミュージアムのシンボル道路として、沿道に季節を感じさせる桜やもみじが植栽され、エリアの要所にフィールドミュージアムのロゴマークが掲示されている。</p> <p>VRが普及し、自宅で映像を楽しむことが増える一方で、名作映画を里山やレトロな建物で鑑賞することにも人気が高まっており、「森の映画館」と銘打って、丹波の森公苑の前庭や中庭、古民家レストランなどで上映され、森の中で楽しむ文化のシンボルイベントの一つとなっている。</p> <p>マラソンの聖地に加え、全国高校女子硬式野球選手権が男子と肩を並べる大会に発展し、丹波市市島町がその聖地となっている。</p>
<p>4 丹波の素朴さと人情を大切に、安らぎと活力に満ちた地域づくりを進めます。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 丹波の森大学、丹波 OB 大学・大学院の開講 丹波の森づくりの実践者“もりびと”を養成 “もりびと”の育成 たんば子ども塾、丹波の森若者塾 “もりびと”による地域活動の展開 地域内全小学校区でまちづくり協議会、自治振興会が活動 丹波の森づくりの各取組の原動力 大学生による地域貢献活動 関西大学、神戸大学、関西学院大学等10大学と連携 移住・定住の促進と空き家活用 両市に住まいと仕事のワンストップ窓口を設置 <ul style="list-style-type: none"> 丹波栗・黒大豆・大納言小豆のブランド戦略、フェアの開催 丹波篠山コシヒカリ宣言 丹波すくれもの大賞による顕彰 <ul style="list-style-type: none"> ふらり丹波路、旅丹、大丹波連携による観光情報の発信 丹波焼の里・城下町直通バスの運行 <ul style="list-style-type: none"> 丹波市復興プランの策定 市民等の提案を受けた先導的事業で再生 防災リーダーの育成 防災情報活用研修などで地域防災の担い手を育成 いきいき百歳体操・いきいきデカポ体操の普及 地域内高齢者の約1割が参加 	<p>自分時間</p> <p>森づくりを学び実践しています</p> <ul style="list-style-type: none"> 少子高齢化社会が進んでも集落の暮らしに魅力を感じられるよう、先端技術を農業に活用する 大交流時代にあたり、篠山・柏原城下町などの歴史的な町全体をホテルにして、もてなす <p>30年間進めてきた森づくりを継続しながらも、社会環境が大きく変わっていく中、新たな森づくりも進んでいきます。</p> <p>少子高齢化が進んでも集落の暮らしを守りぬく必要があります。農林業を次の世代へ継承することに加え、新たな担い手を呼び込み、学校や地域で育成していくことが大切です。</p> <p>また、大交流時代において、国外へ発信し、交流を拡大していくことも必要です。</p> <p>異常気象と高まる災害リスク 南海トラフ地震、多発する豪雨</p>	<p>“もりびと”になって、ふるさとを元気にする</p> <p>丹波ブランドを育成し、産業を振興する</p> <p>丹波ファンを拡大し、交流を促進する</p> <p>大交流時代に対応する</p> <p>安全安心な地域をつくる</p>	<p>発展 市民プラザや丹波の森協会など中間組織が、“もりびと”の団体の活動を支援する</p> <p>発展 「森のマルシェ・バル」でブランド農産物やジビエを楽しむ</p> <p>発展 丹波ブランドを情報発信するための拠点を整備し、ブルーベリーや黒ゴマなども新たにブランド化する</p> <p>新規 丹波の森の魅力をまるごと紹介できる施設を整備する</p> <p>新規 宿泊施設を整備し滞在型旅行者を招く</p> <p>新規 海外の企業や人に“もりびと”として活躍してもらう</p> <p>発展 原風景、絶品の農産物、伝統工芸など丹波の森の魅力を国外にも発信し、人と物の交流を拡大する</p> <p>新規 空き家を災害時の避難住宅として利用する</p> <p>発展 いきいき百歳体操・いきいきデカポ体操が全ての高齢者が参加できるまで拡がり、元気な高齢者が増えている</p>	<p>ふるさと教育や郷土料理による食育、そして学び直しの方が丹波の森大学を中心にさらに充実し、もりびとの育成が進んでいる。これら“もりびと”の団体は、クラウドファンディングの活用や法人化を進め、活動の継続性が高まっている。そして、丹波の森研究所や両市の市民プラザなど中間支援組織が、ノウハウの提供、ボランティアの派遣、団体のネットワーク化などによりそれらの活動をしっかりと支えている。</p> <p>食育が実を結び、子どもから老人まで地元食材への愛着が増し、地域産業全体で丹波ブランドをささえる仕組みが本格化している。</p> <p>「森のマルシェ・バル」で、採れたての農産物やジビエを味わう地元ならではの楽しみ方が広がっている。また、丹波の特産物を使ったケーキや雑貨などオシャレでセンスのある物が販売されている。</p> <p>世界での遺伝子操作による品種改良の流れに対して、丹波地域固有の風土の中で育てるブランド農産物の輝きは一層増している。情報発信の拠点が整備され、丹波栗、黒大豆、大納言小豆、山の芋を基軸に、新たなブランド農産物ブルーベリー、黒ゴマ、実エンドウなども発信されている。</p> <p>リニア新幹線が大阪まで開通、北近畿豊岡自動車道が全線開通。京阪神だけでなく全国から短時間で立ち寄れる地域となっている。また、自動運転の活用により、まち中心部から観光名所各地へも簡単にアクセスできる。森の魅力をまるごと紹介する施設が整備され、国内外からの来丹者や移住者が“丹波の森”をまるごと楽しんでいる。</p> <p>また、農家民宿や空き家、空き施設、廃校などを活用した宿泊施設の整備、交通の要所などへのホテルの誘致が進み、「日帰り観光」から「滞在型旅行」へのシフトが進んで、ひょうごゴールデンルートの拠点（神戸・姫路・城崎）からの周遊が増えている。</p> <p>ブランド農産物をもとより、丹波焼、丹波布、丹波杜氏のつくる日本酒などが、インターネット経由で海外と盛んに取引されている。</p> <p>日本の原風景を大切に守り、絶品の農産物、伝統工芸などの地域資源に磨きをかけ、農業体験や工芸体験をとおしてその魅力に直接触れることができる丹波の森への注目が高まり、さらには、携帯端末を介した自動通訳、ナビゲーションも普及し、国内外から何度も訪れる丹波ファン（交流人口）が増えている。</p> <p>このような交流の中から、丹波の森に魅力を感じ、海外から進出してくる企業や人材が増えている。</p> <p>南海トラフ地震の経験を機に、復興公営住宅の建設などの公助の限界を知ることとなった。共助の思想が広がり、空き家へ避難住民を受け入れる体制が構築されている。</p> <p>山裾の余裕域（バッファゾーン）を設定する土地利用が進み、災害発生残土を利用して整備された栗園が成熟するなど、平成26年豪雨災害からの復興が「丹波市復興モデル」として全国に知られている。</p> <p>いきいき百歳体操・いきいきデカポ体操が全ての自治会で開催され、地域内の高齢者が全て参加可能となっている。ICTネットワークによる医療、保健、福祉、介護の切れ目のないサービスがその展開を支えている。</p>



丹波の森づくりの実践(主なもの) [2019]

取組の方向性 (項目別)	主な実践[2019] [青字:新規・拡充事業]			実践後のイメージ (項目別)		
	協会・研究所 [丹波の森づくり推進・支援] ※丹波の森構想推進 連絡調整会議の開催	県 [地域施策の推進]	丹波篠山市 [市施策の推進]		丹波市 [市施策の推進]	
丹波の森づくりの推進	・ウィーンの森親善訪問 ・丹波の森づくり基金の設置 ・丹波の森実践活動の支援(研究所)	・地域ビジョンの策定、活動				
ロゴマーク「丹波の森」の普及定着						
1 丹波の健全な発展をそこうような自然破壊は行わず、森を大切に守り育てます。	丹波らしい土地利用を進める	・県線条例による開発の規制誘導 丹波の森づくりを土地利用の面から支援する県条例を制定、地域の7割を森を守る区域に指定 ・秩序ある計画的土地利用の維持	・丹波篠山市まちづくり条例の改正 農の都を実現するための土地利用基本計画を策定、太陽光発電施設の規制を強化 ・地区整備計画等の策定 ・丹波篠山グランドデザインの策定 丹波篠山の土地利用の未来を描く	・新しい都市構造のあり方を示す「まちづくりビジョン」 時代の変化に対応した効率的で機能的な都市構造が構築された「まちの姿」を描く ・丹波市の未来を語る市政懇談会の開催 市の施策や重点事業の進捗状況を報告することで市政の見える化を図り、市民の意見を市政運営に反映させる。	・基幹産業としての農林業を担い、風土を保全するという要の役割を果たす集落の暮らしが継続。 ・都市機能の集約、効率的な都市経営など新たな都市構造が構築。	
	集落に暮らし続ける	・「丹波の森づくり」に向けた調査研究(研究所) 「住み続けられる集落」をテーマに調査研究を実施	・集落と町を結ぶ交通・輸送システムの整備	・人口減少社会でも日常生活を支える公共交通の充実 JRや路線バスによる基幹交通、デマンド型集合タクシー等による生活圏域交通など、目的に応じた利活用を図る。	・周辺地区(集落)と都市機能を集約した拠点地区(町)が、新たな交通・輸送システムで結ばれ、集落で安心した暮らしが実現。	
	山を守り育てる	・丹波の森公苑里山事業(森公苑) 里山ボランティアや森づくりスタッフを丹波の森公苑で養成 ・丹波の里山づくり促進事業への支援(事務局・研究所) 県民局と連携し、モデル地区の調査・実施設計、一体となった広報を展開	・木の駅プロジェクトの展開 市民の力で間伐、県唯一、地域全体で活動 ・企業の森づくり 県内初となる企業と住民による協定を締結 ・森林管理100%作戦・災害に強い森づくり ・丹波の里山づくりの促進 モデルとなる里山の選定・継続的支援、活動の住民への発信、里山フォーラムの実施、技術研修の実施等	・篠山市ふるさとの森づくり条例の制定 植林地の間伐100%の計画を執行 ・間伐の促進と広葉樹林化 ・市民や都市住民によるふれあいの場づくり、 ・エネルギー源としての利用促進 ・篠山産材使用の奨励 ・山を生かしたエコツアーの展開	・緊急防災林整備(斜面対策) ・住民参画型森林整備 ・針葉樹林と広葉樹林の混合林整備 ・「森林の公益的機能」の維持保全 森林組合等の森林整備活動の支援、自治会等の森林整備活動の支援、木材利用の促進 ・丹波の里山づくり発信事業 ・「森林を未来につなぐフォーラム」開催 ・丹波の里山づくり体験促進事業	・暮らしを豊かにする生活空間として里山を守り育てることの大切さが住民に伝わり、各地で集落の裏山が里山として整備。 ・林業経営が安定し、山の公益的機能が発揮。
	川や水辺を守り育てる	・生物多様性保全学習事業の実施(事務局・各施設) 生物多様性の現状や保全の重要性を環境学習の教材や市民への周知に活用 ・「丹波の森づくり」に向けた調査研究(研究所) H30の丹波生き物調査実態を踏まえ、「生物多様性保全に向けた取組」をテーマに調査研究を実施	・源流の里の親水環境整備 ・親水護岸・自然観察施設等の整備	・ささやまの川・水路づくり指針の策定 多自然型の護岸に改修するふるさとの川再生事業を実施 ・河川における生き物調査を実施 ・自然を生かした工法の確立(川・水路) ・魚類等の遡上・支障のない魚道等の設置 ・生き物とのふれあい観察、川を生かした遊びやエコツアーの実施 ・河畔林、桜並木等の持続的な更新管理	・水上回廊水切れフィールドミュージアム拠点整備事業(水切れ資料館リニューアル)	・水切れ域の源流の里として、ささやまの川・水路づくり指針の考えが地域全体に浸透し、自然環境を再生する川の改修が進む。 ・小さな頃から多種多様な動植物とふれあう水遊びの体験が、ふるさとを想う心を育む。
	農地を守り育てる	・地域農業の担い手の育成、農地のフル活用推進 集落営農の組織化や農業への新規参入、必要な農地のレベルアップ整備を実施 ・丹波の森美しいむらづくりプロジェクト 市や地域団体が行う農業活動、基盤づくりに必要な施設整備等を支援 ・有害鳥獣被害対策の推進 ・先端技術を活用した農地管理 ドローンを活用した黒大豆畑等の管理	・日本一の農業の都篠山市の農都宣言 条例に基づく農都創造計画を策定、丹波篠山農学校を開校 ・環境創造型農業の推進 集落営農組合・営農法人の育成 人・農地プランの策定・推進 農作物収穫体験などのエコツアーの実施 ・特産の維持、さらなる特産振興 ・鳥獣被害対策の推進	・需要の多い特産物の振興 小豆、山の芋の作付面積の確保・増加など、特産物の生産支援 ・農産物の輸出促進 GFP(農林水産食品輸出プロジェクト)やJETRO(日本貿易振興機構)を活用した輸出の支援 ・地域おこし協力隊制度の活用 半農半公(市非常勤嘱託員をしながら農業に従事) ・農(みのり)の学校の開校 農業・農村の担い手育成と定住を促進する。 ・環境創造型農業推進懇話会の設置による「農」と「森林」、「暮らし」が連動する持続可能な循環型社会の創造 ・有機の里に向けた取組 市島有機センター施設・設備の計画的拡充 ・女性農業者の組織化	・集約・大型化された農地は、AI、IoT、ドローン、自動操縦機械を活用したスマート農業が普及。 ・黒大豆などの農産物は昔ながらの手仕事を生かすつつ、IoTやロボティクス技術の活用で省力化や軽労化が実現。 ・農業の担い手は多様化し、新規就農者、集落営農組織や企業が増加しただけでなく、女性の割合が高くなり、外国人技能実習生も増加。	
	野生動植物と共生する(生物多様性を育む)	・丹波の森公苑里山事業(森公苑) 国蝶オムラサキの飼育展示や生息環境整備を実施 ・ささやまの森公園事業(ささやまの森) 人と自然が共生する豊かな里山で、住民相互の交流やふれあいの場を提供 ・丹波の森公苑環境学習の支援(森公苑) 小学生を対象に里山探検や生き物観察などを行う「丹波縄文の森塾」を開催 ・生物多様性保全学習事業の実施(再掲) ・「丹波の森づくり」に向けた調査研究(再掲)	・県立森林動物研究センターの開設 野生動物の調査研究拠点施設として全国に先駆けて開設 ・丹波ジオトープランの策定 ・丹波の環境パートナーシップづくり 住民参加型フォーラムの開催、環境学習プログラムの提供、体験型エコツアーの開催等 ・不法投棄をさせない!きれいな丹波づくりの推進 産業廃棄物の不法投棄対策を行い、早期発見及び未然防止を図る	・丹波篠山いきもの48の推進 学校にヒーローをつくらうなど教育の推進 ・環境創造型農業による事業の推進 ・丹波の森のシンボルとしてメダカ、ホタル、カブトムシなどを題材に地域挙げての取組 ・自然体験を中心としたエコツアーの実施	・水上回廊水切れフィールドミュージアム拠点整備事業(水切れ資料館リニューアル) ・丹波市の生物多様性の情報発信 水上回廊ホームページの更新	・生物多様性のモデル、ジオトープランの実践地が、丹波の森の優れた環境を象徴する地区に。 ・里山や水分かかれの地域資源がまるごと楽しまれる地域に。
2 丹波の自然景観を大切に、花と緑の美しい地域づくりを進めます。	丹波らしい景観形成を進める	・丹波地域花と緑の啓発イベント開催(事務局) 住民・事業者・行政が一体となり、丹波の美しさを花で表現	・丹波景観100選の選定 ・丹波ランドスケープ広域計画による風景形成 丹波地域のみ、丹波の森づくりを基本理念として上位に置く ・丹波らしい景観形成の推進 緑条例の緑化、景観ガイドラインに基づいた住宅の意匠等を提案	・丹波篠山市景観条例等の制定 丹波篠山市景観計画を策定、景観刷新モデル事業 ・日本遺産認定を生かした高品質まちの空間整備 ・丹波篠山のライフスタイルの発信 ・修景整備事業と空き家活用の促進	・日本の原風景といわれる丹波の森の姿を大切に守っていくという意識が住民全体に浸透。 ・緑条例の緑化、景観ガイドラインの内容が常に意識され、個々の住宅、店舗、工場などの形態、意匠が背景の山々と調和。	
	公園を活かし、自然を体験する	・丹波年輪の里の木工教室等(年輪の里) 木とのふれあい、物づくりの楽しさ、木の普及振興に努める ・丹波並木道公園の企画・運営(並木道中央公園) 環境学習事業、都市・農村の交流事業、恐竜の発掘体験など参加型プログラムを実施 ・丹波の森公苑里山事業(森公苑) 里山ボランティアなどによる里山・環境学習フィールドを整備 ・丹波の森公苑環境学習の推進(森公苑) 小学生・園児を対象としたどんぐり拾いなど「里山の秋の実り体験」を実施、「丹波縄文の森塾の開催」(再掲) ・里山ミュージアムの総合調整(検討) ・シンボルの森の里山整備(事務局・関係施設) 県民局と連携し、里山ミュージアムのコア施設として整備 ・樹木銘板の設置(森公苑) 里山の植物について学ぶ機会とするため、樹木銘板に氏名を記入し懸架	・シンボルの森の里山整備 里山ミュージアムのコア施設として整備	・各地区の自然と文化を生かした施設づくり (ゾーンの森づくり) 四季の森公苑等	・丹波市立丹波竜の里公園やちーたんの館などでの恐竜化石発掘体験 ・丹波市立農業園の施設・設備の拡充	・シンボルの森とゾーンの森を中核施設として、里山を丸ごと楽しむ里山フィールドミュージアムが充実。 ・シンボルの森の裏山が環境整備され、丹波の森づくりを象徴する里山に。
	森を巡る道を活かし、景観を楽しむ	・各施設でのハイキングコースなどの実施(各施設)	・桜づつみ回廊の美観保全 長寿命化計画の策定・実施 ・街路樹、道路の植栽帯、法面の適正管理 ・たんば三街道主要ポイントの修景 景観を楽しむ主要な視点場となる幹線道路を修景	・ハイキングコースの設定 ・サイクリングルートの設定 ・既存公園の市民へのPRと利用促進 ・丹波篠山ローマン街道の指定	・丹波サイクリング協会主催のツール・ド・丹波への支援 ・恐竜の里サイクリングロードの整備	・サイクリング、ハイキングが気軽に楽しめる。 ・桜づつみのソメイヨシノ、オオシマサクラ、エドヒガンなど、春中、桜が開花。 ・たんば三街道には並木道とロゴマークが各所に設置され、丹波の森づくりが進む。
	花を飾り、もてなす	・丹波地域花と緑の啓発イベント開催(事務局) 県民局と連携し、町全体を花で彩り地域を活性化するための取組を支援 ・花づくり活動の支援(森公苑) 地域の花づくり愛好家などを対象に園芸等に関する学習機会を提供	・県民まちなか緑化事業の推進 ・花づくり活動の普及・支援 ・丹波の森ニガータンの普及啓発 町全体を花で彩り地域を活性化するための取組を支援	・自治会・市民団体などの活動支援 ・オープンガーデンの普及・拡大 ・街路樹・道路の植栽帯・法面の適正管理 ・おもてなし空間づくり(店舗、商店街、名所等) ・桜並木などの保全と計画的な更新育成	・丹波花めぐり セツブンソウ巡り、丹波かたくりまつり、百巻寺九尺ふじ、清住コスモス、野上野れんげまつりなど	・町や商店街などのエリア全体で、花により訪問者をもてなす取組が定着。 ・各所で、草花・樹木が季節毎に美しく咲き、紅葉し、町全体が訪問者をもてなす。
	丹波の森づくりの推進	・「丹波の森づくり」に向けた調査研究(研究所) 「住み続けられる集落」をテーマに調査研究を実施	・集落と町を結ぶ交通・輸送システムの整備	・人口減少社会でも日常生活を支える公共交通の充実 JRや路線バスによる基幹交通、デマンド型集合タクシー等による生活圏域交通など、目的に応じた利活用を図る。	・周辺地区(集落)と都市機能を集約した拠点地区(町)が、新たな交通・輸送システムで結ばれ、集落で安心した暮らしが実現。	

もりびとライフスタイルの創造(未来)

ふだんは

森のスローライフを満喫しています

丹波の一番の魅力、近くの里山を自然と織りなす豊かな暮らしに活かす。

子どもたちが源流の水辺で楽しく遊べるようにして、ふるさとを想う心を育む。

山からほど近い町や山里的集落に暮らし、気候風土の恵みを感じながら山で木を育て、田畑でブランド農作物を育てています。そして、近くの畑で採れた食材で家族団らんの食事を楽しんでいます。なんといっても、近くの里山を散策し、季節の移ろいを感じる事が一番の楽しみです。子どもたちは学校から帰ると、里山で木登りをしたり、川辺で魚捕りをしたりして、夢中になって遊んでいます。

休みには

森の魅力をまるごと楽しんでいます

森をまるごと「里山」「水切れ」「恐竜化石」のミュージアムにして、楽しみ方をみんなで共有する。

森のマルシェ・バルを広めて、自慢の食材の旬の恵みをみんなで見分かち合う。

丹波の森宣言	取組の方向性 (項目別)	主な実践[2019] [青字:新規・拡充事業]			実践後のイメージ (項目別)	
		協会・研究所 [丹波の森づくり推進支援] ※丹波の森構想推進 連絡調整会議の開催	県 [地域施策の推進]	丹波篠山市 [市施策の推進]		丹波市 [市施策の推進]
3 丹波の文化景観及び歴史的遺産を大切に、個性豊かな地域文化を育てます。	文化と歴史を大切に、町・建物をつなぐ	・協会発行誌のPR(名木ガイド、丹波の自然ガイド、むかしばなし)(事務局) ・講座「丹波学」の開設(森公苑) ・丹波の森の文化、歴史、人物等を学ぶ講座を開催 ・丹波のむかしばなし語りベテラン活動支援(事務局) ・子どもの健やかな成長を願う紙芝居等に助成 ・民俗芸能保存・継承事業 ・伝統文化活性化支援事業(森公苑) ・学校等において伝統文化を学習・体験する場を提供	・兵庫陶芸美術館の開催と陶芸文化の振興 ・県景観条例による地区指定等 ・篠山市城下町地区、上立杭地区、8件の古民家、洋館を指定	・丹波篠山市に2つの日本遺産 デカンショ節、日本六古窯 ・篠山城大書院の再建 ・国重要伝統的建造物群保存地区に指定 ・篠山まちなみ保存会、福住まちづくり協議会が保存活動 ・日本遺産を活かした取組の推進 ・全国重要伝統的建造物群保存地区協議会全国大会の開催 ・伝統文化・伝統建築技術の継承(丹波篠山職人学校) ・丹波篠山学書の推進 ・空き家の活用、古民家の再生・促進 ・ささやまの家(篠山の気候、風土、景観にあった住宅)の普及 ・丹波篠山市景観条例による指定等 ・城下町、上立杭、福住を歴史地区指定、6件の市景観重要建造物指定 ・篠山城下町地区が国景観まちづくり刷新モデル地区として全国10地区の一つに指定	・植野記念美術館の個性を活かした展覧会 ・「続・日本100名城」黒井城跡の補修 ・エリアマネジメントによる地域活性化 ・丹波篠山・子ども能楽の実施	・城下町、福場町、陶器町に、古民家や洋館を活用した宿泊施設、レストラン、各種店舗が点在し、人気に。 ・交通機関の玄関口となる最寄駅が「森の駅」として観光客を出迎え、地域の要所で観光拠点に。 ・地域住民が歴史・文化を学び、丹波地域の良さを理解。
	恐竜が生きた大地で暮らす	・恐竜化石フィールドミュージアム構想の推進(事務局・研究所) ・丹波地域恐竜化石フィールドミュージアム推進事業ディレクター及び総合プロデュースを行う。	・恐竜化石フィールドミュージアム構想の充実 ・川代ラインパークのコア施設や恐竜化石発見現場等を巡るツアーの新たな開発・実施 ・ツアーに付加価値をつける案内人(インタープリター)の養成	・恐竜化石等を活かしたまちづくり ・住民が参加し発掘調査、太古の生きもの館を開設、恐竜化石フィールドミュージアムをオープン ・「たんば恐竜協議会」を発足・太古の生きもの館の充実 ・宮田化石重点保護区域の活用	・「たんば恐竜協議会」の主催 ・全国2市3町による協議会の組織化 ・小学生の交流学習「竜学」の開催 ・北海道むかわ町や熊本県御船町との交流活性化 ・恐竜化石の活用を図るエデュケーター(教育普及専門員)の配置	・化石の発見・発掘などを活かし、恐竜化石フィールドミュージアムが充実。 ・川代トンネルの開通により地域が活性化。
	森の中で芸術・文化・スポーツを楽しむ	・生活創造活動施設、CSR活動施設の貸し館(関係施設) ・展示ギャラリーの開設(森公苑) ・子どもミュージカル体験塾の開催(森公苑) ・子どもたちが創造する楽しさを体験し、舞台芸術に親しみふれあひ中学生ソフトテニス大会の開催(森公苑) ・国際音楽祭シューベルティアーデたんばの開催支援(森公苑) ・地域交流・国際交流の輪を広げる各種コンサートを開催 ・国際音楽祭シューベルティアーデ25周年記念の開催(森公苑) ・丹波の森公苑ホール等自主事業の開催(森公苑) ・地域文化の優れた芸術鑑賞の機会を提供 ・スポーツ大会・文化教室の開催(年輪の里) ・アートクラフトフェスティバルたんばの開催(年輪の里) ・全国各地のクラフトマンが作品を展示、来場者と交流 ・ウッドクラフト展(木のおもちゃ展)の開催(年輪の里) ・木を素材とした木工クラフトの全国公募展を開催 ・アート作品展の開催(年輪の里) ・産つ展ー丹波で産る木の椅子ーの開催(年輪の里)	・国際音楽祭シューベルティアーデたんば「ふるさと音楽ひろば」の支援 ・国際音楽祭シューベルティアーデたんば25周年記念の支援	・丹波篠山まちなみアートフェスティバルの開催 ・城下町の街角に彫刻、絵画、写真のアート空間を創出 ・スポーツ大会の開催 ・丹波篠山ABCマラソン大会、全国車イスマラソン大会、兵庫県高校駅伝大会の充実 ・文化の拠点施設の整備田園交響ホール等・丹波篠山市民ミュージカルの継続 ・丹波篠山まちなみアートフェスティバルの充実 ・丹波篠山ビデオ大賞の充実 ・内外への情報発信の充実強化 ・デカンショ祭の盛り上げ	・全国高等学校女子硬式野球選手権大会の開催 ・三ツ塚マラソン大会、もみじの里ハーフマラソン大会 ・丹波アートコンベンションの開催 ・プロ野球ウエスタンリーグの実施 ・かかし祭り、成松愛宕祭りの活性化、能学に触れ楽しむイベント、ホール自主事業・アマチュアアーティスト育成事業の充実	・森の中で楽しむ芸術・文化・スポーツのシンボルイベントが増加。 ・新たなスポーツ大会の聖地が誕生(マラソンに加え、全国高校女子硬式野球選手権の聖地に)
4 丹波の素朴さと人情を大切に、安らぎと活力に満ちた地域づくりを進めます。	“もりびと”になって、ふるさとを元気にする	・ウィーンの森親善訪問事業の実施(事務局) ・丹波の森大学(事務局) ・丹波の森づくりの実践者“もりびと”を養成 ・交流実践スキルアップの展開(事務局) ・地域資源を活用した交流の実践(ウハウハを醸成(県民局連携)) ・丹波の森フェスティバルの開催(森公苑) ・地域住民・団体等の交流の機会を図るフェスティバルを開催 ・生活創造活動への支援(森公苑) ・活動コーナーの提供や貸館料の助成による団体等への支援 ・丹波OB大学(地域高齢者大学)、丹波OB大学院(地域活動実践講座)の開設(森公苑) ・高齢者の生きがいのある充実した生活基盤の確立、魅力ある地域社会を創り出す実践者を養成 ・トライやるウィーク等受入(森公苑) ・学ぶ高齢者の集い丹波ブロックの開催(森公苑) ・学びあひ交流を深め生きがいと健やかな社会づくりの輪を広げる	・“もりびと”の育成 ・小・中・高の発達段階に応じたふるさと教育の醸成 ・丹波青少年本部との連携 ・移住・環流プロジェクトの推進 ・都市部の若者・子育て世代へ丹波地域の魅力発信 ・交流実践スキルアップ促進 ・ワークショップ等により、地域資源を活用した交流の実践(ウハウハを醸成) ・交流促進・パワーアップ支援 ・女性の起業応援 ・地域再生大作戦 ・大学生による地域貢献活動推進 ・関西大学、神戸大学等10大学と連携 ・関西学院大学柏原スタジオの運営支援	・わが家・わが村のふるさと丹波篠山に住もう帰ろう運動の推進 ・ふるさとを担う教育の推進 ・専門官組織と地域の連携協働の推進 ・地域活動のコミュニティ化と企業人材の育成・支援 ・コミュニティ・スクールによる地域とともにある学校づくりの推進	・関係人口の確保・定着 ・ふるさと住民登録制度の活用によるまちづくりへの参画 ・コミュニティ・スクールの全市展開 ・包括連携協定締結大学との連携(武庫川女子大学、関西大学、福知山公立大学) ・自治体との相互協力(東京都文京区、奈良県宇陀市、3市(丹波市・福知山市・朝来市)) ・ワンストップの移住定住支援(たんば「移充」テラス) ・「このまちとともに」丹波市の歌~」の定着・普及 ・市民憲章の制定 ・廃校を活用したチャレンジフェスの実施 ・市民プラザの開設	・ふるさと教育や郷土料理による食育、そしていつまでも学べる場が充実。 ・“もりびと”の団体の法人化などによる活動の継続性が向上。 ・丹波の森研究所や両市の市民プラザなど中間支援組織が、市民活動を支える。 ・住みよい丹波の森へ移住者が増加。
	丹波ブランドを育成し、産業を振興する	・指定管理公園における丹波ブランドのPR・支援(各施設) ・各種イベント時の商品PR出展の調整、HP・掲示板を活用	・丹波ブランド農産物の生産振興・販売力強化 ・丹波すぐれもの大賞による顕彰 ・雇用創出、産業立地の推進 ・若者等の人材確保の取組と産業立地促進方策との連携	・創造都市・創造農村の取組による丹波篠山のイメージブランド化 ・食育の推進と特産メニュー開発 ・起業人材の育成と支援 ・日本遺産活用協議会活動の推進	・農産物の輸出促進 ・GFP(農林水産食品輸出プロジェクト)やJETRO(日本貿易振興機構)を活用した輸出の支援 ・丹波三宝スイーツフェスティバルの開催 ・女性農業者の組織化 ・農(みどり)女子リンクプロジェクトの推進	・特産物を使ったケーキや雑貨などオシャレでセンスのある物の販売が増加。 ・丹波地域固有の風土の中で育てるブランド農産物が輝きを増し、新たなブランド農産物も充実。
	丹波ファンを拡大し、交流を促進する	・ホームページやフェイスブックによる情報発信(事務局・各施設) ・丹波の森収穫祭(なみきみちまつり)の開催(事務局) ・地域住民と都市住民との交流を深め、森づくり活動を広くPR ・ロゴマークの積極的な活用(事務局・各施設) ・フェノロジーカレンダー作成による情報発信(関係施設) ・地域の自然や祭礼行事、食などの生活季節層を作成し情報を発信	・明智光秀ゆかりの地の魅力発信 ・市の関連事業を支援するとともに、京都丹波とも連携した観光PRを実施 ・観光情報の戦略的発信 ・ふらり丹波路、旅丹、大丹波連携による観光情報の発信 ・JR福知山線の利便性向上対策 ・「たんば鉄道の日」の定着、周遊バスやフリーハイキングの実施 ・丹波焼の里・城下町直通バスの運行	・イベントの拡充とPR ・外国人観光客の誘致 ・ドローンを活用した情報発信 ・Wi-Fi環境や多言語案内表示の整備 ・大丹波連携による観光PR ・アプリ「丹波篠山NAVI」の開発	・シティプロモーションの推進 ・丹波学講座、たんばルシェの実施、観光Webサイトの構築、フリーペーパーの発行など ・黒井古地図アプリの開発とイベントでの活用 ・丹波市版DMOの検討(複眼構想による観光拠点整備) ・文化芸術に関わる人をテーマにしたプロモーションビデオの制作 ・黒井城跡を活用した「ようこそ御茶の国丹波へ」の実施	・多言語案内表示など外国人観光客の受入環境が充実。 ・森の魅力をもっと紹介することにより、国内外からの来丹波者や移住者が「丹波の森」をまるごと楽しむ。
	安全安心な地域をつくる	・学ぶ高齢者の集い丹波ブロックの開催(再掲)	・防災リーダーの育成 ・防災情報活用研修などで地域防災の担い手を育成 ・第3次山形地防・土砂災害対策計画 ・住宅再建共済(フェニックス共済)の加入促進 ・ひよご住まいの耐震化促進事業 ・地域医療を支える健康福祉ネットワークの推進 ・いきいき百歳体操・いきいきデカボー体操の普及 ・地域内高齢者の約1割が参加・住民主体の介護予防・介護支援 ・たんばの消費者力の向上推進 ・出前講座の開催 ・県立丹波医療センターの開設	・ユネスコ創造都市ネットワークを活かしたまちづくり ・2つの日本遺産を活かしたまちづくり ・ワラワラ市、犬山市、愛南町など姉妹都市との連携・交流	・「たんば恐竜協議会」の主催 ・全国2市3町による協議会の組織化 ・地域おこし協力隊によるインバウンド向け体験型観光の開発 ・関係人口の確保・定着 ・ふるさと住民登録制度の活用によるまちづくりへの参画 ・姉妹都市アメリカ合衆国セント・オーバン市からの訪問団接待	・交流都市との積極的な交流により、「丹波の森」が世界に広がる。 ・日本の原風景・地域資源を大切に守り、その魅力が丹波の森への注目を高める。 ・携帯端末を介した自動翻訳、ナビゲーションも普及し、国内外から丹波ファン(交流人口)、リポーターが増加。
					・医療介護情報連携システムのさらなる充実 ・防災行政無線デジタル化の推進 ・丹波市豪雨災害復興5年イベント「強くてやさしい安心社会」シンポジウムの開催 ・危険ブロック撤去支援 ・自治協議会のあり方懇話会による住民自治組織のあり方検討 ・流域内の保水や貯留機能の確保など「流域対策」を組み合わせた総合治水対策 ・県立丹波医療センターを中核とした地域包括ケアシステムの構築 ・市立看護専門学校による看護人材の育成 ・Net119緊急通報システム等の利用しやすい救急・消防体制の整備 ・丹波市豪雨災害の総まとめとして、「復興記録誌」の発行 ・「丹波市「心」つなぐ「防災の日」の制定	・共助の思想が広がり、自治会単位で防災に備える安全・安心な地域力が向上。 ・「丹波市復興モデル」が「防災・減災を推進」 ・いきいき百歳体操・いきいきデカボー体操が普及。 ・ICTネットワークによる医療、保健、福祉、介護の切れ目のないサービスが展開。

もりびとライフスタイルの創造(未来)

休みには
森の魅力をまるごと
楽しんでいます(再掲)

森をまるごと「里山」水
分れ「恐竜化石」のミュー
ジウムにして、楽しみ方を
みんで共有する。(再掲)

四季折々のイベントや祭り
などで、地域内外の人たち
が一緒に盛り上がりしてい
ます。
加えて、里山、水が分かれ、
恐竜化石をテーマとして週
末に開催されるハイキング、
木工や水辺のキャンプ、化
石発掘体験など多彩なイベ
ントを親子やグループで楽し
んでいます。
また、町中や公園で開か
れるマルシェやバル、そして
農家レストランなどで、採れ
たての食材を味わう地元な
らではのぜいたくを楽しんで
います。

自分時間に
森づくりを学び
実践しています

・少年高齢化社会が進ん
でも集落の暮らしに魅力
を感じられるよう、先端技
術を農林業に活用する。
・大交流時代にあたり、篠
山・柏原城下町などの歴
史的な町全体をホテルに
して、もてなす。

30年間進めてきた森づく
りを継続しながらも、社会環
境が大きく変わっていく中、
新たな森づくりも進んでいき
ます。
少年高齢化が進んでも集
落の暮らしを守りぬく必要が
あります。農林業を次の世
代へ継承することに加え、
新たな担い手を呼び込み、学
校や地域で育成していくこと
が大切です。
また、大交流時代にあって、
国内外へ発信し、交流を拡大
していくことも必要です。

1 策定趣旨

昭和63年9月の「丹波の森1,000人大会(さわやか県土シンポジウム)」において『丹波の森宣言』が採択され、平成30年に30年の節目を迎える。本稿では、30年間の「丹波の森づくりのこれまで」(別添資料参照)を振り返り、今後の30年を見据えた「丹波の森づくりのこれから」について、国際的な取り組み(SDGs等)や内閣府や兵庫県の2030年の展望など新たな視点を加え、丹波の森研究所としてのこれからの丹波の森の地域づくりについての方向性を検討した。

※SDGsを丹波の森づくりで考える意味

今後の地域づくりの基本的な方針としては、少子高齢化の課題に対応し、人口減少に歯止めをかけるとともに、暮らしやすい(暮らし続けることのできる)環境を確保し、将来にわたって活力ある持続可能な社会を創造していくことが大きな目標の1つとなるであろう。持続可能な地域を継続していくためには、環境・社会・経済の3側面における価値創造を通じて、多様な地域を実現することが求められる。

2015年9月に国連で採択された「持続可能な開発目標(SDGs)」は、経済・社会・環境の3側面における統合的取組を推進するものであり、今後の地域づくりの基本的な考え方と同じ方向にあると考える。国際的な取り組みと丹波の森づくりとリンクさせることで、SDGsを意識しつつ、地域づくりにおける課題解決を推進することにより、持続可能なまちづくりと地域の活性化を図るとともに丹波の森づくりをグローバルな視点での取組として発展させることもできる。

2 丹波の森づくりの基本方針 — 丹波の森づくりの新たな視点 —

30年後の未来社会を予測するのは困難であり、現実的とは言えないが、人口減少、高齢化の一方で、科学技術は進歩発達すると予測される。それを踏まえ、今後の丹波の森づくりの基本的な方針を以下のように設定した。

①森のスローライフを楽しむ

IT化や技術革新が急速に進む社会の中であって、山と川が織りなす豊かな自然にふれあいながら、農業や林業を身近に感じ、集落で暮らす。そんな丹波地域ならではの暮らしのライフスタイル＝スローライフを楽しめる環境を整備していく。

②森の魅力をまるごと楽しむ

森をまるごとフィールドミュージアムにする、歴史的な町をまるごとホテルにするような楽しみ方を実践できる環境づくりを推進する。地域にちりばめられてきた多彩な魅力を、単体で楽しむだけでなく、ネットワーク化して総合的に情報発信し、まるごと楽しめるようにする。

③帰りたいふるさとの森にする

日本の原風景を守り、絶品の農産物を食し、郷土の工芸に触れ、帰りたい(行ってみたい、楽しみたい)ふるさとづくりを行う。それらを大切に守り育てる人(もりびと)を育て、森が子どもを育み、全国、全世界の人にも伝え、何度も帰りたくなるふるさとの森にしていく。

3 丹波の森づくりの取組の方向（提言）

丹波の森宣言から30年間の取り組みを16項目に整理分類した「丹波の森づくりのこれまで」を基本とし、将来に向けた新たな視点や地域の動向を踏まえ、丹波の森づくりの新たな取り組みとして2項目を加え、下表の18項目について「丹波の森づくりのこれから」の取り組みの方向性を検討した。

【丹波の森宣言】

1988(昭和63年9月1日)

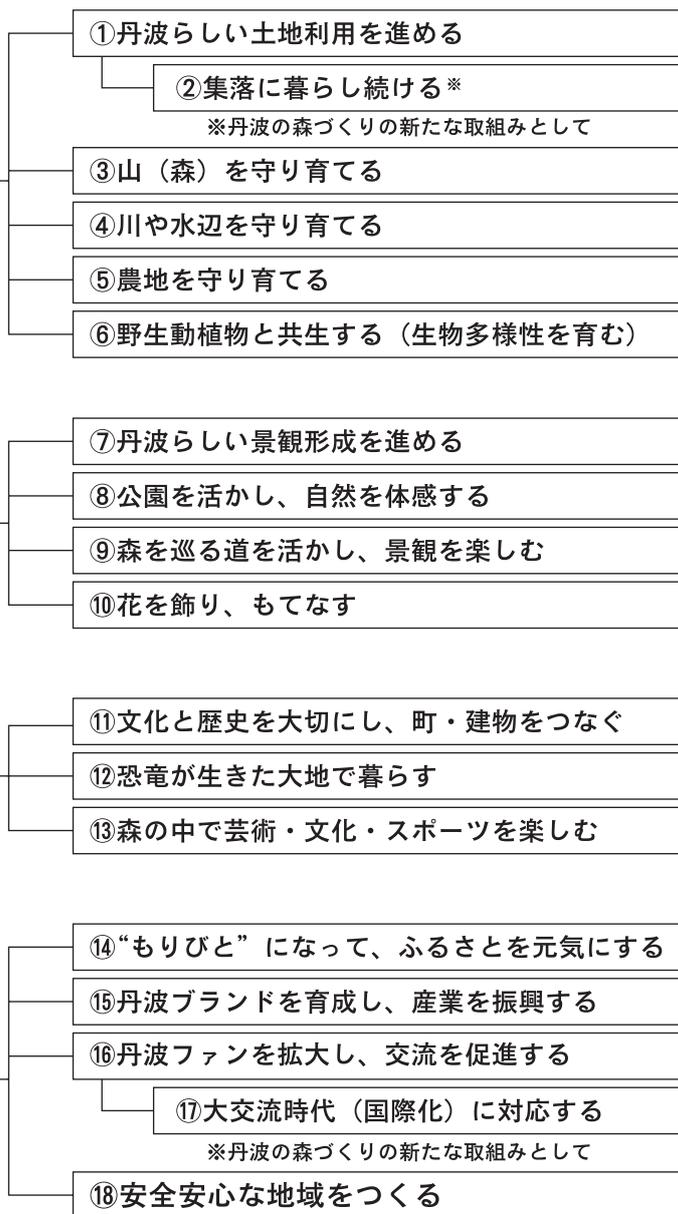
1 丹波の健全な発展をそこなうような自然破壊は行わず、**森を大切に**守り育てます。

2 丹波の自然景観を大切に、**花と緑の美しい地域づくり**を進めます。

3 丹波の文化景観及び歴史的遺産を大切に、**個性豊かな地域文化**を育てます。

4 丹波の素朴さと人情を大切に、**安らぎと活力に満ちた地域づくり**を進めます。

【丹波の森づくりのこれから】



・②、⑰は丹波の森づくりとしての新たな視点を加えた取組み
 ・①～⑱(②、⑰を除く)は 過去30年間の取組を分類したもの

宣言1 丹波の健全な発展をそこなうような自然破壊は行わず、森を大切に守り育てます

①丹波らしい土地利用を進める

- ・ まちと自然が調和した、活気ある丹波らしい風景が維持され、住民が主体となった新たな丹波の森の活用・楽しみ方が広がっていると考える。
- ・ 秩序ある土地利用の維持、地域資産価値の向上を図るため、エリアマネジメントの視点に立って、土地利用指針や緑条例の更新を推進する。
- ・ 街（建物）と自然（背景となる山並み）が調和した風景を実現するため、ランドスケープの視点で街並み景観マニュアルの提案を検討する。

※エリアマネジメントとは「地域における良好な環境や地域の価値を維持向上させるため、住民・事業主・地権者等による主体的な取り組み」であり、特定のエリアを単位にまちづくり組織やNPO、自治会や商店街などが主体となって、まちづくりや地域経営（マネジメント）を積極的に行おうという取り組みである。

②集落に暮らし続ける

- ・ 自動運転を活用した交通システム、ドローンなどを利用できる環境づくりに取り組む。
- ・ 新たに建設される丹波医療センター（仮称）をはじめとする拠点施設を核として、上記システムの導入を実験的に取り組む。
- ・ 集落のコミュニティの拠点ともなる「小さな拠点」を整備し、医療・福祉・商業等の機能が集約された拠点地区とのネットワーク化を図る。
- ・ 空き公共施設や公民館の新たな活用を図るとともに「小さな拠点」として機能的にもリニューアルを図る。

③山を守り育てる

- ・ 経済・環境・文化の側面から森の多様性を考慮し、ガーデニングやランドスケープ的な視点を取り入れた森林管理がされていると考える。
- ・ 丹波の森のガーデニング※（樹種の多様性、四季の彩り、森あそび、森の広場づくり）を推進する。 ※丹波の森を1つの庭と見立てて、彩りのガーデニングを考える
- ・ 林業、防災、自然遊びの多面的機能の発揮を目指した取り組みを推進する。
- ・ 木の駅プロジェクトを推進するグループを支援し、バイオマスの取り組みを拡大させる。

④川や水辺を守り育てる

- ・ 多様な川の機能を踏まえた河川環境整備が実施され、多くの人々が水辺で様々な楽しむ光景が見られるようになると考える。
- ・ 川遊びや水辺の生物多様性保全活動など、河川（水辺）の交流型整備（環境保全、ふれあい等に配慮した整備）を推進する。
- ・ 山林の保水性や土砂崩壊防止機能などの防災機能や安全性を高める森林整備（グリーンインフラ整備の考え方）を実施する
- ・ 水上回廊水切れフィールドミュージアム（水系、景観、生物多様性）の整備を支援する。

⑤農地を守り育てる

- ・農地の集約化、大型化が進むとともに、小規模農地でのブランド農産物のIT化、交流型農業（環境保全型、有機農業、生物多様性とセットになった農業）など、農産物の生産販売以外にも収益の向上が図られ、若い世代の新たな担い手が活躍していると考ええる。
- ・農地の集約化・大型化、IT・ドローン活用、ロボットアシストによる就業率の向上を支援する。
- ・若い世代による新たな丹波ブランド開発を支援する。
交流型農業の実践による交流人口の増加・進展を支援する。

⑥野生動物と共生する（生物多様性を育む）

- ・野生生物との棲み分けを基本に置きながら、里山整備（バッファゾーンの整備や間伐、森の広場づくりなど）推進し、野生生物との共生が図られていると考える。
- ・野生動物の生息地である里地里山の環境整備を進め、生物多様性の向上を図る。
- ・獣害対策では、「棲み分け」を基本とした里山整備とともに、従来の対策を合わせて、総合的に推進する。

宣言2 丹波の自然景観を大切に、花と緑の美しい地域づくりを進めます

⑦丹波らしい景観形成を進める

- ・丹波の森全体を庭と捉え、背景となる森のガーデニング（③山を守り育てる参照）、まちの広場や個人の住宅にオープンガーデン（⑩花を飾り、もてなす参照）があり、それらが調和し地域の文化が育まれる丹波の森・庭園文化都市が形成されていると考える。
- ・森林管理にガーデニングやランドスケープの視点を持ち、広葉樹林や花木への更新など森の多様性、四季の変化を楽しめる丹波らしい景観づくりを推進する。
- ・建物建築やまちなみ整備にあたっては、借景となる森（山なみ）と調和するよう配慮する。上記の視点で制定された緑条例を再確認するとともに、一部見直しや周知の方法等について検討する。
- ・丹波産材や森林景観を活用した建築物等を表彰する「丹波の森の景観賞」を設ける。

⑧公園を活かし、自然を体感する

- ・シンボルの森（丹波の森公園、丹波並木道中央公園、ささやまの森公園、丹波年輪の里など）が丹波の森を楽しむ拠点として整備されるとともに、里山整備モデルや研修地、各地の自然体感インフォメーションセンター機能が発揮されていると考える。
- ・地域の自然を体感する施設として、ハイキングやサイクリングのコース設定・整備やガイドブックの作成、休憩所や広場の整備など、ネットワークの森として楽しめる施設とする。
- ・歩いて自然を楽しむフットパスやトレイルを整備するとともにガイドマップを作成する。
- ・インバウンドにも配慮した情報発信を行う。

⑨森を巡る道を活かし、景観を楽しむ

- ・ 丹波の森の自然景観や伝統的な風情のある市街地や集落を巡り楽しむ「丹波の森めぐり」でにぎわっていると考ええる。
- ・ 徒歩、自転車、自動車などの移動手段に応じた道づくり、景観づくりを推進する。
- ・ 鉄道と連携し、安全・快適なサイクリングコース（川代溪谷周辺など）づくりを推進する。

⑩花を飾り、もてなす

- ・ たんばオープンガーデンなど住民参加型のガーデンづくりを丹波の森全体に広げるとともにまちなかの公的施設や事業所には「まちかどガーデン」が整備され、来訪者を彩り豊かな景観で楽しませていると考ええる。
- ・ 庭園文化都市にふさわしい、地域ごとに特色あるまち飾り（花飾り）を整備する。
- ・ まちかどガーデン賞（丹波の森の広場顕彰制度）を設ける。

宣言3 丹波の文化景観及び歴史的遺産を大切にし、個性豊かな地域文化を育てます

⑪文化と歴史を大切にし、町・建物をつなぐ

- ・ 丹波地域には、町全体が歴史地区として徒歩で巡る観光スポットが点在しており、これを楽しむ来訪者でにぎわっている。また、その中にはインバウンドの外国人も見られると考ええる。
- ・ 各歴史地区の歴史・伝統・文化を紹介するインフォメーション、スマートフォンを活用した地域案内などの整備を推進する。
- ・ 各地には戦国時代の山城が多数あり、ハイキングや展望を楽しめる施設整備を推進する。
- ・ インバウンドに対応した情報発信やガイドブックの整備を推進する。

⑫恐竜が生きた大地で暮らす

- ・ 丹波地域恐竜化石フィールドミュージアム（野外博物館）が広く知られ、スマートフォン片手に解説を聞きながらフィールドミュージアム・スポットを巡っていると考ええる。
- ・ スマートフォンによる解説、道案内の充実を推進する（サイン+QRコードなどの活用）
- ・ 恐竜化石の発掘体験をはじめ、地域資源を活用した体験型ツアーを推進する。

⑬森の中で芸術・文化・スポーツを楽しむ

- ・ 空き家や広場を活用した「森の映画館」、農家と住民が参加する「森のマルシェ」などがあちこちの「丹波の森の広場」で開催されていると考ええる。
- ・ そのため、空き家や空き施設（低利用度施設、廃校、公民館）などのストックを積極的に活用する。
- ・ 実現に向けて、地域住民や NPO などが主体となったエリアマネジメントを推進するとともに、それを支援する組織の充実を図る。

宣言4 丹波の素朴さと人情を大切に、安らぎと活力に満ちた地域づくりを進めます**⑭もりびと” になって、ふるさとを元気にする**

- ・ 職場でもなく家庭でもない、第3の場所「丹波の森の広場」づくりをもりびと（地域の若者や移住者）が立上げ、地域住民とともに観光客も参加し楽しんでいると考える。
- ・ 人口は減少するが、交流人口（もりびと）が増加し、丹波の森で活動する人口の増加を図る。
- ・ 「もりびと」は地域再生の核となると考え、「もりびと」の育成・増加のため、NPOなどの中間支援組織や行政が応援する体制を整備する。

⑮丹波ブランドを育成し、産業を振興する

- ・ IoTや新技術による丹波ブランドの生産性の向上に伴い、若者の就業・起業が促進されるとともに、新たな丹波ブランドが誕生していると考ええる。
- ・ そのため、丹波地域固有の文化、産業、技術、農作物をIoTや新技術を活用したイノベーションの実現に向け支援する。
- ・ 丹波地域が若者のあこがれの就業先となるよう、制度や仕掛け、また支援組織を整備する。

⑯丹波ファンを拡大し、交流を促進する

- ・ 携帯端末を利用した自動通訳やナビゲーションが普及し、国内外からの観光客が本物に触れることが出来る体験メニューなど地域の特性や観光スポットを物語化して発信する。
- ・ 本物志向のリピーターが増え、日本の原風景を大切に守り、絶品の農産物、伝統工芸などの地域資源に磨きをかけ、農業体験や工芸体験をとおしてその魅力に直接触れることができる丹波地域が注目をあびていると考える。
- ・ 丹波の森のライフスタイル（衣食住）を体感するツアーを推進する。
- ・ 宿泊の多様性（農家民宿、B&B、ファームステイなど）を図る。
- ・ 外国人観光客への対応、情報発信、コンシェルジュ機能など、機能強化を図る。

⑰大交流時代(国際化)に対応する

- ・ 丹波地域に外国人旅行者・訪問者（インバウンド）を誘致するため、多言語案内、食、災害対応などを整備するとともにスマホなどSNS、ICTによる多言語案内サポートの充実を図る。
- ・ 丹波地域独自の対応策（風景、食文化、宿泊場所など）、都市部では感じられない体験（歴史的城下町をまるごホテルに、まるごとフィールドミュージアムなど）を用意する。

⑱安全安心な地域をつくる

- ・ 地域活動を活発に行う成長した市民が丹波地域の強みであり、こうした市民共助が中核となり、災害や犯罪にも強いヒューマンウェア、地域のきずなの構築が望まれる。また、全国で頻発する自然災害の復興への取組み事例（発生残土を利用したほ場整備、地域の資源・技術を活かした産業振興、治山砂防施設法面の緑化など）として紹介する。
- ・ 小規模自治、空地・空き家・耕作放棄地の活用、高齢者の活躍の場の取組みを支援する。

プログラム

受付 12:00

記念植樹 12:40

開会 13:00

*オープニングコンサート

合唱:コーロ・ディ・マッジョ 指揮:足立さつき

*映像 「丹波の森のすがた」

*主催者挨拶

*来賓祝辞・紹介

*ビデオメッセージ 「河合雅雄先生からの贈り物」

*映像 「丹波の森づくりのこれまで」

休憩 14:40

*「みんなで語ろう30年後の丹波の森」

コーディネーター:角野 幸博 (丹波の森公苑長)

コミュニケーター:中瀬 勲 (人と自然の博物館長)

:各世代の代表のみなさん

*映像 「丹波の森づくりのこれから」

*「丹波の森」ロゴマーク発表

閉会 16:30

■ シンポジウム出演者

コーディネーター …… 角野 幸博 先生 コミュニケーター …… 中瀬 勲 先生

小学生

1. 村上 珠基 さん …… 丹波篠山市立味間小学校（6年生）
2. 京川 和香 さん …… 丹波篠山市立城北畑小学校（6年生）
3. 山本 陽友 さん …… 丹波市立南小学校（6年生）
4. 梅垣 花菜 さん …… 丹波市立南小学校（5年生）

中学生

5. 塚本 透和 さん …… 丹波篠山市立篠山中学校（3年生）
6. 木村 朱杏 さん …… 丹波篠山市立篠山中学校（3年生）

高校生

7. 川合 賢志郎 さん …… 県立柏原高校（1年生）
8. 増田 莉子 さん …… 県立柏原高校（1年生）

大学生

9. 高本 和樹 さん …… 関西学院大学
10. 岩崎 智彦 さん …… 神戸大学

移住者

11. 岸田 万穂 さん …… 丹波篠山市八上上
12. 小村 香織 さん …… 丹波市春日町中山

地域活躍者

13. 今井 進 さん …… 丹波篠山市佐貫谷
14. 鴻谷 佳彦 さん …… 丹波市春日町下三井庄

丹波地域ビジョン委員会

15. 伊勢 隆雄 さん …… 丹波篠山市大山上

司会 さて、ここからは各世代からのメッセージと題したシンポジウムでございます。丹波の森づくりがスタートして30年間、あらゆる方面において皆様からたくさんのお力添えをいただいております。テーマは「みんなで語ろう30年後の丹波の森」。ご参加いただいております皆様は小学生から地域で活躍されている方々まで様々です。幅広い世代の方々に丹波の森づくりについての思いを語っていただければと思います。進行のコーディネーターは丹波の森公苑長 角野幸博が務めます。そして、コミュニケーターには人と自然の博物館長の中瀬勲様にも入っていただきます。それでは皆様、よろしくお願いいたします。

角野先生

角野 それでは早速、シンポジウム「みんなで語ろう30年後の丹波の森」を始めさせていただきます。今日は、ご覧になっているように、まさにこれからの時代を担ってくれる、きっと30年後に30年前の話を書いてくれる、そういう若い人たちから、現場にIターンなどで入っていただいて実際に活躍していただいている方、また地域で丹波の森ビジョンを自分たちで作って活動されている方などいろいろな方々にお越しいただきました。そういった方々から丹波の森づくりへの思いを語っていただきたいと思っています。

その前に、この丹波の森づくりに当初から関わってこられた、現在、兵庫県立人と自然の博物館の館長、また淡路景観園芸学校の校長先生、そして、さらに前丹波の森公苑長でいらっしゃった中瀬勲先生から、30年前に何があったのかといったことを少し触れていただいて、そのあと皆さんからお話を頂戴したいと思います。

それでは、中瀬先生、よろしくお願いいたします。

中瀬先生

中瀬 ありがとうございます。よろしくお願いいたします。

では、彼らが30年後に私のようにしゃべれるかどうか、30年後に私のようにしゃべってください。

今日、丹波の森ということではいろんな定義がありましたが、やはりみんなで議論したのが森もあって川もあって畑もあって家もあって農村もあって、これ全部を丹波の森、ウィーンの森より素晴らしいものにしようというのが30年前に議論になりました。半田真理子先生という第一線の先生が来られたことを覚えています。ちょうど30年前、1988年、昭和63年、ホロンピア'88がありました。福知山線の電化、高速道路等々で丹波に開発の波が来る、もっと自然を守ろうということで、この動きが始まったことを覚えています。その時のメインの会場が三田市のフラワータウンのホロンピア館です。私は、そんなところで働くとは一切思っていなかったのですが、

中瀬　そこで今は館長をしておりますが、当時は大阪府大の助教授をしまして、国際会議でそこに参加したのを覚えています。次に、今から28年前、1990年、平成2年、兵庫県に変な職員がいました。辻ひろしさん、実名で言います。「丹波で森づくり大学を河合先生しましょう」と来ました。まだ私は大阪府大の頃です。その頃から兵庫県職員、大学の先生を使いまくるのが上手な人がいっぱいいて、私もそのうちの一人、角野先生もそのうちの一人なんですが、みんなで森づくり大学とかを考えました。そのときに、ちょうど森協会の事務所が年輪の里にありました。年輪の里のバンガローにあって、第1回の森づくり大学は年輪の里でしたことを覚えています。三つ目、今から27年前、1991年、平成3年、忘れもしません。多紀郡篠山町長の新家さん、それから氷上郡青垣町長の平岩さん、それから村山克己さん、それから主になった細見さんたちが一生懸命に森協会の事務をされてきました。ちょうど丹波の森公苑ができるときに、貝原知事に「この丹波の森公苑の運営を森協会がさせてほしい」ということを言っておられました。今から思うと指定管理者制度、今頃は流行っていますが、もう丹波では27年前に市民団体がこういう施設を運営するんだというのが始まりだと思っています。それから、今から25年前、1993年、平成5年、先ほど河合先生が言われていました森林文化国際会議、ウィーンの森、フォンテーヌブローの森のシュバルトバルトがあって、彼らがきて、河合先生が森を楽しもうということをお話しされました。夜は河合先生の部屋に入りまして、フランス人とドイツ人が和気藹々とお酒を飲みながら語っている。世界中どこ行ってもないんですが、河合先生の部屋だけで、そういう楽しいことが丹波で起っているということを覚えています。その頃は海外との交流が25年前にだんだんと丹波で始まった。国際会議なのに英語が公用語でなくて、ドイツ語とフランス語と日本語だったことを覚えています。その時に今、国連大学の副学長をされています神戸大学の副学長の竹内先生とか、いろんな先生が応援に来てくれたことを覚えています。ウィーン市13区との友好姉妹提携もこの時にされていたと思います。この年に国際的に発信したニュースが国内にもすごく発信しています。「もり・ひと・まちづくり」森大学の講義録を単行本にして発行したり、あるいは今日はおられませんが大阪大学の名誉教授の鳴海先生が東京、関西、日本中のまちづくりの専門家をこの丹波にお呼びして、国内の活動家と一緒にここで議論したことを覚えています。そのとき、ちょうど伊藤先生、小泉首相のブレーンをされている方もここにいられてまして、その後丹波が国土庁長官賞をもらったときに、その伊藤先生に委員長をしてもらいました。そういうことがあったんですが、今から17年前、2001年、平成13年、すごいことが起こりました。丹波夢ビジョン、地方ビジョンを全県下で作ろうという気運になりました。丹波だけです。周囲の方が集まって、自分たちで議論して、起案して、県の人は何をしたか。彼はホッチキス止めをただけです。他は全部市民が作りました。その時の名前呼びます。浅倉さん、

中瀬 石塚さん、遠藤さん、大路さん、北村さん、小畑さん、酒井さん、酒井きんやさん、清水まりこさん、高見さん、それから並川さん、坂東さん、広瀬さん、婦木さん、前田さん、山名さん、横山さん。もう、たぶんこれだけ名前を呼んだら、ここに何人もおられますし、たぶんこの方々が石川先生や小西先生の後を継いで資料を出されてたんですが、「まちづくりをしよう」とすごい熱気があって、私は高槻市から来ていたのですが、ここを出たのが10時頃で家に着いたのが次の日だったのを覚えています。そこら辺の余波というか勢いで、シューベルティアーデたんば、丹波のむかしばなし、おさん茂兵衛等々をずっとやってきました。そして、最後のセクションですが、今から10年前、ちょうど20周年の記念事業をさせていただき、そのときに恐竜が出てきました。岩槻先生が言われました。「丹波の人々がこの20年間頑張ったから、神様が恐竜を贈り物でくださったんですよ」ということを岩槻先生が言われたことを覚えています。ということで、今日、北村昌美先生の名前も出ておりましたが、篠山の方には河合先生、こちらの方には岩槻先生ということで丹波はすごく良かったですね、いろんな良い人材に恵まれて。最後、丹波をどうするのかというのは、これから皆さんが語ってくれると思うんですが、一つだけ申し上げたい。本当に丹波の森を丹波の森として、どう残して進化していくのか。それは人でもない、物でもない、丹波の森という実態そのものが、あるいは、その丹波の森を支える人材なり組織なのか。そうやって、いろんな側面から議論していただけたら、30年後の森が見えるのではないかなと思います。

以上、ありがとうございました。

どうもありがとうございました。それでは、今から小学生から順番に発表してもらおうと思います。

ではトップバッターは村上珠基さん。どうぞ。

丹波篠山市立味間小学校 6年 村上珠基

村上 僕は、小さいときから山や野原で遊ぶのが大好きでした。山や川でよくクワガタ捕りや魚釣り、魚捕りなどをしていました。今もクワガタ取りや魚釣り、魚捕りをしています。どんな魚が捕れるか、釣れるか、どんなクワガタがいるかドキドキしながら遊びに行くのがとても楽しいです。

僕は、もっとこういうふうになってほしいという思いがあります。それは、杉やヒノキなどの針葉樹だけではなく、クヌギやコナラなどの広葉樹やオオムラサキの幼虫の餌となるエノキの木が丹波の森に広がってほしいことです。そこで、オオムラサキが森の中でヒラヒラ飛んでいるところを見てみたいです。ほかにも森の中に入れば、四季それぞれの鳥や生き物が棲みつき、命の大切さと自然の美しさを感じ、学ぶ場所になってほしいということが僕の夢です。

村上 次に、僕がこんな丹波になってほしいという思いがまだあります。それは、この丹波が北海道のようなクヌギの森にすれば、動物たちもエサに困らないので人里に下りてくることもなく、動物たちがとても棲みやすくなると思います。今ではシカやイノシシなどが害獣として駆除されていますが、その理由は森にエサが減っていることが原因の一つだと思います。それを防ぐためには、やはりシカやイノシシのエサとなるドングリなど実のなるクヌギの森がとても重要だと思います。僕は、人が動物を守る立場にならなければいけないと思います。

そのために、僕は広葉樹の森を増やすため、エノキやクヌギ、コナラの木を植樹をしたり、山の手入れなど山の環境を整える活動をし、生き物の保護など頑張りたいです。

角野 どうもありがとうございます。それでは、もう一人、篠山市から来ていただいています京川和香さん、お願いします。

丹波篠山市立城北畑小学校 6年 京川和香

京川 私は、小さいころから、ストロバレ、縄文の森塾、森の学校、里山ジュニアなどの野外活動に参加してきました。今日は、このような活動を通して感じること、思いなどを発表します。

これらの活動で楽しかったことは、川遊びです。川遊びでは、いろいろな生き物を観察したり、カヌーをこいだりしました。川は真夏でも涼しくて、気持ちよかったです。生き物もたくさんいて、夢中で追いかけてました。他にお気に入りは、山などに入って遊ぶことです。アスレチックなども楽しいけれど、木登りや山登りなど人が手を加えていない遊びの方が一通りではなく、自分の考えでいろいろな遊び方ができて面白いです。5才の時には、すでにみたけや深山に登っていました。幼稚園でも園庭の木に登りたいと言えば、登らせてもらえました。そのときは、当たり前だと思っていましたが、私たちが知らないところで、先生方が強度や安全性を確認してくださっていたことが分かりました。危険だからといって止めさせたりせず、木登りや川遊びをさせてくれたこと、見守っていてくれたこと、いろいろな自然の中での遊びを教えてくれたことを私の周りの大人に感謝しています。

将来の夢は、まだ決まっていません。でも、どんな形になっても、今まで野外活動で学んできたことなどを使って、自然を守ることに関わっていけるような仕事に就けたらいいなと思っています。なぜなら、車に乗っている時に景色を見ていると、田んぼだったところが埋め立てられていたり、そこに家が建っていたりするし、少し行くとつぶれそうな家があるのに、なぜそこを建て直したり、使ったりしないのかと感ずることもあります。田んぼや畑が減らないように新たに宅地にしないでほしいと強く思うのです。他にも土手に「オオキンケイギク」という特定外来生物が生えていたり、

京川 それがお庭に生えていたりして、外来種はいけないと知っていても、どうしていけないのか、外来種がどれなのか分かっていない人がいると感ずることがあるからです。

私は、篠山に日本古来の植物や生物がいて、田んぼや畑がしっかりとあり、今ぐらい町並みが残っていて、子どもが家の中ばかりでなく、外や自然で遊べるような地域になることを願っています。

角野 どうもありがとうございます。それでは3人目ですね。今度は丹波市からです。山本陽友さん、お願いします。

丹波市立南小学校 山本陽友

山本 ほくは大阪に住んでいて、幼稚園のころに丹波に引っ越してきました。大阪はマンションがいっぱいあって、公園や道にしか木は生えていなかったし、カエルもあんまり見たことがありませんでした。もちろん、ヘビやタヌキ、シカ、サルなんて見たこともありませんでした。引越してきてからは、どこを見ても緑がたくさんあって、カエルはそこら中にいたし、初めてヘビを見たときは、とても驚きました。丹波は大阪と違って、桜や秋のもみじの紅葉や冬の雪など、とてもきれいな自然があります。

ほくは、その自然で遊べる活動の縄文の森塾に4年生のときから参加しています。弓矢作りやツリーイングができて、丹波の楽しい自然をより満喫できました。森塾は、自然に触れあうだけでなく、班の中で友達を作って何かに挑戦したりして、協力する力が身につきました。友達と協力したりすることで、楽しい自然の中でもっと楽しく遊べました。

丹波には自然以外にも自慢できる文化もあります。ほくは、今年の秋祭りで稲畑式三番そうの踏み子をしました。三番そうは、古くから続く作物の豊作と平和な世の中を願う舞いで、毎年行われています。舞いは、地域の人がていねいに教えていただきました。一ヶ月ほど毎晩稽古をしました。途中で足や手が痛くなったり、こけそうになったりして、とても疲れたし、本番はとても緊張しました。でも終わった後には、地域の人が優しく声をかけてくださって、嬉しかったです。

そして、丹波でいいなと思うのは、地域の人があいさつをしたら、あいさつを返してくださることです。登下校の時もいつも声をかけてくださいます。だから、僕もどこへ行っても、場所や年齢に関係なく、あいさつをしたいです。

30年後は、僕は42才です。今のお父さんと同じくらいです。僕の夢は、レスキュー隊員になることです。丹波の自然の中で友達と協力していく力や地域の人と関わる大切さは、レスキュー隊員を目指すことにきっとプラスになると思います。42才の僕は丹波に住んで、レスキュー隊員として活躍しているかは分かりませんが、丹波は僕

山本 のふるさとです。そして、42才の僕には子どもがいるかもしれません。だから、子どもにも丹波の美しい自然や楽しい自然を満喫し、どこへ行ってもあいさつをしてほしいです。また、丹波にある文化などを受け継いでほしいです。そして、ずっとずっと自慢できる丹波にしたいです。

角野 どうもありがとうございます。それでは最後の小学生、4人目です。梅垣花菜さん、お願いします。

丹波市立南小学校 梅垣花菜

梅垣 私は、夏休みの家族旅行で自由研究をしました。旅先で出会った人に「あなたの街の一押しは何ですか？」とインタビューして、街自慢を調査しました。そして、「丹波市の一押しは大納言小豆と丹波竜です。」と宣伝し、ちーたんサブレを渡しました。出会った人誰もが嬉しそうに全国各地の一押しを話してくれました。私も丹波市のことを全国各地の人に伝えられて嬉しかったです。

でも、実は私が思う本当の一押しは「丹波竜」でも「大納言小豆」でもありません。私の一押しは、毎日歩く通学路です。私の通学路は、加古川沿いにある堤防道です。野鳥がたくさんいて、友達と野鳥を見つけ合うのが楽しいです。セキレイやカワセミ、シラサギ、キジ、カモ。そして、キツネやタヌキもいます。鳥も動物も人も、自然の中でみんな一緒に生活しているように思えます。通学路は、私のお気に入りの場所です。

でも、丹波市は、ただ自然が豊かなだけではなく、都会に負けない塾が2つあります。ちょうど一ヶ月前、丹波の森子どもミュージカル体験塾発表公演がありました。私は、このステージで、ピーターパンを演じました。丹波市や篠山市などの友達と一つの作品を作り上げたこの三ヶ月は、最高に楽しく幸せでした。そんな私に、母は「都会でしかできないことが、この田舎でも体験できて幸せやね。」と何度も言います。

もう一つの塾は、丹波縄文の森塾です。ひと月に1回、自然の中で火おこし体験、山歩きなど、いろんなことを体験させてもらっています。

どちらも、とても楽しい、ここだけの塾です。

私は、大人になっても丹波市に住みたいと思っています。大人になった時も、子どもたちが田舎にいても、いろんな体験ができる丹波市だったらいいなと思います。30年後の子どもたちが、私が体験したような心の底から楽しいと思えるようなことができるように、私も大きくなった時、そのお手伝いができたらいいなと思います。

都会のようなことができて、でも鳥がいっぱい飛ぶ自然いっぱい丹波市が、私が大人になっても続いてほしいです。

角野 どうもありがとうございます。4人の小学生に発表してもらいました。中瀬先生、今の4人の小学生の発表を聞いて、いかがですか。

中瀬 上手です。一つは、もうみんなプロですね。生物のこととか、共生のこととか、ずっと四季の変化まで、しっかりと行ってくださいました。それから農産物、やっぱり黒豆とか小豆、この地域の遺伝資源をどうするか、これはものすごく大事なので、また是非頑張ってください。三つ目、県民局長さん、公苑長さん、子どもミュージカルを褒めてくれるは、縄文塾は褒めてくれるは、本当にありがとうございました。丹波の森公苑でこれだけやってきて、こんなコメントは大変嬉しいです。縄文塾に小山先生がいらっしゃいますが、覚えていますか。怖い顔をして縄文人がそのまま今、現れたような。あの先生と河合先生が仕掛けられたので、それは立派なものやと思います。

角野 どうもありがとうございました。それでは次に2人の中学生に話をしてもらおうと思います。始めは塚本透和さん、お願いします。

丹波篠山市立篠山中学校 塚本透和

塚本 「未来のための僕達の使命」

僕は篠山市に住んでいます。なので、少し篠山市を鼻負してお話をするかもしれません。僕は、篠山の自然や文化が大好きです。なぜ好きなのか。それは豊かな自然と昔ならではの文化や建物を残しつつも新しいものを取り入れたり、篠山でしかできない町づくりをしていると思うからです。たとえば、古民家を利用したホテルやレストラン、昔ならではの雰囲気が残るブリキのおもちゃ屋さん、自然の中にあるアスレチックなどたくさんあります。こういったことが出来るのも篠山ならではののだと思います。ですが、こういったものを残して、守っていくためには、市民一人一人がそれを知り、他の人たちに伝えていくことが大切なのではないでしょうか。僕たち篠山中学校生徒会では、夏のインターアクトクラブ地区年次大会のホスト役として、兵庫県内の多くの高校生や大人の方を篠山市にお招きしました。そして、篠山の良いところをたくさん伝えました。その大会では、「みんなで作る農村の未来」というテーマでグループに分かれてワークショップを行いました。そこでは、自分では考えつかないような意見を聞くことができました。また新しい目線で私たちの住む篠山について考えることができました。たくさんグループの発表の中で共通していたのは、都会には出来ない田舎らしい発展をすることが大切だということと、そのことを他の市、県の方に伝えていかなければならないということです。僕は田舎らしい発展、つまり大きな建物を造りすぎたりするのではなく、町の特徴を残しつつも不便のないようにしたりすることは、篠山市は出来ていると思います。あとは、この素晴らしい文化、自然、町をたくさんの人に伝えていくことが大事なのだと思います。そのために僕たち生徒会では、デカンショ祭りボランティア、春日能ボランティア、篠山ABCマラソンボランティアに参加しました。参加することによって、今まで知らなかった自然や文化、そして人々

塚本 の温かさを再発見することができました。小さな取り組みを少しずつ積み重ね、篠山の伝統文化、そして自然を多くの人に知ってもらい、守っていき、好きになってもらいたいと思います。さて、今日も篠山市にとって大事な日です。ですが、もう少しで市名変更の投票があります。篠山市に丹波を付けるだけで、どれほどの経済効果があるのか、僕には分かりません。ですが、僕は賛成です。なぜなら、たくさんの人に篠山市を知ってもらえると思うからです。ですが、僕たちには投票権がありません。だから、そのためにもまず私たち自身中学生が篠山の自然や文化をもっと知って、もっと分かって、もっと他の人に伝えていきたいと思います。以上です。

角野 どうもありがとうございます。では、もう1人の中学生です。木村朱杏さん、お願いします。

丹波篠山市立篠山中学校 木村朱杏

木村 「篠山の魅力」

山々に囲まれ、公園や畦には自然に咲いた花や草が風に揺られている。地域の人たちは私に優しく接してくれ、スーパーで出会えば笑顔で会釈する。こんな自然に恵まれ、人々に恵まれている篠山に私は15年間ずっと住み続けています。しかし、篠山は田舎です。年頃の子どもは「こんなところ、何もなし」と言って都会に出て行ってしまおう。だから篠山市は少子高齢化がぐんぐん進んでしまっている。私も都会に憧れを持つ子どもの中の一人です。大人になったら東京や大阪に出て働きたい、ずっとそう思っています。しかし、中学3年生になって考えが少し変わった気がします。

私は、今年、篠山中学校の生徒会書記を務めています。篠山中学校の生徒会はインターアクトクラブに所属しており、主にボランティア活動をしています。ABCマラソンで楽器を吹いて応援したり、春日神社の能舞台を掃除したり、デカンショ祭りの椅子の準備をしたり、他にもたくさんのボランティア活動をしてきました。私は、ボランティア活動を通して誰かのために何かをすることの大切さを学んだとともに、あることに気づきました。「篠山、めっちゃええところあるやん。」ABCマラソン、春日能、デカンショ祭り。他にも味まつりや陶器祭りなど篠山は魅力に溢れている。特に春日神社の能舞台は1861年に建てられ、全国でも屈指の能舞台だと聞かされた時は、「すごい。」としか言葉が出ないほど驚きました。陶器祭りに出されている丹波立杭焼は、日本六古窯に入るすごいものだということも知りました。篠山は、ただの田舎じゃない。たくさんの人たちによって守られ、受け継がれてきた伝統と文化がたくさんある。私たち子どもの手で篠山の魅力ある伝統と文化を未来に受け継がなければならない。そう思いました。

将来、私が篠山に住み続ける可能性は100%じゃないし、伝統文化を守る活動を

木村 しているとも限りません。しかし、何かしらの方法で篠山の魅力を伝えていきたいと思っています。大人になったときに自分の子どもや仕事先の人たちに「篠山っていいところやで。」と伝えていきたいです。

私が想像する未来の篠山は、今のままの自然と文化、伝統にあふれ、その町並みの中に篠山に住んでいる人たちや観光客が笑顔でいる風景がある、そんな未来を私は想像しています。以上です。

角野 どうもありがとうございます。中瀬先生、中学生2人の発表が終わりましたが、いかがでしょうか。

中瀬 さすがですね。すごい。まず篠山ならではのまちづくり、田舎らしい発展という中学生の皆さん方の良い発想で、地域資源をちゃんと能舞台から。能舞台の下、見られたことがありますか。あの下に立杭の壺がありますね。昔、のぞかせてもらったことがあります。そういう文化的な資源とか、自然的な資源をしっかりと皆さんで発掘して、それをどう活かしていくか。私が若い頃に本を読みました。栗田勇先生が書いた「伝統の逆説」です。それは何かというと、伝統があるからアバンギャルドができるんだと。だから、しっかりと伝統を守ることによって新しい動き、アバンギャルドができるんですよという本の趣旨はそんなんやったんですが、まさに皆さんがこれからそういうのをやってくれないかなという気がします。

角野 どうもありがとうございます。続いて、次は高校生です。高校生も2人、登場してもらいます。まずは川合賢志郎さん、お願いします。

兵庫県立柏原高等学校 川合賢志郎

川合 こんにちは。柏原高校1年の川合賢志郎です。私は高校で研究をしまして、その際に河合先生の丹波の森構想といったものに感銘を受け、その上で丹波をどのようにしたら発展させられるのかという研究を行ってきました。今回は、その丹波の地域課題である人口減少対策について、話したいと思います。丹波市丹の里創生総合戦略では、活躍人口の増加を課題としています。活躍人口の増加のための目標の一つに魅力的な仕事を創造するというのがあります。伝統ある丹波の豊かな自然環境を乱さない、魅力ある仕事とは、いったいなんなのでしょう。地域資源を生かした農林業はもちろんのことですが、私はIT企業の誘致をより強化することがよいのではないかと考えました。ITのメリットの一つは、何より自然環境に優しいということです。二つ目のメリットは、一定のスペースが確保できれば仕事ができる。インターネットが繋がる場所であれば、どこに住むのも自由だということです。IT企業体への支援が丹波の森を守り、丹波を持続的に発展させる良策になると考えました。自然と人と文化と、

川合　そして産業の調和をテーマとした丹波の森構想のまちづくりに合っていると私は思いました。また、ご存じの方も多いたと思いますが、丹波市ではIT関連の補助金を通じてIT企業を支援しています。オフィスの家賃や改修費などに75%、ITを扱う技術者に年100万円を支給するという手厚い補助を行っています。日本一の支援を行う自治体を丹波市が目指すことで、IT起業家をさらに呼び込むことができると考えています。中央大学大学院のある論文では、IT起業家が地方に本社を構えるメリットとして、大きく5つ挙げられています。1つ、地域の優秀な人材を現地採用できること。2つ、離職率が低く、勤続年数が長いこと。3つ、都市部と比べて人件費が安いこと。4つ、同業者同士が多く、コミュニケーションが簡単であること。5つ、自然豊かな環境は開発業務に専念しやすいということ。このように都市部でなく、丹波市だからこそ素晴らしいというメリットがあることが分かります。IT企業にとっては経済的な支援策ではなく、どのような場所に住むか、どのように働くかといった視点も重要視するようになってきているということが分かりました。

そこで丹波市で行ってほしい取り組みを、私から3つ提案したいと思います。1つめは、お試しオフィス体験事業です。空き家を改装したオフィスを無料で提供したり、丹波市への交通費、オフィス利用料、光熱水道費、移動車両なども含め、すべて丹波市が負担します。滞在中に丹波市の魅力をPRすることで、企業誘致の可能性を高めることができると考えました。2つめは、プログラミング甲子園の開催です。ITのまち丹波を象徴するイベントを開催してほしいと思います。特にパイソンというプログラミング言語をGoogleが公用言語に選んでいて、AIやIoT、ビッグデータの解析で使われています。パイソンをキーワードにすることでITのまち丹波の注目度をさらに高めることができると考えました。3つめは、プログラミング教室の開催です。スクラッチという遊戯感覚で扱えるプログラミングゲームがあります。海外では小学生向けのプログラミング教室でも多く利用されています。小さい頃からプログラミングに興味を持ってもらうことで、将来丹波市に残ってもらえるIT技術者の育成につながると考えました。

丹波市には美しい自然、食材、そして温かい人情があります。ウィーンの森に勝るとも劣らない自然豊かな森の国、そして大都市からもアクセスしやすい場所となっています。進学などで丹波市から転出した人のUターン、丹波市の環境の良さに魅力を感じた都市部のIターンの希望者が増え、丹波市の活躍人口が増加することを期待しています。ご静聴ありがとうございました。

角野　どうもありがとうございます。では、高校生もう一人です。増田莉子さん、お願いします。

兵庫県立柏原高等学校 増田 莉子

増田 私は山好きの祖父に連れられて、丹波や兵庫のたくさんの山に登ってきました。ちょうど昨日も祖父と一緒に登ってきました。そこでは、祖父は、とてもたくさんの自然のことについて、私に教えてくれます。「この実は食べられるんだよ」とか「この木は、昔こんなことに使われていた」とか「この木は、こんな虫が好きでよくこの木の近くに来れば、こういう虫が集まっているんだよ」とか、私はそこでオオムラサキについても知りました。また小学校の授業ではオオムラサキのサナギに触ることができ、サナギに触ったときにブルブルと震えて、とても感動したのを今でも覚えています。私は、その時、「丹波市には、こんなにきれいな蝶々がいるんだ。丹波市には、こんなにきれいな蝶々が巣立つ森があるんだ。こんな素敵な森を大切にしなければいけないな」と強く思いました。私も友達も小さい時からおてんばで、川や山ですずっと遊んできました。その川には、きれいな水にしか棲めないといわれるサワガニや蛍がたくさん棲んでいました。そんな蛍やサワガニが身近にいるという環境を、私は何も思わずに育ってききましたが、大きくなるにつれて理科の教科書などに出ていて、すごく驚いたのを覚えています。そんなきれいな自然が残る丹波であるのは、大人の皆さんが今まで大切に丹波の森を守り、育ててくださったからこそだと思っています。高校生の私たちは、今から発展し続ける世界と一緒に丹波を発展させなければいけません。でも、そこでは皆さんが守り育ててくださった森をずっと大切にしなければいけません。私たちは、素晴らしい丹波の自然の中で暮らしています。私は、もっと若い人や小さな子どもたちに丹波の自然に慣れ親しんでほしいと思っています。丹波の自然に慣れ親しむことで自然に愛着がわいて、愛着がわくことで大切にしたいと思うのです。その気持ちこそが丹波の自然を大切に、世界の発展とともに自然を守り続けるという大事な仕事をしようと思う1番の原動力になるのではないのでしょうか。私は、大きくなっても、ずっとこの自然の素敵な丹波に住みたいと思っています。そのためには、私たちから丹波の森を守り育てていこうという強い意志がなければいけません。私は自然を豊かに、そして、きれいなままで守り続けることで、これが可能になるのではないかなと思っています。

角野 どうもありがとうございます。ここでちょっと予定を変更しまして、続けて大学生お二人に話をしてもらいたいと思います。ちょうど今日は、この中庭をはさんで、あちらの多目的ルームで丹波大学連携フォーラムというのをやっております。たくさんの大学生が来てくれているんですが、そこを抜け出して2人の大学生がこちらで発表をしてくれます。まず、はじめに高本和樹さん、お願いします。

関西学院大学 高本和樹

高本 改めまして関西学院大学の高本和樹と申します。本日は、このような大きな式典にお呼びいただき、誠にありがとうございます。

今年で丹波の森構想30周年、また、僕たち関西学院大学と柏原が関わり始めて、ちょうど10年の年になります。関学が柏原での演習としてやってきたことは、顔出しパネルであったり、空き家の再生事業を考えたり、また、皆さんご存じだと思いますが、「かいばらいと」というライトアップイベントも行ってきました。僕自身、昨年と今年と柏原に関わってきました、昨年は徒歩地図を作り、今年はまちづくりイベントを開こうと考えています。僕もこの柏原に1年半という短い間ですが関わって、きれいな町並みで、また人が本当に落ち着いていて、すごく好きになりました。けれども、僕はこの柏原をより良くしていくために、もっと僕たち学生と柏原の地域住民が関わり合えるような町づくりが必要であると考えています。学生が地域住民と関わっていくことで、より地域住民の声を聞き、地域住民も学生の声を聞くことでより町に愛着がわきます。町に愛着がわく人が多くなることで、より町は活発になり、長年続いたイベントであったり、よりアクティブな活動を行うことができるようになります。

最後に僕の考えですが、町の最小単位は人だと考えています。人がいなければ産業も生まれませんし、町を活性化させることもできません。僕の夢ですが、人と人とが繋がり合って成長するような町づくり、このような町づくりを丹波地域で行っていったら良いと考えています。ご静聴ありがとうございました。

角野 どうもありがとうございました。それでは、もう一人、大学生の岩崎智彦さん、よろしく願います。

神戸大学 岩崎智彦

岩崎 皆さん、こんにちは。神戸大学の4年生で、大学にも通いながら篠山市の地域おこし協力隊の学生隊員として活動しています岩崎智彦です。僕は、農村まちづくりについて勉強したいという思いで、神戸大学の農業経済の分野に入学しました。そこで先輩の勧めもあって、「にしき恋」という篠山市西紀南小学校区で農業ボランティアが地域の地区祭りとか、小学生や中学生との交流を行う、そんなサークルに入りました。自然の豊かさや人の温かさにふれて、気づいたら毎週末、篠山に通っている、そんな学生です。2年生のときにサークルの代表を務めて、100人を超えるサークルメンバーを束ね、地域の方との交流をさらに加速していきました。サークル活動を通して地元の方と話をする機会が増え、そこで地域の方がコミュニティの集まる場所がないだったりとか、世代間の交流が希薄になっているだとか、様々な課題を聞くことができました。しかし、一人のサークルメンバーとして解決できることは小さなことで、もっ

岩崎 と地域に深く関わって解決につなげたいなという思いが増えまして、今年の4月から篠山市の地域おこし協力隊として、実際に篠山に移住して生活をしています。活動もボランティアをしています。活動内容としては、1番の目標が地域のコミュニティスペース作りです。長年空き家だった古民家を改修して、地域の若者とか、地域内外の人の交流できる、そんなスペースを作っていきたいと考えています。現在、地域の30～40代の小中学生のお子さんを持つお父さん、お母さん世代など次世代の人たちとプランを立てて、実際に再来年から改修して、コミュニティスペースとして活用できるように現在、構想をねっているところです。他にも長年関わっている「にしき恋」のメンバーと地域の人をもっと繋げる活動を行っています。例えば、篠山市で狩猟活動している漁師さんとか、学生と一緒にタイアップして、ジビエに料理を提供したり、後は篠山市にある無人駅でマルシェを開いたり、活用に関するワークショップを実施したり、そのような活動を行っています。僕は福岡の出身なのですが、丹波篠山を大学に入るまで知りませんでした。しかし、実際に足を運んでみて、自然豊かで温かい人たちがいっぱいいる、そんな丹波篠山、そして電車で1時間でこれる、すぐ来れる田園風景にすごく愛着をもって移住までしてしまったという感じです。これからは、篠山の魅力をどんどん発信して行って、そして多くの学生が篠山に足を運んで活動できるような体制をつくっていったらいいなと思います。ご静聴ありがとうございました。

角野 ありがとうございます。中瀬先生、ここまで高校生と大学生と話を聞きました。いかがでしょうか。

中瀬 川合さん、たくましい。IT、いいですね。だから基本的に上勝町と勝山市。これは何かあるかという、まちづくり会社とまちづくりNPOがあるんです。それがすごい贅沢で、丹波でぜひこれを研究してもらって、ぜひやってください。私、大学にいたときにずっとプログラムを作ってたんです。私が生きている間に絶対に日本人は宇宙に行かないと思っていて、宇宙で栽培する植物工場を研究する。だから稲を上から下にぶら下げて吊して脱穀するでしょう。そんなことを一生懸命プログラムしながら、それが今、南極の白瀬基地の植物工場になったんです。そういうのをプログラムしながら産業と位置づけたら面白いなと思いました。

増田さんは、この正面にいっぱいエノキが植わっているやろ。来はる道、ずっとエノキなんですよ。あれは河合先生が植えろ、植えろと言わはって、オオムラサキのために。河合先生もこだわってはって、この前はエノキで、この後ろはクヌギやいうて、あの先生がいはったから、ここにオオムラサキができるようになったということで、共生、ともにということについて、もっとしっかりやってくれはったらええと思う。

高本さんと岩崎さんの話を聞いていて、私はコミュニケーターと変な名前をいただきましたが、このお二人はヘビーリピーターと勝手に名前を付けました。このヘビーリピーターというのがもっと丹波に来てくれたらいいんですけどね。まさに週末に丹波に来はるというのはウィーンの森とまるで一緒じゃないですか。ウィーンの森も金曜の夜から日曜の夜まで、ずっといて、また月曜に帰ってくるのがウィーンの森なんです。そういう意味では、丹波の森をウィーンの森と同じようにリバイバルで、正しい概念でお二人はやってくれるんだなという気がします。

角野 どうもありがとうございます。ここまでは、現在学んでいる最中の若い世代でしたけれども、ここからは実際、丹波ですごく活躍されている方々のお話をちょうだいしたいと思います。まずIターンで活躍されていらっしゃるという聞いております岸田万穂さん、お願いします。

移住者 岸田万穂

岸田 こんにちは。今ご紹介いただきました岸田万穂と申します。私は篠山市の福住という地域で地域起こし協力隊として活動させていただいております。専門は木工を仕事にしています。普段は地域の木材とか竹とかを使って、今動いているプロジェクトとしては、たとえば廃校になってしまった旧福住小学校の内装のリノベーションや竹を使った農業用のビニールハウスの建設であったり、竹を使ってのバス停の改修、あとは最近では造園をしたりとか、物を作る家具とか器とかもちろん木工で作っているんですけども、物に限らず最近では空間も作るということも仕事でさせていただいています。出身は神奈川県ですけども、そこから移住してきて、私の素晴らしいなと思うところをまずは少しご案内させていただきたいと思います。もともと大学では民族学とか地理学、歴史学の専攻で学んでいたもので、とにかく丹波地域というのは、それぞれの地域で歴史的背景と景観の成り立ちとか、お祭りなどが本当に特色豊かでさまざまないろいろあって、非常に意欲的で素晴らしい地域だと感じております。普通にお散歩をしているだけで、とても楽しい。こういった文化的な資産ももちろんなんですが、美しい自然や景観といったものが非常に残っていて、活動するのにあたっても景色とか、人々の生活からすごくインスピレーションを受けて、創作意欲につながっているなと感じております。あとは、とにかくご飯がおいしいというのが非常に魅力的なところでありまして、そんなに贅沢な食事をしているというつもりは、まったくないんですけども、産直であったり、地域のスーパーであったりと売っている食材も、そもそものレベルがとても高いと申しますか、本当においしい食材にあふれていて、近所の方とか活動している地域で歩いていたら声をかけていただいて差し入れをいただいたりだとか、本当に旬のおいしい食材をたくさんいただいて、毎日お金もそんなに

岸田 かけてないんですけれども、贅沢な食事をいただいでいて、ご飯を食べるたびに今日もとても皆さんに生かされて、おいしく過ごさせていただいてありがたいと感じるような日々を過ごしております。ご飯の美味しいがゆえに難点としては太ってしまったというのがあるんですけれども、本当にいつも感謝して働かせていただいています。作家としては、本当に食が豊かな地域ですのでいろいろ作らせていただいでるんですけれども、なかでも皆さんの素晴らしい食文化を少しでも彩れるような器とかカトラリーの制作なんかも今後力を入れていけたらいいなというふうに考えています。あと地域で活動をしていて感じることを少しお話をさせていただきます。先ほど廃校のリノベーション、内装をさせていただいているという話をさせていただいたんですけれども、内装の工事とか施工だけではなくて、実は福住小学校の跡地活用運営委員会という会の事務局長もさせていただいております、全体の学校の運営であったり、プランニングというものも仕事でさせていただいております。小学校の活用を考えていくにあたって、すごく大変で苦労したところもあるんですけれども、いかに地域のことを自分の足元のことをよく調べて、魅力を発掘して、かつ小学校区だけではなくて、少し大きな地域を感じてつながりをもたせられるか、ほかの地域ともつながりをもたせられるかということが非常に重要だなというふうに感じております。たとえば、篠山市の私が担当しています福住地区、東部地区は、学校の統廃合が進んでいて廃校がいくつもある地域です。それぞれの地域で廃校の活用というものをがんばっているんですけれども、近隣と同じような機能を持たせてもお客さんの取り合いになってしまったりだとかいうこともあって、できるだけ競合せずにいかにそれぞれの地域の良さを引き立てあって、助け合って、良さを活かしていけるようにするのだということを考えて行動するというのが非常に大事だなと感じております。そういった視点を誰かがもつということが、そういうことによって相乗効果で地域だけじゃなくて、ちょっと広い地域で見ても良くなっていくんだなということを活動して感じてることが多いので、こういった今回、丹波地域という大きな形で久しぶりに大きな場に来させていただいたんですけれども、こういった地域でいろんな活動している方々やがんばっていらっしゃる方々のお話を聞いたり、意見交換をさせていただくということは非常に大切だなと感じている今日この頃です。このような場にお呼びいただいて、今日はどうもありがとうございました。

角野 ありがとうございます。では、もう一人、Iターンされてきています小村香織さん、お願いします。

移住者 小村 香織

小村 みなさん、こんにちは。春日町大路地区で農薬や化学肥料を使わず露地で年間100品種ぐらいの商用多品目野菜を栽培しております小村香織と申します。私は農家ですので農業中心のお話になります。どうぞよろしくお願いいたします。私は2014年に神戸から農業をするために丹波に移住してきました。それまでは夫婦共々、農業とはまったく無縁の仕事をしていました。ある日、主人から「農業をやりたい」と告白されました。今まで野菜を作ったことがなかったので、正直戸惑いましたが、植物を育てることは嫌いではなかったので神戸市北区淡河町というところで貸し農園を借り、家庭菜園を始めました。毎週末の土日、約4年間、近所の農家さんに感心してもらったり本気の家庭菜園をしているうちに、野菜を育てる楽しみ、人に食べてもらう喜びを知り、農業を目指そうと思いました。新規就農をする地域は全国に数多くあり、その中で丹波市を選んだ理由は自然の豊かさ、有機農業を推進しているというのが大きな理由です。丹波市は有機農業に対する理解もあり、若手からベテランまでたくさんの有機農家がいる、最先端の有機農業の技術や情報を学ぶことができるので、勘や経験のない新規就農者でも農業を始めやすい地域だと思います。もう一つの理由は山です。神戸には、いつも後ろ側に見守っている六甲山という大きな山があります。六甲山を見上げては時間を知り、季節を感じていました。丹波にはたくさんの山があると思うんですけれども、六甲山と同じような存在感のある春日町大路地区の三尾山は、農業をする場所の決め手となりました。おそらく丹波に移住してきた人の中で自分のお気に入りの山や風景に呼ばれてきた人も多いかと思います。私のようにまったくつてのない状態で移住してきた女性農業者は丹波でたくさんいます。家と圃場の行き来、家族や地域の方との会話だけで一日が終わってしまうポツンとした生活だったと思います。そのポツン、ポツンが集まり、情報や悩みを共有することで「なんだ。私一人じゃなかった。みんなもがんばっているし、がんばろう」と思うようになり、だんだん農作業も楽しくなってきました。私たちが楽しく農業をする姿を見て、家庭菜園からスタートし、そして本格農業を目指していく多くの女性農業者が増えるきっかけになればいいなと思っています。現在、春日町大路地区では空き家、それから耕作放棄地の問題を解決しようという活動が行われています。丹波に滞在し、体験し、食事をして、丹波の魅力を知ってもらい、丹波に移住してもらおうという民泊事業です。できることから地域のみんなでやろうという思いから、まずはその準備を行っています。私は、この大路地区で女性が一人でも農業ができる環境づくりができないかと考えています。女性が一人でできる農業というのは、誰にでも、つまり高齢になっても農業が続けられるということです。20年、30年後も大路地区で楽しく農業をして生活するためにも、しっかり考えていかなければならないことだなと思っています。そして、この思いが丹波地域に広がることを願っています。以前、参加したビジョン委員会を通じて

小村 知り合うことができた春日町平松地区の森林愛好会は、山や竹林の整備をしています。竹というのは、とても分解が遅いため、切り倒した竹を処理するのに竹を細かく粉碎されていました。この竹の粉というのは、畑の土壌改良にとっても有効であるということは、既に農業界でも有名なことです。林業では厄介者の竹が農業では資源として有効活用されるなど、山々に囲まれた地域だからこそ、農と林がうまく連携できると思います。これからは農業だけではなく、林業だけでもなく、お互いが協力する農林業として丹波は発展するべきだと思っています。私からは以上となります。どうもありがとうございました。

角野 どうもありがとうございました。次に現在も地域でご活躍いただいている方のお話をちょうだいします。今井進さん、お願いできますでしょうか。

地域活躍者 今井 進

今井 みなさん、こんにちは。先ほどご紹介いただきました雲部まちづくり協議会の今井と申します。どうぞよろしく願いいたします。今から20年ほど前になりますでしょうか。雲部まちづくり協議会を立ち上げたときに記念講演として、河合雅雄先生をお招きをしました。そこで先生がおっしゃったのは、この雲部小学校の周辺は非常に豊かな里山がいっぱい残っている。そこにはワラビもフキも生えている。これをどうか大事にして、ぜひまちづくりの基本にしてほしいとおっしゃったのが、本当にごく最近のように感じられます。それが残念でしたが14年後に、この雲部小学校というのは子どもたちの数が減りまして、最終的には廃校という形、いわゆる閉校という形になってしまった。私たちは、あえて閉校という言葉は使わない。これは、あくまでも一旦学校は閉めるけれども、そこには、また新しい息吹を吹きかけて、そして、もう一度子どもたちの声の聞けるこの聖地にしようということで取り組みを進めて、今年で5年目になります。たくさんの方がいろんな立場でお越しになりますし、たとえば、かつて使っておりました職員室はレストランに、校長室は地元で採れた野菜や皆さんが一生懸命作られる手仕事の商品を並べて、皆さんに提供させていただく。また子どもたちが使っておりました六つの教室は、それぞれ靴屋さんであったり、あるいは皮でかばんを作られる方であったり、丹波布を織られる方であったり、木工をされる方であったり、あるいは洋服を仕立てる方であったり、そういう形で使っていただく。そして都市と農村の交流を深めていこうということで、今取り組みを進めております。先ほど岸田さんのお話もありましたけれども、東部地区といわれる篠山の日置、後川、雲部、福住、村雲、大芋という地域は、それぞれ小学校の統廃合がなされまして、今それぞれの地域でそれぞれの特徴をもたせた地域づくりを学校を中心に進められようとしております。私たちも定住促進と、さらにお話が出ましたように週末移住、これを目指して、ぜひ使っていただいて、さっき言いましたそれぞれの地域がお互いに結

今井 びあいながら、素晴らしい地域づくりができればと思っています。ただ、課題はたくさんあります。三つあげますと、たとえば私たちの雲部まちづくり協議会が運営をしています里山工房くもべの場合は三つの課題があります。一つは、次世代を担っていく後継者をどのように育てていくのかということが一つ。それから、もう一つは、やはり今はコミュニティビジネスを目指していますから、集客とできるならば経営が成り立つような、そういうシステムづくり。そして、もう一つは、今もお話が出ておりました、この丹波地方で採れる豊かな農産物、あるいは野の物、山の物を活かした地産地消のそういうものを提供していくレストランを目指していきたい。そして都市と農村がさらに手を結んで田舎から発信し、あるいは都会から発信されるものをうまく情報を収集しながら進めていく。そして、今、山は確かに厳しい状況になっておりますが、みんなで山づくり、あるいは山に木を植え、そして育てていくような、そういうまちづくりを目指していきたいなと思っております。ご清聴ありがとうございました。

角野 今井さん、どうもありがとうございました。続いて、鴻谷佳彦さん、お願いいたします。

地域活躍者 鴻谷佳彦

鴻谷 丹波市で飲食店を3店舗ほど経営をさせてもらっている鴻谷といいます。僕、そういえば高校時代、ここに高校生いっちゃいますけれども、進路をどうしようかなと思って、もうこんな何にもないようなところは出ていきたいなと西宮に行かせてもらいました。西宮で料理の修業をさせてもらったんですけど、父が病気で倒れて帰ってきてくれと言われて帰ってきて、家業を継いだんですけど、こんな何もないところで仕事をしていてもじゃあないなと思いつつ、町でお店していても人も歩いてないし寂しいなと思いつつ仕事をしながら、それこそ森林動物研究センターというのが近所にできて、その時に初めて河合先生とお会いすることがあって、「この人、すごい人やからしゃべってみ」と言われて、元猟師と最初は紹介されたので仙人みたいな猟師さんがいると思って、「銃とか使われるんですか」という話からいろいろ話をしていたら、鹿肉というのが、いまどんどん悪いことをしているけど、食べたものすごくおいしいんやと力説していただきました。当時、鹿肉というのは臭くて硬い、おじいちゃんがお酒のアテに食べている肉やとしか思っていなかったもので、初めて食べたときにもものすごくおいしくて、「これや」と。みんなより先にいい食材が知れたと思って、それから鹿料理専門店というのを丹波市柏原町に開きました。当初は何もないと思っていて、柏原の町も人が歩いてないとみんなに言われて、特に鹿肉なんて誰が食べるんみたいな話やったんですけど、なぜかすごく僕は魅力を感じて、みんなに鹿肉を食べさせたいと、食べさせてやるぞと思って、やり始めました。最初は、お客さん

鴻谷 は怖々来ていたと思います。だんだん増え始めて、年間8000人、1万人近くお客さんが来るようになりました。8年間続けてきました。どんどんやっている間にお客さんからいろんな話を聞いて、「すごい町やね」とか「柏原は、いい城下町ですごく景色もいい」とか言うてくださっていて、空間とか景色すらごちそうに、都会の人からするとなるんやと思いはじめ、先ほども小村さんが言われていましたけど、春日町には三尾山という山という字を漢字で書いたそのままみたいな山がありまして、僕もその山に呼ばれて、春日町でお店を開くことになりました。春日町の大路地区なんですけれども、大路に行って改めて思うのが食材がものすごく良くて、近所のおじちゃん、おばちゃんが「これ、料理に使いや」と持ってきてくれるんですけど、それを都会の人に出すとキャビアやフォアグラを食べるかの如く食べてくださって、さらに旅館も、そこで宿泊してほしいなと思ってやっているんですけど、その旅館も最初はみんなに大反対されて「こんな田舎で何もないようなところで誰が泊るん」と言われてたんですけど、これが結構人気で、僕も不思議やったのでお客さんに「何をしに来てるんですか」と聞いてみました。「小学生が連なって歩いている姿を見るだけでも心にくる」と。ここだけの話ですけど、朝食は近所のおじちゃんやおばちゃんにもらった食材ばかり使っているんですけど、みんな「朝食から、こんなごちそう食べていいの」と感心してくれるんです。すごくいい商売ができたなと思っています。それを広めるために、育成するために今、高校生に6次産業という農産物を付加価値をつけて売るという手法を教えています。高校の授業というのは受け身なんです。教えられて聞いている、それだけで終わってしまうので、就職してからも働いてあげているとか、受け身なんです。やらされているとか。そういうのを変えていきたいなと思って、どんどん提案とか、自分らで考えさせるということを今やらせていまして、その時に市長とかも授業に参加してもらったり、議員の方々にも参加してもらっているんですけど、市長の時でしたら市長に提案しろと。何か町が良くなるように皆で考えて提案しろというのをやっていて、その中で主体的に会社の中で自分たちが提案できたりとか、ただやらされているというだけじゃなくて、提案できる人材をどんどん育てていきたいなと思っています。今、はっきり言って何をしたら成功だとか、お金をいっぱいもらったら成功なのかとか、いや不幸な人はいっぱいいるとか、勉強がむちゃくちゃできて、すごい大学いけたから幸せなのか、めちゃくちゃ仕事をさせられているとか、何が幸せかわからない時代に結構なっていると思います。その中で氷上高校の授業の話なんですけれども、授業に来てもらった近所の人の話を、会社で働いている先輩とか、若手経営者の方を授業に招いて経営のことをしゃべってもらうんですけど、その中で成功体験とか失敗体験とかをちゃんと話すように言っています。先生からしたら「これ何の意味があるの」みたいになっているんですけど、それが結構子どもの進路に影響を及ぼすんじゃないかと思っています。高校生で考えられる仕事の数なんて、本当に

鴻谷 知れているので、いやこういう仕事があるんだと思ひ浮かべる仕事、こういう仕事だとか、どんどん仕事の幅を広げてもらったり、成功・失敗の体験談を聞いて、自分の力で考えていってほしいなと思って、そういうことを進めています。以上です。

角野 どうもありがとうございました。それでは最後の方になります。お待たせしました。丹波地域ビジョン委員会の伊勢隆雄さん、お願いします。

丹波地域ビジョン委員会 伊勢隆雄

伊勢 今現在ビジョン委員会の委員長を仰せつかっております伊勢と申します。今日の発表はビジョン委員会のこともあるんですけども、私自身、自治会長会の会長とか、生産森林組合の組合長もやっておりますので、どちらかといえば、そちらの方がメインの発表になろうかと思ひます。

まず6項目についてなので、端折って説明いたしますけれども、まず第一点目につきましては、昔私たちは山に行ったときに夏の間は4日間ほどは勤労奉仕で出ていたんですけども、その時の長老から「お前たち、今の間に山を覚えておかんと、大きくなったら山の境がわからへんぞ」とくどく言われたんですけど、その時は「そうかな。そんなん覚えられるかいな」ということで、それがそのまま今になっています。まるっきり境がわからないわけです。当時の植えた木が40～50年経ちますと、境がさっぱりわからないということで、私が生産森林組合の組合長になりまして、これは、やっぱり引き継いでいかないといけないなということで、いろんなことを考えまして、これは補助金の関係もあるんですけども、篠山市のGPSをお借りして、杭をこれも無償でしていただいて、まず境界の明確化ということを行いました。1本1キログラムの杭なんですけれども、それを背中に15本背負って山へ登るいうたら、もうフウフウです。10本ぐらいを登ったり、下りたりしながら進むんですけども、それをGPSで全部入力していくわけです。最終的には杭1300本を打ったんですけども、それを一つひとつに番号をうちまして、GPSで入力した一つひとつにはカシ米尔2というソフトが入力されているので、それをグーグルアースに落とし込むわけです。そのグーグルアースに杭の1番とグーグルアースの1番を合同させることによって、たとえば、今日600番の山へ行くとなると、今現在スマホで見られますので、スマホで600番のところに行きますとだいたいの位置がわかりますので、そういうことをしています。要は、若い人に山の境を知ってもらおうということ、それとともにやはり山に少しでも入ってもらえるきっかけをつかんでもらおうということで取り組みました。これが3年間かかりまして、去年やっと終わったところです。72ヘクタール分をやりました。これは森林組合の境界の明確化をしましたので、今度は個人山をやりたいということで、個人山なんかは我々到底手をつけられないと思って、兵庫県の森

伊勢 林組合連合会の方の協力を得ながら始めました。一番ここで感心したのは通知を出すと東京あたりからでも来る70歳以上のおばあさんが、せっくなので山の境界を確認するためにやってきましたと山の中腹まで上がられました。そうすることによって、今まで放置されていた山を少しでも知ってもらうということで、非常に成果が上がったのではないかと考えております。

それと3番目は、間伐についてですけれども、これも今40年、50年経った木を登って行って間伐してといっても、チェーンソーを使うということなので、チェーンソーなんか相当慣れた人でも怖いので、専門家にやってもらわないとあかんのです。おかげで森林組合と個人山の間伐、これは育成間伐なんですけれども、すべて私たちの集落は終わりました。

それから、これも補助金なんですけれども、里山整備として「住民参加型里山林再生事業」で、特に176号線、私、篠山市の大山地区なんですけれども、鐘ヶ坂を越して少し行ったら、国道筋に右左に結構竹藪があったんです。竹藪が交通に悪いんじゃないですけれども、視界が非常に悪くて、皆さん誰も「こんなもんや」ということで、私にしたなら、なんとかこれをできないかなということ、竹藪の皆伐を行いました。それこそチップを使って、全部粉碎して、それを堆肥に使ったり、いろいろなことに利用できます。3ヶ所やったんですけれども、当初は刈っているときは、うっそうとしているけれども、刈った後はきれいになったと言われました。今見ますと普通の景色になっておりまして、それが非常にいいかなと考えております。

それと6番目としては、これも補助金でいろいろしたんですけれども、「篠山市緑化活動支援事業」とか「宝くじ事業」ということで桜を植えました。特に大山の場合でしたら金山から見ますと、桜が大山川沿いに非常にきれいに咲いています。吉野桜とかが非常に大木になって、倒れたりもしていますが、私たちが植えようとしたのは、おかめ桜といって、ソメイヨシノより1週間から10日早く咲く桜なんです。それを、これも事業の中の一環として、今現在は30本ほどは植えているんですけれども、昨年は50本植えました。今年の冬、30年度の冬には60本の苗木を頼んでおります。再来年は100本なので50本、50本を植えて、一気にというの難しいので、おかめ桜を植えました。おかめ桜を植えるのも小学校の緑の少年団とか、他地域の方を呼んできて一緒に植えて、その桜を、たとえば来年ぐらいでしたら、自分で植えた桜を都会の人が見に来るとかで都会の人がまた寄ってくれるんじゃないかなということで、おかめ桜を植えました。ぜひとも近い将来、176号線のトンネルを越したあたりから右手を見てもらったら、おかめ桜の可憐な花が咲くようになったら、ぜひとも寄ってください。

それと最後ですけれども、ビジョン委員会としての報告も委員長ですから一つはしておかないとあかんということ、させてもらいますけれども、今日ここに新聞があ

伊勢 りますように「活力ある地域を、時代を子どもたちに」ということで、「坂尻里山つくり会」というのが真ん中に載っているんですけども、なんでこれを説明するかといいますと、ここの自治会の若いママさんたちの会なんです。ビジョン委員会に入られて、私たちビジョン委員会の中で何か助けてほしいと。女の人だけで3名、若いママさんたちが入られたんですが、なんとか子どもたちのために里山を開拓していただきたいと。プロセスの中で坂尻のところを1反ぐらいですけれども間伐をして、その間伐をした木を椅子にしたり、ブランコにしたり、ベンチにしたり、切った木はすべて廃材活用はしています。ということで、その木を後は椎茸を植えたりして、今ちょうど椎茸がたくさん出ているという報告を聞きましたけれども、そのあたりは報告を見てもらったらわかりますように、市長も言われましたように、まさに丹波の森構想の里づくりということで、地域あげての里づくりの一つの良い見本だということで、盛んにいろいろなところから見学に来られるらしいので、少しでもお手伝いできたことを嬉しく思っています。ビジョン委員会として来年はないんですけども大事って言えば大事で再来年までなんですけど、我々は今、内容的には申し上げられませんが、ワクワク、ドキドキで楽しみでやっています。また実行委員会の方もぜひともビジョン委員会に入っていたきたいと思います。

角野 どうもありがとうございました。地域で活躍をされている方々、お話をされたいことがたくさんありますのに大変時間がおして申し訳ありません。現役の方々のお話を聞いて、中瀬先生、いかがですか。

中瀬 がんばりはりましたね。移住者と地域活躍者。移住者のお二人の話を知っていると、やっぱり女性パワーがすごいなど。今働いている淡路景観園芸学校の学生を見ているようで、男の子はじっとおとなしくしていて、女の子はみんな語って、いろんなイベントをやってくれる。ぜひ、これから女性の方々ががんばってください。それを思いながら10年前の、ここで20周年したときの「つたの会」の皆さんが料理をしてくださいました。そのときに36種類ぐらいの食材を使って、まさに今日お話しがあったような丹波の産物を使ってやってくれたことを覚えています。もう一つ、地域活躍者と移住者の話を聞きながら思ったのが、もう一回、Iターンの方々のノウハウ、どう活性化するか。いろんなアイデアを持った方々がIターンされてますから、一回、Iターンの方々のノウハウをどう生かしたらいいか。そのときに今井さんが言っておられましたが、地域の歴史とIターンの方々の融合点をどうしたらいいか。私もいろんなところで小学校の統廃合に立ち会うんですけども、丹波の統廃合をされる地域は、ものすごい歴史があります。宝塚とか伊丹の統廃合をする学校というのは、Uターンの小学校がなくなっていくんです。丹波の小学校の歴史とIターンの方々のアイデアを生

中瀬 かして、しっかりとやられる時代が来たのかなと。最後に丹波ビジョンの方で GPS の話がありましたが、もうこの時代ですね。この前、中国の揚州に行ってたんですが、空港にすべて 아이폰と GPS で乗り降りから決裁が終わっている。すべて GPS とスマホでやっていますから、丹波はもっともっとこれを先進的にやる時代が来たなと。以上です。

角野 どうもありがとうございました。今日は、このようにたくさんの方に登壇いただいて、いろんな「もりびと」のいろんなライフスタイルをご紹介いただきました。そういうお話を聞いているにつけて、30年前につくられた丹波の森宣言というのが、このような形で具体化していっているということと同時に、今日冒頭の式典でおっしゃった全然色あせないようなこと、この森宣言のメッセージというのは、今言っても全然、時代遅れでも何でもありません。そのとおりだということが確認できたような気がします。ただ当然のことながら、この30年の間に社会の情勢は、いろいろ変わってきています。今のGPSをはじめ、技術の発達というのは極めて著しいですし、また国際化というのも、ものすごく進んでいます。また人口の問題、活躍人口の問題というのも出てきてまして、この30年前の森宣言を、この30年の間にどのような成果があったかということを確認した上で、そして、この30年、それから、これからの30年の中でどのような変化が今まであり、これからあるのかということを考えて上で次の地域づくりにつなげていく必要があるんじゃないか。つまり丹波の森宣言の変わらぬ価値、それから環境の変化に伴う新しい価値を見出しながら、新しいまちづくり、地域づくりの施策を提案し、そして、それを実行していく。さらに、その担い手の問題が極めて重要だと思います。今日は、たくさんの方の担い手の方に登壇していただいておりますけれども、この担い手の、地元の中からも、あるいは丹波地域の外からもどんどん呼び寄せるといいますか、来ていただく。そのためには、丹波地域の誇り、丹波のプライドといったものを自分たちで確認し合い、そして、それを他所の地域の人たちにも声をかけて、そして、来ていただく。そんな仕掛けでまちづくりを今後続けていく必要があるんじゃないかなと思いました。そういったことを改めて確認させていただいた後半の皆さん方の発表だったかなと思います。本当に今日は、ありがとうございました。

司会 発表いただきました皆さん、素晴らしいメッセージをありがとうございました。関係者の皆様にとっても大きな励みとなったことと思います。発表していただいた皆様に改めて今一度大きな拍手をお願いいたします。



ドングリの植樹



オープニング コーラス



丹波の森のすがた上映



来賓の皆様



実行委員



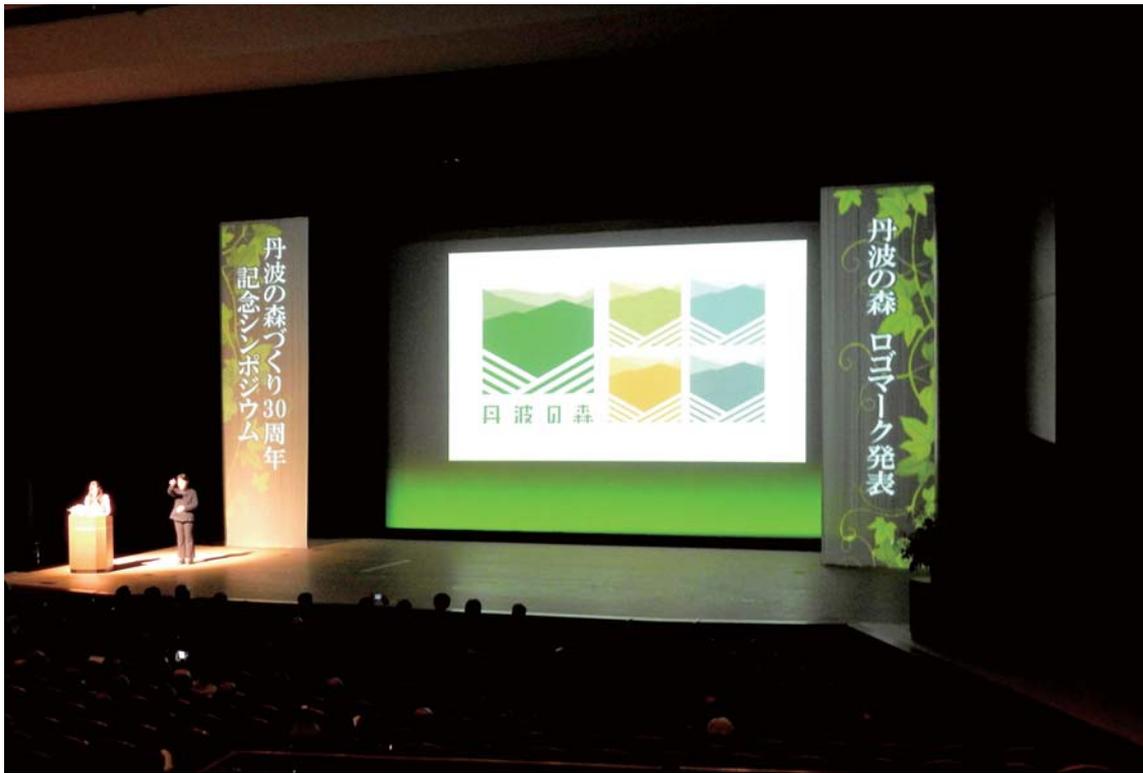
小学生の発表



中学生の発表



丹波地域ビジョン委員の発表



丹波の森 ロゴマーク発表



実行委員長あいさつ



お茶席の様子



まるいの ちーたん はばたんの協働

ロゴマーク採用作品の決定

◆最優秀作品



丹波国森

丹波の森づくり30周年記念事業スケジュール(平成29年度～平成30年度)

年月	平成29年12月		平成30年1月		2月		3月		4月		5月		6月		7月		8月		9月		10月		11月				
	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	
30周年記念事業	シンポジウムの開催 (11/18) (於:丹波の森公苑)								← 来賓スケジュール調整・来場者(学生・青年・シニア)依頼		← チラシ・ポスター作成				★来賓案内		← チラシ・ポスター貼付		← 開催準備・打合せ(役割分担、関係先との調整 パネル・リーフレット作成等)				★11/18開催		開催日以降 パネル等を 県民局・協会・各市等で展示		
	映像作成(DVD) (A これまでの取組) (B 課題と今後の方向性)								← 映像業者決定・打合せ		← 映像作成(A, B)						A映像試写 ※実行委員会 (意見提出)		A映像完成				B映像試写 ※実行委員会 (意見提出)		B映像完成		○映像放映 (11/18) 映像を県民局・協会・各市等の施設や関連事業で放映
	ロゴマーク・シンボルマークの作成 (事務局:県民局)		☆専門委員・選考方法の決定		← 委員就任調整・案内等				← 公募仕様書案提示		☆第1回 公募仕様書決定 ※実行委員会		☆公募開始				☆公募締切		☆第2回 1次審査 ※実行委員会				☆第3回 最終審査(マーク決定) ※実行委員会		☆マーク発表 (11/18)		開催日以降 マークを 県民局・協会・各市等で使用
関連する主な記念事業	協会 (丹波の森公苑) (丹波年輪の里) (丹波並木道中央公園) (ささやまの森公園)						★なみきみちマルシェ(並木道)		★里山まつり(ささやまの森)		★GWフェスタ(年輪の里)				★里山コンサート(ささやまの森)		★国蝶オムラサキ放蝶会(森公苑)		← ★音楽祭「ア・ルティエ」(森公苑)		← ★なみきみちまつり(並木道)		← ★花と緑の講習会(仮称)(森公苑)		← ★まんぷく!シェパード(森公苑)		→
	県民局 ※FM(恐竜化石 フィルムミュージアム構想)						★FMキックオフシンポジウム		★やきもの里春ものがたり(陶芸美術館)		★森を未来に なくフォーラム		★フリーハイキング						← 花と緑の啓発(仮称)		← ★フリーハイキング		← ★丹波焼陶器まつり(陶芸美術館)		← ★FM空撮イベント		→
<p>(注)関連する主な記念事業は、現段階における協会及び県の想定する事業を記載している。市・団体の事業についても記念事業の位置づけを検討・調整していく。</p>																											
実行委員会	●第1回(12/19)										●第2回(4/13)						●第3回				●第4回						
	[検討議題] ①規約 ②委員会の進め方 ③森づくりの「これまでの取組」・「課題と今後の方向性」 ④シンポジウムの開催内容 ⑤ロゴ・シンボルマークの作成 ※1 上記①、②を決定、③、④は委員から意見提出を依頼。 ⑤の専門委員、選考方法を決定 ⑤は専門委員の意見を聴いて協議										[検討議題] ③森づくりの「これまでの取組」・「課題と今後の方向性」 ④シンポジウムの開催内容(来賓の決定・来場者の依頼等) ※③のこれまでの取組を決定、課題と今後の方向性は協議継続 ④の内容を決定 [マークの選考] ⑤公募仕様書を決定						[検討議題] ③森づくりの「これまでの取組」のDVDを試写 森づくりの「課題と今後の方向性」 ④シンポジウムの開催内容の最終確認(チラシ、ポスター決定等) ※③の課題と今後の方向性を決定 [マークの選考] ⑤1次審査				[検討議題] ③森づくりの「課題と今後の方向性」のDVDを試写 ロゴマークの仕様書決定 ④シンポジウム開催に係る状況報告 ⑤森づくりの今後の周知等に係る意見交換 [マークの選考] ⑤最終審査(マーク決定)						
ワーキンググループ							●第1回		●第2回				●第3回		●第4回				●第5回				●第6回				
							[協議事項] ③森づくりの「これまでの取組」・「課題と今後の方向性」 ④シンポジウムの開催 ⑤マーク公募仕様書 ※委員からの意見をとりまとめて検討		[協議事項] 同左				[協議事項] ③森づくりの課題と今後の方向性 ④シンポジウムの内容の細部を協議		[協議事項] ③、④同左 ⑤マーク公募状況				[協議事項] ③森づくりの課題と今後の方向性の整理 ④シンポジウム開催準備 ⑤マーク公募取扱い				[協議事項] ③森づくりの今後の方向性の周知方法等 ④シンポジウム開催内容の確認 ⑤マークの使用・周知の整理				

おわりに

実行委員会の会長を務めさせていただきました福本です。私、平成29年の4月に、県民局長として赴任してまいりました。「丹波の森はすばらしい。大切にしたい」在任した2年間、思い続けた気持ちです。

どこにでも身近に里山があり、木々の色が四季折々に変化していく。山のふもとの田畑の稔りの色も変化していく。さらに、郷土の祭りなど個性豊かな文化景観が彩りを添えている。この風景を見ていると、ほんとうに心が和みます。そして、ここに暮らしておられる皆さんは恵まれているなと思います。

こんな気持ちを、地域の皆さんにお伝えすると、「外から来た人はみんなそう言う。ずっとここに住んでいる私には、あたりまえのことで意識したことがない」という返事が返ってきます。そうでしょうか。

30年前に、「この地域の自然と文化は、住民共有の『財産』であり、これらを生かして丹波の森づくりを進めます」と宣言されたのは、皆さんなのです。地域の皆さんは、私よりも、もっともって熱い思いで、丹波の森宣言をされたのだと思います。

ここに赴任してきて、「その熱い思いがどこかに眠ってしまっている。呼び覚ましたい」そう思い、全力を注いで、このシンポジウムを開催しました。伝えたいことは映像などに全て込めましたので、ここでは繰り返しません。丹波の森公苑や両市役所、県民局のロビーでご覧ください。

「ロゴマークを胸に刻んで、もりびと一丸となり、
熱い思いで、丹波の森づくりを進めていきましょう」

そう呼びかけて、おわりの言葉とさせていただきます。シンポジウムの開催にご協力いただいた皆さん、そして、会場に来ていただいた皆さん、ほんとうにありがとうございました。

令和元年 11 月

丹波の森づくり 30 周年記念事業
実行委員会会長（前丹波県民局長）

福 本 豊



丹波の森づくり30周年記念事業実行委員

会 長	福 本 豊	丹波県民局長
副 会 長	角 野 幸 博	丹波の森公苑長／関西学院大学総合政策学部教授
委 員	中 瀬 勲	人と自然の博物館館長／兵庫県立大学自然・環境科学研究所教授
〃	酒 井 隆 明	丹波篠山市長／兵庫丹波の森協会理事長
〃	谷 口 進 一	丹波市長／兵庫丹波の森協会副理事長
〃	大 野 亮 祐	丹波市自治会長会代表
〃	森 口 久	丹波篠山市自治会長会代表
〃	長 澤 光 一	兵庫丹波の森協会常務理事
アドバイザー	垣 内 敬 造	
〃	安 達 鷹 矢	
〃	藤 本 英 子	

ワーキングチーム

森 本 剛 史	丹波県民局 県民交流室次長
鈴 木 景 詩	総務防災課班長
河 合 耕 平	総務防災課班長
小 嶋 祐 二	〃 主査
竹 見 聖 司	丹波篠山市 創造都市課長
近 藤 紀 子	丹波市 総合政策課長
清 水 徳 幸	丹波市 総合政策課長
門 上 保 雄	丹波の森研究所主任研究員
横 山 宜 致	〃 研究員
黒 崎 彰 啓	丹波の森公苑文化振興部副部長
岡 田 和 夫	丹波の森公苑文化振興部副部長
栗 原 利 典	丹波の森公苑副部長
山 中 直 喜	兵庫丹波の森協会事務局長
荻 野 朋 子	〃 事務局員
岸 本 美 鈴	〃 事務局員

丹波の森づくり 30 周年記念誌

令和元年11月発行

編集・監修 丹波県民局・丹波篠山市・丹波市・
(公財)兵庫丹波の森協会

(事務局) 〒669-3309
兵庫県丹波市柏原町柏原5600

兵庫県立丹波の森公苑内
(公財)兵庫丹波の森協会

TEL/FAX 0795-73-0933
E-mail:mori-kyokai@tanba-mori.or.jp



丹波の森

丹波の森づくり
30周年記念事業実行委員会